

首都圏中央連絡自動車道 埋蔵文化財調査報告書14

—木更津市林遺跡・袖ヶ浦市林遺跡—

平成24年3月

国 土 交 通 省
財団法人 千葉県教育振興財団

首都圏中央連絡自動車道 埋蔵文化財調査報告書14

—木更津市林遺跡・袖ヶ浦市林遺跡—



序 文

財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第676集として、国土交通省の首都圏中央連絡自動車道建設事業に伴って実施した木更津市林遺跡、袖ヶ浦市林遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、旧石器時代の石器集中地点や、古墳時代後期から奈良時代の堅穴住居が検出されるなど、この地域における原始・古代の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。この報告書が学術資料として、また郷土研究の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理までご苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成24年3月

財団法人千葉県教育振興財団
理事長 赤羽良明

凡 例

- 1 本書は、国土交通省による首都圏中央連絡自動車道建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書は、下記の遺跡を収録したものである。

| | | |
|------------|--------------------|-------------------|
| 林遺跡 | 袖ヶ浦市上宮田字南原281-1ほか | (遺跡コード229-034) |
| 林遺跡(1) | 木更津市上根岸字花の木403-1ほか | (遺跡コード206-032(1)) |
| 林遺跡(2)・林城跡 | 木更津市上根岸字熊ノ面444-2ほか | (遺跡コード206-032(2)) |
| 林遺跡(3) | 木更津市上根岸字内輪479-1ほか | (遺跡コード206-032(3)) |
- 3 発掘調査から報告書刊行に至る業務は、国土交通省の委託を受け、財団法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 発掘調査および整理作業の経緯と組織・担当者は第1章第1節に記した。
- 5 本書の執筆・編集は、主席研究員小林清隆が行った。なお、旧石器時代並びに縄文時代の石器については、上席研究員 田村 隆の協力を得た。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、国土交通省、木更津市教育委員会、袖ヶ浦市教育委員会の御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。

| | | |
|-----|---------|--------------------------------|
| 第1図 | 木更津市発行 | 1/2,500 地形図(平成6年修正) IX-ME34-3 |
| | 袖ヶ浦市発行 | 1/2,500 地形図(平成11年修正) IX-LE34-4 |
| 第3図 | 国土地理院発行 | 1/25,000地形図「上総横田」(昭和58年発行) |
- 8 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。座標値は、日本測地系である。
- 9 土器の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修『新版標準土色帖2002年度版』を参考にした。

本文目次

| | | |
|-----|-----------------|----|
| 第1章 | はじめに | 1 |
| 第1節 | 調査の概要 | 1 |
| 1 | 調査に至る経緯 | 1 |
| 2 | 発掘調査と整理作業の組織と担当 | 1 |
| 3 | 発掘調査と整理作業の方法 | 2 |
| 第2節 | 遺跡の位置と環境 | 5 |
| 1 | 遺跡の位置と地理的環境 | 5 |
| 2 | 林遺跡と周辺の遺跡 | 6 |
| 第2章 | 検出した遺構と出土遺物 | 9 |
| 第1節 | 林遺跡・林遺跡(3) | 9 |
| 1 | 旧石器時代 | 9 |
| 2 | 縄文時代 | 28 |
| 3 | 奈良時代以降 | 49 |
| 第2節 | 林遺跡(2)・林城跡 | 56 |
| 1 | 縄文時代 | 59 |
| 2 | 古墳時代以降 | 67 |
| 3 | 林城跡 | 76 |
| 第3節 | 林遺跡(1) | 80 |
| 第3章 | まとめ | 85 |
| 1 | 旧石器時代の石器集中地点 | 85 |
| 2 | 縄文時代の石器・礫 | 86 |
| | 報告書抄録 | 巻末 |

挿図目次

| | | | | | |
|-----|-------------------------------|----|------|--------------|----|
| 第1図 | 林遺跡グリッド配置図及び調査地点 | 3 | 第7図 | 集中2D石材別石器分布図 | 12 |
| 第2図 | 林遺跡における調査歴 | 4 | 第8図 | 集中2D出土石器(1) | 13 |
| 第3図 | 林遺跡と周辺の主な遺跡 | 7 | 第9図 | 集中2D出土石器(2) | 14 |
| 第4図 | 林遺跡・林遺跡(3) 下層確認調査状況及び本調査範囲 | 9 | 第10図 | 集中2D出土石器(3) | 15 |
| 第5図 | 基本土層 | 10 | 第11図 | 集中2D出土石器(4) | 16 |
| 第6図 | 集中2D器種別石器分布図 | 11 | 第12図 | 集中2D出土石器(5) | 17 |
| | | | 第13図 | 集中2D出土石器(6) | 18 |

| | | | | | |
|------|--------------------------------|----|------|--------------------------|----|
| 第14図 | 集中2 D 出土石器 (7) …………… | 19 | 第39図 | 林遺跡・林遺跡 (3) | |
| 第15図 | 集中2 D 出土石器 (8) …………… | 20 | | 出土縄文時代石器 (8) …………… | 46 |
| 第16図 | 集中2 D 出土石器 (9) …………… | 21 | 第40図 | 林遺跡・林遺跡 (3) | |
| 第17図 | 集中2 E 器種別石器分布図…………… | 22 | | 出土縄文時代石器 (9) …………… | 47 |
| 第18図 | 集中2 E 出土石器…………… | 23 | 第41図 | 林遺跡・林遺跡 (3) | |
| 第19図 | 集中2 J 器種別石器分布図…………… | 24 | | 出土縄文時代石器 (10) …………… | 48 |
| 第20図 | 集中2 J 石材別石器分布図…………… | 25 | 第42図 | 林遺跡 (3) 方形周溝状遺構分布図…… | 50 |
| 第21図 | 集中2 J 出土石器 (1) …………… | 26 | 第43図 | SS001 …………… | 51 |
| 第22図 | 集中2 J 出土石器 (2) …………… | 27 | 第44図 | SS002・003 …………… | 52 |
| 第23図 | 集中2 J 出土石器 (3) …………… | 28 | 第45図 | SS004 …………… | 54 |
| 第24図 | 林遺跡・林遺跡 (3) | | 第46図 | SD003・004 …………… | 55 |
| | 上層遺構確認トレンチ設定図…………… | 29 | 第47図 | 林遺跡 (2) | |
| 第25図 | 林遺跡・林遺跡 (3) 遺構分布図……… | 29 | | 上層遺構確認トレンチ設定図…………… | 56 |
| 第26図 | 林遺跡土坑分布図 (1) …………… | 30 | 第48図 | 林遺跡 (2) A区遺構分布図…………… | 57 |
| 第27図 | 林遺跡土坑分布図 (2) …………… | 31 | 第49図 | 林遺跡 (2) E区遺構分布図…………… | 58 |
| 第28図 | SK001・002・003・004・005・009・010・ | | 第50図 | SK001・002・006…………… | 59 |
| | 011 …………… | 33 | 第51図 | SK003・004・009…………… | 60 |
| 第29図 | SK006・007・008・012・013…………… | 34 | 第52図 | 林遺跡 (2) 出土縄文土器 (1) …………… | 61 |
| 第30図 | 林遺跡・林遺跡 (3) | | 第53図 | 林遺跡 (2) 出土縄文土器 (2) …………… | 62 |
| | 出土縄文土器 (1) …………… | 37 | 第54図 | 林遺跡 (2) 出土縄文土器 (3) …………… | 63 |
| 第31図 | 林遺跡・林遺跡 (3) | | 第55図 | 林遺跡 (2) 出土縄文時代石器 (1) …… | 64 |
| | 出土縄文土器 (2) …………… | 38 | 第56図 | 林遺跡 (2) 出土縄文時代石器 (2) …… | 65 |
| 第32図 | 林遺跡・林遺跡 (3) | | 第57図 | 林遺跡 (2) 出土縄文時代石器 (3) …… | 66 |
| | 出土縄文時代石器 (1) …………… | 39 | 第58図 | SI001 …………… | 68 |
| 第33図 | 林遺跡・林遺跡 (3) | | 第59図 | SI002 (1) …………… | 69 |
| | 出土縄文時代石器 (2) …………… | 40 | 第60図 | SI002 (2) …………… | 70 |
| 第34図 | 林遺跡・林遺跡 (3) | | 第61図 | SI003 …………… | 71 |
| | 出土縄文時代石器 (3) …………… | 41 | 第62図 | SI004 (1) …………… | 72 |
| 第35図 | 林遺跡・林遺跡 (3) | | 第63図 | SI004 (2) …………… | 73 |
| | 出土縄文時代石器 (4) …………… | 42 | 第64図 | SK007…………… | 75 |
| 第36図 | 林遺跡・林遺跡 (3) | | 第65図 | SD001…………… | 75 |
| | 出土縄文時代石器 (5) …………… | 43 | 第66図 | 遺構に伴わない遺物…………… | 76 |
| 第37図 | 林遺跡・林遺跡 (3) | | 第67図 | 林城跡の地形とトレンチ配置図…………… | 77 |
| | 出土縄文時代石器 (6) …………… | 44 | 第68図 | 林城跡地形測量図…………… | 78 |
| 第38図 | 林遺跡・林遺跡 (3) | | 第69図 | 林城跡地形断面図…………… | 79 |
| | 出土縄文時代石器 (7) …………… | 45 | 第70図 | 林遺跡 (1) 確認トレンチ配置図…………… | 81 |
| | | | 第71図 | 林遺跡 (1) 土坑分布図…………… | 82 |

| | | | |
|--------------------|----|----------------|----|
| 第72図 SK001・002・003 | 83 | 第73図 SK003出土石器 | 84 |
|--------------------|----|----------------|----|

表 目 次

| | | | |
|----------------|----|-----------------------|----|
| 第1表 旧石器時代石器属性表 | 89 | 第4表 縄文時代礫集計表（石材別） | 93 |
| 第2表 旧石器時代石器組成表 | 91 | 第5表 縄文時代礫集計表（礫全体） | 97 |
| 第3表 縄文時代石器属性表 | 92 | 第6表 林遺跡（2）竪穴住居出土石器観察表 | 98 |

図 版 目 次

| | |
|---|----------------------------|
| 林遺跡・林遺跡（3） | 図版12 遺構出土縄文土器・遺構外出土縄文土器（1） |
| 図版1 調査前近景・確認調査風景・集中2 J | 図版13 遺構外出土縄文土器（2） |
| 図版2 SK001・002・003・004・006・007・008・011・012・013 | 図版14 遺構外出土石器 |
| 図版3 SS001・002・003・004 | 林遺跡（2） |
| 図版4 集中2 D出土石器（1） | 図版15 SK002・006・009 |
| 図版5 集中2 D出土石器（2） | 図版16 SI001・002 |
| 図版6 集中2 D出土石器（3） | 図版17 SI003・004 |
| 図版7 集中2 D出土石器（4） | 図版18 遺構出土縄文土器・遺構外出土縄文土器（1） |
| 図版8 集中2 D出土石器（5）・集中2 E出土石器（1） | 図版19 遺構外出土縄文土器（2） |
| 図版9 集中2 E出土石器（2） | 図版20 遺構外出土石器 |
| 図版10 集中2 J出土石器（1） | 図版21 竪穴住居出土遺物（1） |
| 図版11 集中2 J出土石器（2） | 図版22 竪穴住居出土遺物（2）・遺構外出土遺物 |

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査に至る経緯

国土交通省と東日本高速道路株式会社は、首都圏中央連絡自動車道（圏央道）の建設にあたり、予定地内に所在する多数の埋蔵文化財包蔵地の取扱いについて、千葉県教育委員会と協議を行った。その結果、現状保存が困難な部分については記録保存の措置を講ずることとなった。

木更津JCTから約2.3kmの袖ヶ浦市境までの区間は、東日本高速道路株式会社が事業主体になり、財団法人君津都市文化財センターが発掘調査を実施した。それより東側の区間については、国土交通省が事業主体になり、財団法人千葉県教育振興財団が発掘調査を実施することとなった。

今回報告する林遺跡は、平成15年度と平成16年度に発掘調査を実施し、平成22年度から整理作業を開始し、平成23年度に報告書刊行となった。

林遺跡は、広範な台地のほぼ全域に遺物や遺構が分布し、その遺跡のなかに袖ヶ浦市と木更津市の市境が引かれている。そのため、発掘届については両市に提出することとなった。袖ヶ浦市域になるのは林遺跡の中でも西側の地域であり、遺跡名については単に袖ヶ浦市林遺跡とした。また、木更津市域の林遺跡については、調査の対象となった遺跡の北側に数条の谷が浸入しているという地形的特徴から、調査地点が3地点に分かれることとなった。このようなことから、便宜的に調査地点の最も東側を林遺跡（1）として、その西側の地点を林遺跡（2）、そして袖ヶ浦市林遺跡と接する地点を林遺跡（3）と呼称することとした。

2 発掘調査と整理作業の組織と担当

発掘調査と整理作業に関わる各年度の作業内容及び担当職員は以下のとおりである。

(1) 発掘調査

平成15年度

林遺跡

期間 平成15年12月1日～平成16年1月30日 平成16年3月1日～平成16年3月19日

組織 調査部長 齋木 勝 南部調査事務所長 鈴木定明

上席研究員 稲生一夫

内容 確認調査 上層430㎡／4,300㎡ 下層228㎡／4,300㎡

本調査 下層104㎡

林遺跡（3）

期間 平成16年1月6日～平成16年3月19日

組織 調査部長 齋木 勝 南部調査事務所長 鈴木定明

上席研究員 田島 新

内容 確認調査 上層905㎡／8,800㎡ 下層448㎡／8,800㎡

本調査 上層780㎡ 下層124㎡

林遺跡（2）・林城跡

期間 平成16年7月1日～平成16年9月17日

組織 調査部長 矢戸三男 南部調査事務所長 高田 博

上席研究員 稲生一夫

内容 確認調査 上層1,092㎡/11,300㎡ 下層32㎡/11,300㎡

本調査 上層650㎡

林遺跡（1）

期間 平成16年8月1日～平成16年9月17日

組織 調査部長 矢戸三男 南部調査事務所長 高田 博

上席研究員 稲生一夫

内容 確認調査 上層400㎡/1,400㎡ 下層20㎡/1,400㎡

（2）整理作業

平成22年度

組織 調査研究部長 及川淳一 中央調査事務所長 白井久美子

上席研究員 加納 実

内容 水洗注記から接合・復元の一部

平成23年度

組織 調査研究部長 及川淳一 中央調査事務所長 白井久美子

主席研究員 小林清隆

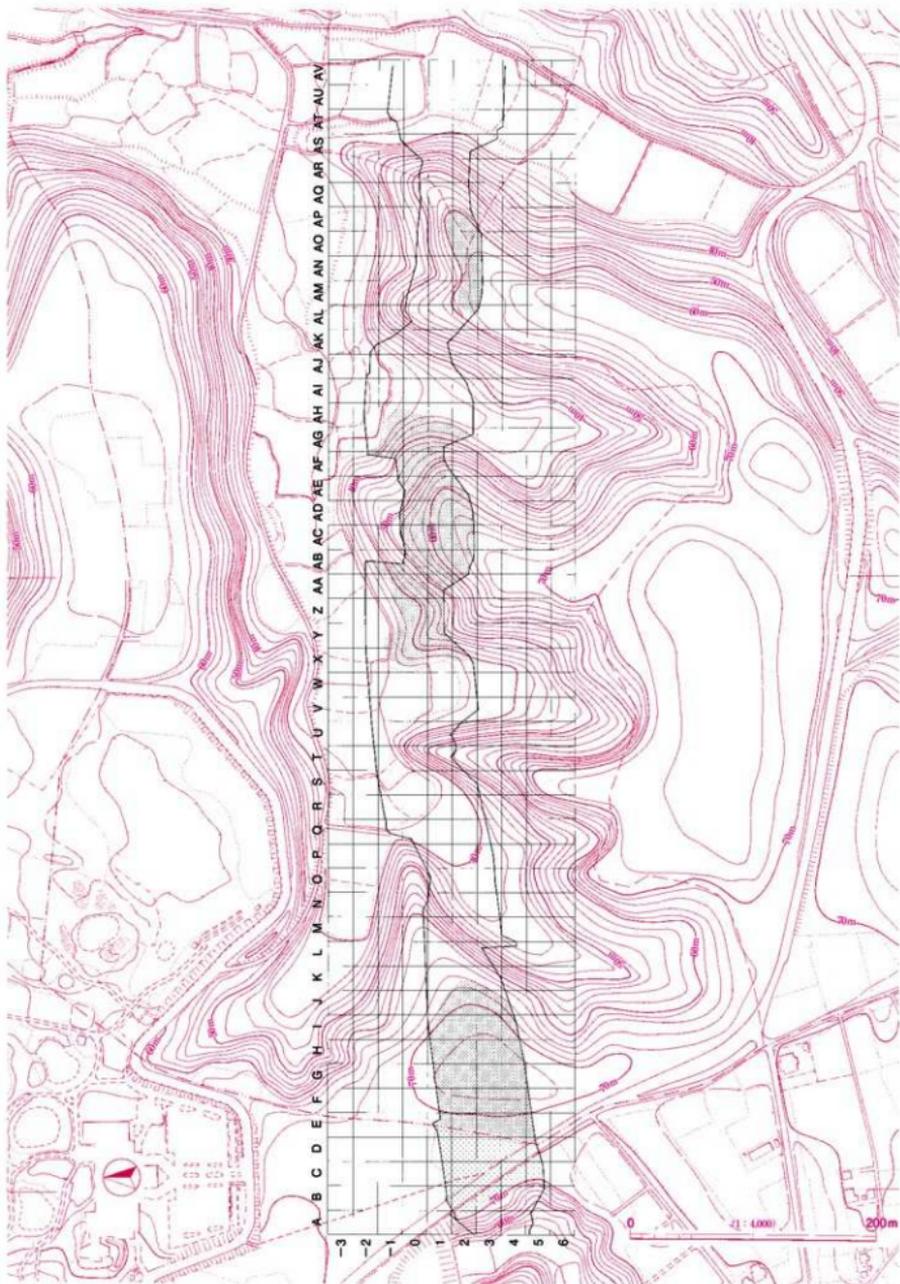
内容 接合の一部、実測・拓本、写真撮影、トレース、挿図・図版作成、原稿執筆、報告書の印刷・刊行

3 発掘調査と整理作業の方法

発掘調査に先立ち、公共座標（日本測地系）に沿って調査区全域を覆う方眼網を設定した。方眼網の基点1A-00を、 $X=-71,580$ 、 $Y=17,460$ として、 $20\text{m} \times 20\text{m}$ の大グリッドを設定した。大グリッドは、西から東に向かってA・B・C・・・、原点から南に1・2・3・・・、1の北に0・-1・-2とつけた。さらに大グリッド内を $2\text{m} \times 2\text{m}$ の小グリッド100個に分けた。大グリッドと小グリッドを組み合わせることで、遺構確認で出土した遺物についても、出土地点がしぼれることを見込んだ。

発掘調査は、袖ヶ浦市域の林遺跡から開始した。調査区内に幅2mのトレンチを任意に設定し、ソフトローム層上面まで掘り下げ上層遺構の確認を行った。トレンチの方向や長さは一定ではないが、全域を網羅的に把握できるように設定を行った。その結果、数か所のトレンチ内において炉穴や土坑の存在が確認された。炉穴や土坑の調査は、検出した周辺を拡張して平面形を明らかにし、それぞれを精査した。ほかに縄文土器や礫の出土も認められたが、集中する傾向は認められず、トレンチ毎に一括で取り上げを行った。上層に続き下層の確認調査を行い、 $2\text{m} \times 2\text{m}$ の確認グリッドを立川ローム層の最下層まで掘り下げて石器類の有無を確認した。

袖ヶ浦市域の林遺跡の東側に続く木更津市域については林遺跡（3）とした。この調査地点では、ほぼ



第1図 林遺跡グリッド配置図及び調査地点



第2図 林道跡における調査歴

東西方向のトレンチを設定し遺構の確認を行った。上層遺構の確認調査の結果、方形周溝状遺構4基と灰穴を確認した。引き続きその周辺を拡張してそれぞれの精査を実施した。下層については立川ローム層の最下層まで掘り下げ、石器が存在するか否か確認を行った。その後石器が出土したグリッド周辺を拡張して本調査を実施して石器を回収した。

林遺跡(3)の東側に位置する調査地点である林遺跡(2)・林城跡については、対象地の大部分が斜面部となっていた。このような状況から、現地において平場の形成がみられる地点を選んでトレンチを設定した。ただ、標高62mの等高線の内側については、全体に平場が形成されていたので、そこについては全城の表土を除去して確認を行った。その結果、調査区の最も東側の平場に設定したトレンチに竪穴住居が検出され、周辺を拡張して各遺構の精査を実施した。また、この調査区は斜面部に平場の形成が認められたため、城跡であった可能性がもたれたが、トレンチ内からは城跡に関連する遺構や遺物は全く出土しなかった。下層については2m×2mの確認グリッドを8か所に設定し、立川ローム層を掘り下げた。そのいずれからも、石器の出土は認められなかった。

林遺跡(1)は、トレンチにより上層の確認調査を行い、土坑が検出されたトレンチの周辺を拡張して、遺構の精査を実施した。下層については確認調査のみで本調査には至らなかった。

検出した遺構については、調査地点毎に先頭記号を付して001からつけて、出土遺物についても遺構ごとに1からつけ台帳に記録した。そのため、例えば土坑についてはSK(土坑の先頭記号)001が4か所の調査地点毎につくこととなった。

整理作業は平成22年度から実施している。遺物の水洗・注記を行い、記録類の整理、遺物の分類を行った。平成23年度は、旧石器時代の石器類の母岩分類・接合・実測と、上層遺物についても分類・接合・拓本・実測を進めた。引き続きトレース・挿図・図版作成、原稿執筆を実施した。

今回の調査では、地点が大きく3地点に分断され、尚且つ地形的に同一地点である林遺跡と林遺跡(3)は、袖ヶ浦市と木更津市の市境が途中に入るため、調査地点の呼称や遺跡コードが異なっている。さらにグリッドの基点側である林遺跡・林遺跡(3)から(2)、そして(1)という工程で、カッコつきの順とは逆の順で発掘調査を進めたため、位置関係が把握しづらくなってしまった。報告書作成に際しては、グリッドの基点側である林遺跡・林遺跡(3)から報告することとし、また、旧石器時代の成果、縄文時代の成果、古墳時代以降の成果について、調査区毎に遺構と遺物を報告することとした。

第2節 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と地理的環境

林遺跡の立地する袖ヶ浦市と木更津市は、それぞれ市域の西側は東京湾に面している。その両市域を流れ東京湾へと注ぐ小櫃川は、房総丘陵南部の清澄山系に源を発し、途中蛇行を繰り返しながら中流域から下流域にかけて肥沃な沖積平野を形成している。

林遺跡は東西約900m、南北約600m、標高60m～70m前後の台地上に展開している。この台地の東側には、小櫃川へと下っていく谷が北側と南側から入り込み、さらに遺跡の北側は小さな谷が樹枝状に入り組んで遺跡を刻んでいる。一方遺跡の西側は、小櫃川の支流である罌水川から延びる谷によって西端部が画かれている。したがって遺跡中央部は、ちょうど小櫃川の本流と罌水川の分水嶺になるという地形的特徴を呈している。

2 林遺跡と周辺の遺跡

林遺跡については、昭和56年に市道下郡宮田線道路改良工事に先行して、木更津市による発掘調査が行われた。この調査が林遺跡における発掘調査の嚆矢になる。続いて昭和62年に2回目の調査、平成3年度と平成4年度には君津都市文化財センターが市道改良工事に伴い、路線に関わる範囲について調査を実施している。第3次調査と呼んでおきたい。これら調査は、道路工事に関わるという調査の性格上、調査区の幅が狭く距離が長いので、遺跡の時期などの傾向を把握するのに都合が良い先行調査例であった。

昭和56年の調査では、縄文時代早期と考えられる礫の分布と、縄文時代中期の土器集中地点の存在が明らかになっている。また、撚糸文系土器や沈線文系土器が出土している（高崎 1982）。

昭和62年の調査は、遺跡の南東部にあたる地域について行われた。検出した遺構は縄文時代早期に帰属するとみられる炉穴1基である。ほかに出土遺物では、縄文土器の破片、さらに弥生土器片が少量出土している（井口 1987）。

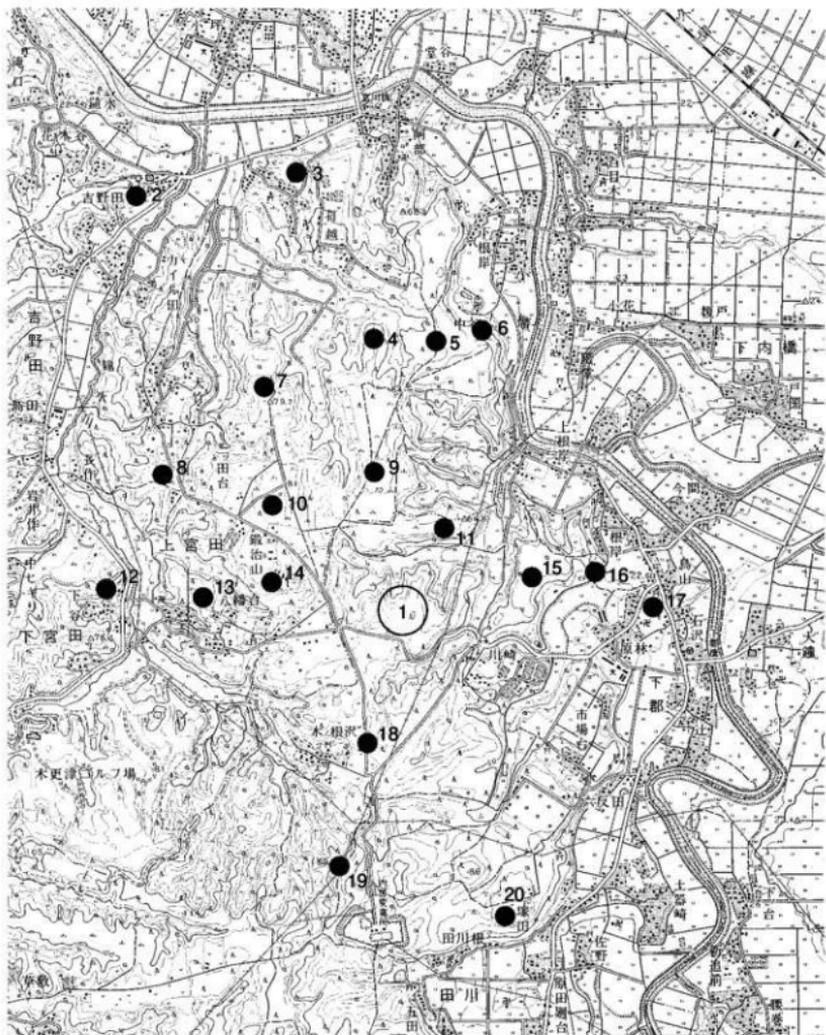
第三次となる平成3年度・平成4年度の調査では、旧石器時代の石器の存在が明らかになったほか、縄文時代から奈良・平安時代にわたる遺構や遺物が出土している。旧石器時代の遺物には、ハードローム層中から出土した剥片や石核があり、また、Ⅲ層（ソフトローム層）上部から両面加工石器がみついている。縄文時代の遺構は、炉穴、陥穴、集石が発見されており、遺物は早期・前期・後期・晩期の土器と石器の出土が認められる。遺跡中央部からは、弥生時代から古墳時代前期にわたる遺構が数多く検出されている。遺構の種類は堅穴住居、方形周溝墓、土坑等である。さらに奈良・平安時代に関しては、方形周溝状遺構、火葬墓が検出されている（能城 1994）。

道路改良工事とは別に、平成7年には、福祉施設建設に先行して、遺跡南側縁辺部の中央付近について発掘が実施されている。この調査では、縄文時代の土器と石器が出土し、古墳時代の堅穴住居、方墳、奈良・平安時代の方形周溝状遺構が検出されている（中能 1999）。

以上のように、林遺跡についての調査は、遺跡全体からみれば極めて限定的な発掘調査が行われているに留まる（第2図）。これまでの成果からは、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代の遺構や遺物が検出され、時代が複合している遺跡ということが明らかにされている。しかし、遺物包含層が濃密に分布する傾向や、短期間に同一地点において遺構が繰り返し構築されるような状況は認められない。

次に周辺の遺跡についてふれておきたい。林遺跡の周辺には数多くの遺跡が立地し、様々な開発に伴い調査が行われた遺跡も多い。これらの遺跡については、すでに刊行している首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書などに、遺跡の分布状況や調査の概要について記している。ここでは、地形的あるいは時期的に関連する、と考えられる遺跡について概観しておきたい。

まず、近接する遺跡についてふれておきたい。遺跡の東側には小櫃川から入り込む谷が存在し、その谷を挟んだ対岸の台地に根岸古墳群が存在している。木更津市根岸古墳群の調査は、圏央道の建設に伴い、平成14年度から平成15年度に行われ、旧石器時代から古墳時代にわたる数多くの遺構や遺物が検出され注目された（西川・小林ほか 2011）。旧石器時代の調査では、文化層が異なる8か所の石器集中地点が発見され、820点以上の石器が出土した。縄文時代については、堅穴住居2軒、炉穴8基などが発見され、撚糸文系土器、条痕文系土器、前期初頭の土器が出土した。弥生時代中期には54基の方形周溝墓が営まれ、この時期の大規模な墓域であったことが明らかになった。また、弥生時代後期から古墳時代中期に構



第3図 林道跡と周辺の主な遺跡

1. 林道跡
2. 滝ノ口向台遺跡
3. 打越砦
4. 二又堀遺跡
5. 尾畑台遺跡
6. 大竹砦
7. 芥田遺跡
8. 嘉登遺跡
9. 向神納里遺跡
10. 三ツ田遺跡
11. 狐谷遺跡
12. 下谷遺跡
13. 上宮田台遺跡
14. 猪尻遺跡
15. 根岸小妻遺跡
16. 重三台遺跡
17. 山王遺跡
18. 木野根沢台遺跡
19. 赤坂台遺跡
20. 上ノ谷遺跡

築された2軒の堅穴住居を検出した。古墳時代後期の遺構としては、円墳15基、方墳6基などの調査が行われ、弥生時代中期と同様に墓域が形成されていた状況がとらえられた。

遺跡の北西側に所在する猪尻遺跡は、鎌水川に下る谷をはさんで林遺跡と隣接する。発掘調査は、圏央道の建設に伴い平成15年度に行われた（小高 2005）。この調査では、旧石器時代の石器、縄文時代早期沈線文系土器、条痕文系土器などが出土したが、それらの数量はわずかであった。しかし、縄文時代に遺跡内に持ち込まれたとみられる礫は、土器と比較して数多く検出された。その後、古墳時代中期から後期にかけては堅穴住居が営まれ、調査区内に点在するように6軒を検出している。奈良時代に構築された遺構には方形周溝状遺構、円形周溝状遺構と呼ばれるものがある。これらは距離を置かず互いに接した状態で発見されている。造営された時期について、骨蔵器に用いられた土器の分析等からしぼり込んで、8世紀中頃から後半にかけてが主体になり、8世紀後半段階において終焉を迎え、短期間に墓域が形成されたことを明らかにしている。

以上のように林遺跡の東西に所在する遺跡の成果からは、本地域では旧石器時代の石器集中地点が存在することが判明した。また、縄文時代については、早期の炉穴や陥穴が遺構として発見される機会が多く、撚糸文系土器、沈線文系土器、条痕文系土器と石器・礫の出土が目立っている特徴が見出される。さらに弥生時代以降は、集落や墓域が営まれ、特に奈良時代には方形周溝状遺構の造営が顕著になる状況がとらえられている。

林遺跡の南側に位置する赤坂台遺跡からは、撚糸文終末期の可能性がある炉穴や、三戸式～田戸下層式を主体にする沈線文系土器が出土している（井上 1999）。赤坂台遺跡の調査は440㎡と狭い範囲を対象に行われているが、炉穴は12基検出され、集石が3か所発見されている。出土した土器の主体となる沈線文系土器は2895点出土し、それに次ぐ撚糸文系土器は901点出土している。この土器片の出土点数は調査面積に対比すると驚かされる多さである。さらに石器では石鏃52点、楔形石器100点のほか、礫石斧が118点出土している。この石斧の点数も注目される。

引用・参考文献

- 井口 崇 1987 『林遺跡 ―市道建設に伴う埋蔵文化財調査―』（財）君津郡市文化財センター
- 井上 賢 1999 『赤坂台遺跡』（財）君津郡市文化財センター
- 小高春雄 2005 『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書3 ―袖ヶ浦市猪尻遺跡―』（財）千葉県文化財センター
- 小高春雄 1993 『滝ノ口向台遺跡・大作古墳群』（財）千葉県文化財センター
- （財）千葉県文化財センター 2000 『千葉県埋蔵文化財分布地図（4）―君津・夷隅・安房地区（改訂版）―』
- 高崎繁雄 1982 『原始・古代』『木更津市史 富来田編』木更津市
- 中能 隆 1999 『林遺跡Ⅲ ―社会福祉法人みづき会施設建設に伴う埋蔵文化財調査報告書―』（財）君津郡市文化財センター
- 西川博孝・小林信一ほか 2011 『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書12 ―木更津市根岸古墳群・根岸小妻遺跡、重三台遺跡―』（財）千葉県教育振興財団
- 能城秀樹 1994 『林遺跡Ⅱ ―道路改良工事（市道145号線）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ―』（財）君津郡市文化財センター

第2章 検出した遺構と出土遺物

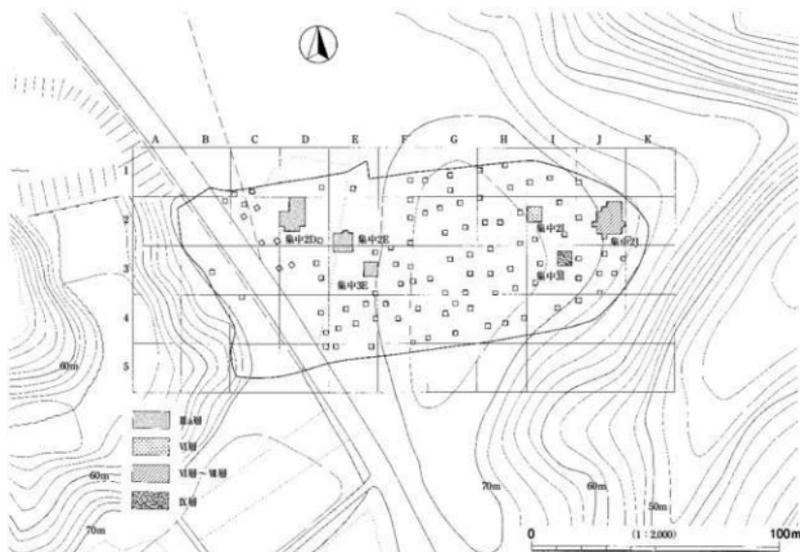
第1節 林遺跡・林遺跡(3)

今回対象となった林遺跡のなかでは、最も西側に位置する調査地点になる。既述したように、林遺跡と林遺跡(3)は地形的には全く調査区を分ける特徴を見出すことはできない。ただ、この地区に木更津市と袖ヶ浦市の市境が引かれているため、届出などの関係で林遺跡と林遺跡(3)に分離しているに過ぎない。この点については再度述べておきたい。報告は旧石器時代から始めることとする。

1 旧石器時代

(1) 概要

林遺跡・林遺跡(3)から発見された後期旧石器時代の遺物集中地点は5か所あった。このうち3か所は確認調査で遺物が出土したが、周辺からの追加資料の出土が認められなかった。周囲を拡張して追加資料がえられたのはⅢ層とⅦ層出土の2地点であった。以下、地点ごとに概要を報告する。個々の資料についての詳細は付表に譲る。なお、第3次調査に際して、3か所の遺物集中地点が発見されている。いずれもⅢ層を産出層とする。ごく少量の遺物から構成されている。C-4-Dグリッドでは、中型のデイスイト製両面加工石器(移行期)がⅢ層上部からみつかった。Ⅲa層の上限を示す重要な資料であろう。

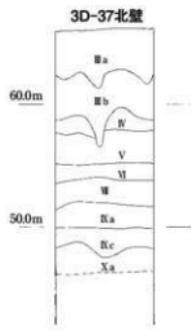


第4図 林遺跡・林遺跡(3) 下層確認調査状況及び本調査範囲

(2) 基本土層

第5図は3D-37グリッドの北壁である。

I層は耕作土である。II層は縄文時代の遺物包含層である。III a層～III b層はいわゆるソフトローム層である。近隣の遺跡では3層に区分できる場所もあるが、ここでは2層に区分した。IV層は硬質のローム層で、いわゆるハードローム層である。2mm大の赤色スコリアを含んでいる。V層は第1黒色帯である。IV層に比べ赤色スコリアの量が少なく、やや暗くなっている。VI層はAT（始良Tn火山灰）を含む層で大変硬く、上下層より明るい。赤色や黒色のスコリアを含んでいる。VII層は第2黒色帯の上部に相当する。VI層より暗く、赤色や黒色のスコリアを含んでいる。IX a層は第2黒色帯下部の上半部に相当する。赤色のスコリアを多く含んでいる。IX c層は第2黒色帯の下部に相当する。IX a層とIX c層との間層については分離することができなかった。IX a層と比較して赤色のスコリアの量が少なくなる。X a層はスコリアをほとんど含まない。IX層と比較すると軟らかい。X a層よりも下部の土壤層については不明である。



第5図 基本土層

(3) 集中地点と出土石器

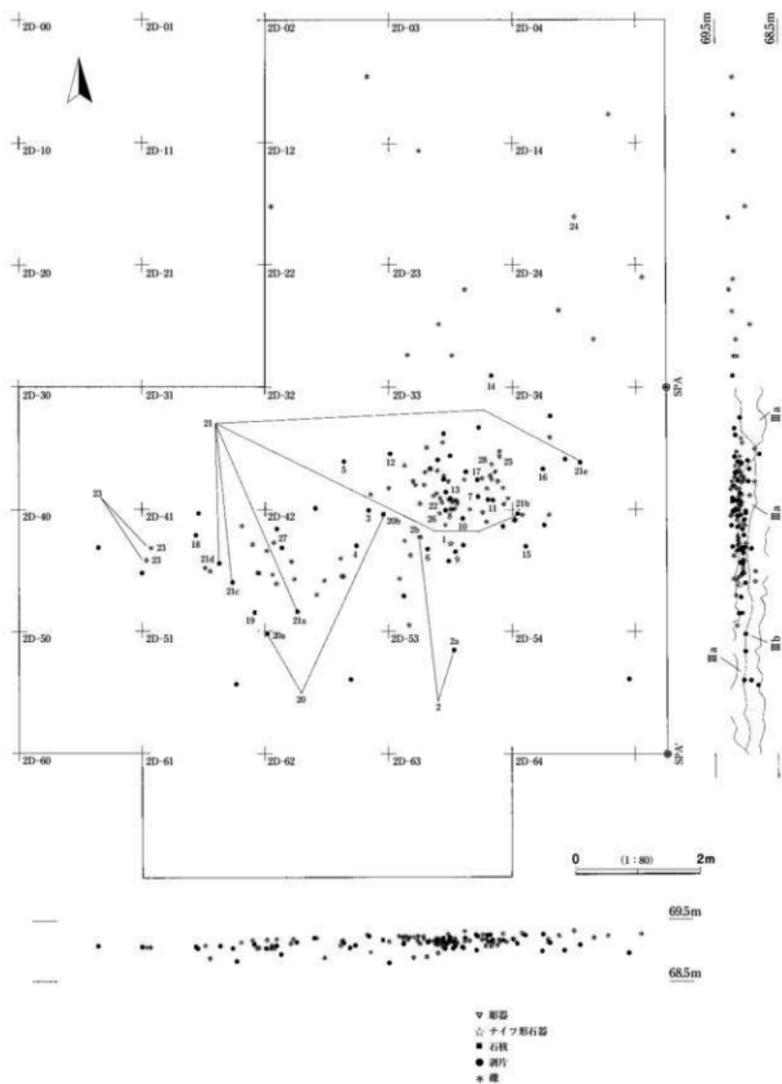
集中2D（第6～16図、図版4～8）

2D-33グリッドを中心に51点の石器と86点の礫・礫片が分布している。石器と礫は入り交じり、散礫（定義は第3章2 a参照）に少量の石器が混在する状況といえる。分布範囲は南北12mほどの弧状で、その中央部分がやや稠密になっている。分布域は緩斜面で、斜面上方から散布が始まり、斜面下部に廃棄物が移動集積したようにみえる。廃棄行為の結果であるのかもしれない。遺物の産出層準はIII a層の上部であり、後期旧石器時代終末期に形成された廃棄場所とみられる。

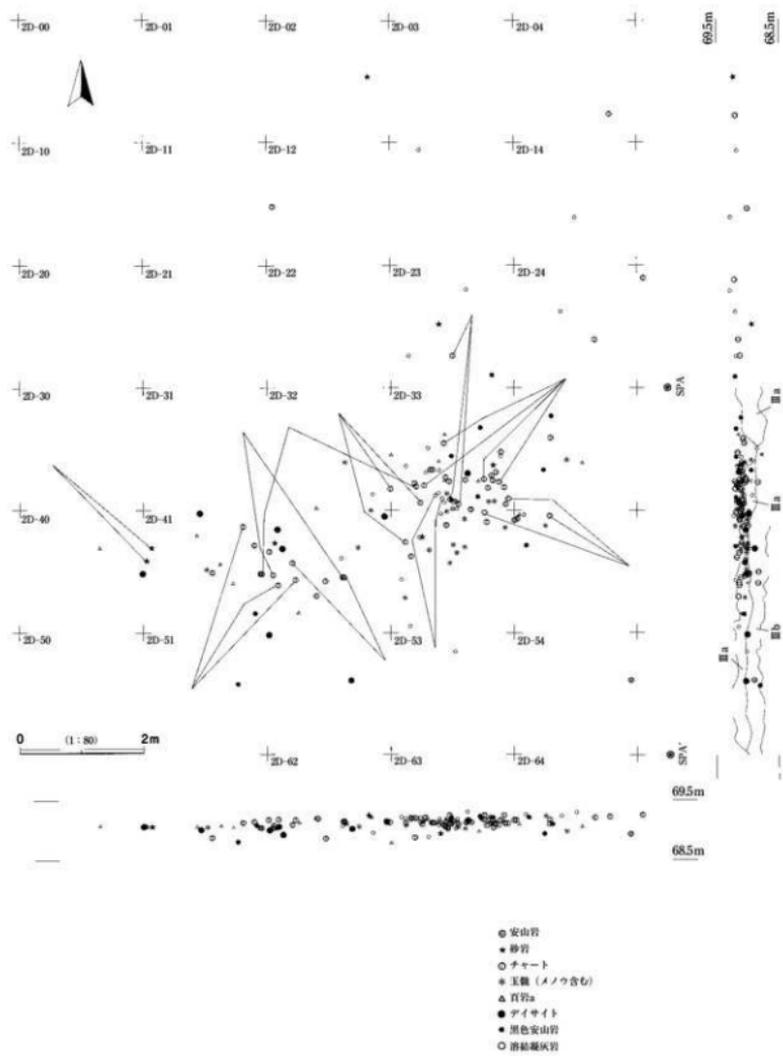
礫の大半は赤化した小型の破砕片であるが、大型の破砕していない礫が6点ある。そのうち2点には加撃痕が認められる。加撃痕の認められなかった礫も含めて、生活用具であったと認定した。赤化が認められないことや、その大きさが赤化破砕礫と異なること、平坦面もつ棒状の礫であることなど、共通点が多い。円礫加工工具として一括すべきであったかもしれない。

剥片は47点で、石器群のほぼすべてといってもいい。保田層産珪質頁岩、玉髄、黒色緻密質安山岩などが使われている。後二者は万田野層産の原石である。接合するものが2組ある（20・21）。礫面つき剥片は19点で全体の4割強にあたる。また、約2割に刃こぼれがある（3～12）。刃こぼれの観察しにくい安山岩系石材（14～16）を含めればさらに多くなるだろう。なお、礫面つき剥片のうち、刃こぼれのあるものは1例しかない。多くが剥離後廃棄されたことがわかる。これらから、礫層産の小型の円礫を多く消費するために礫面が残される頻度が高いこと、礫面の除去された未加工の剥片が石器群の中心であったことなどが判明する。保田層産の珪質頁岩は直軸100mm以上の亜円礫の状態でも搬入され、礫面除去の段階工程（ジョイント面で破砕）を示す接合資料がある（21）。これは一括廃棄されたものとみられる。

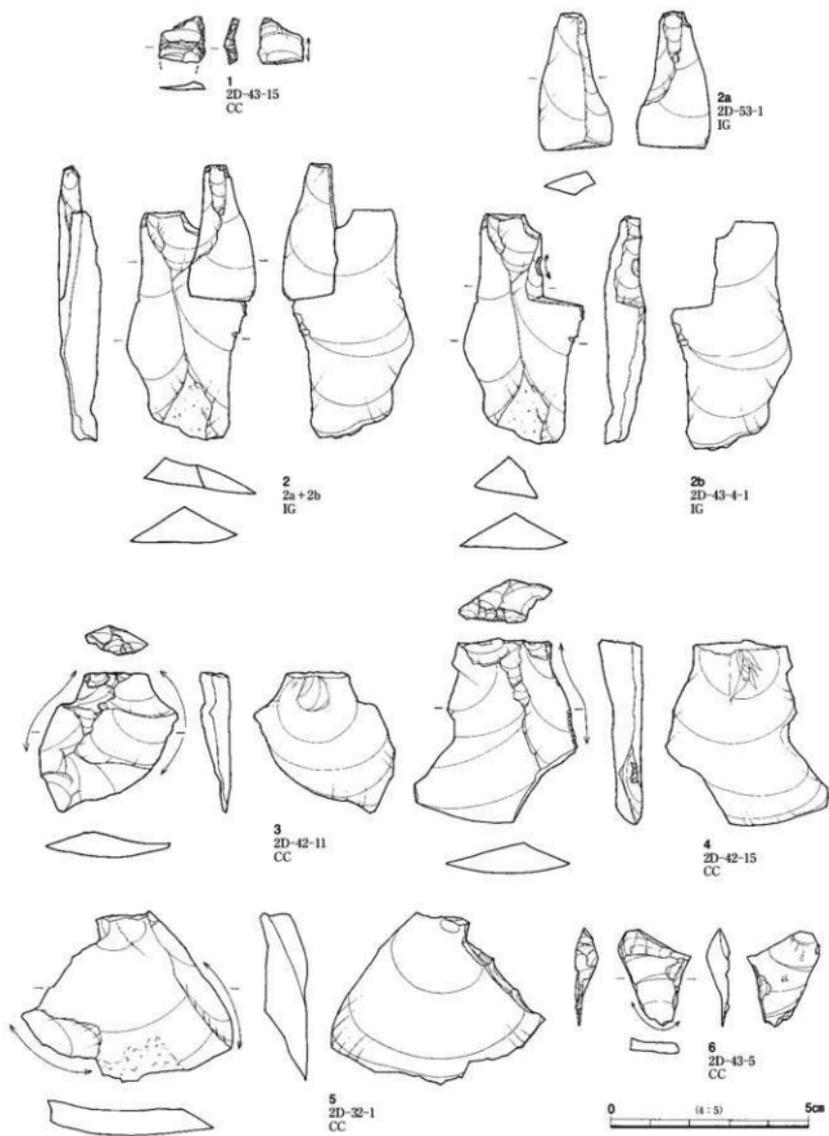
二次加工のある石器は2点しかない。1は小型幾何形刃器（台形石器）であるが、基部が破損している。2は縦長の剥片の側縁部をそぎ落とした彫器である。そぎ落とされた剥片が1点接合するが、その



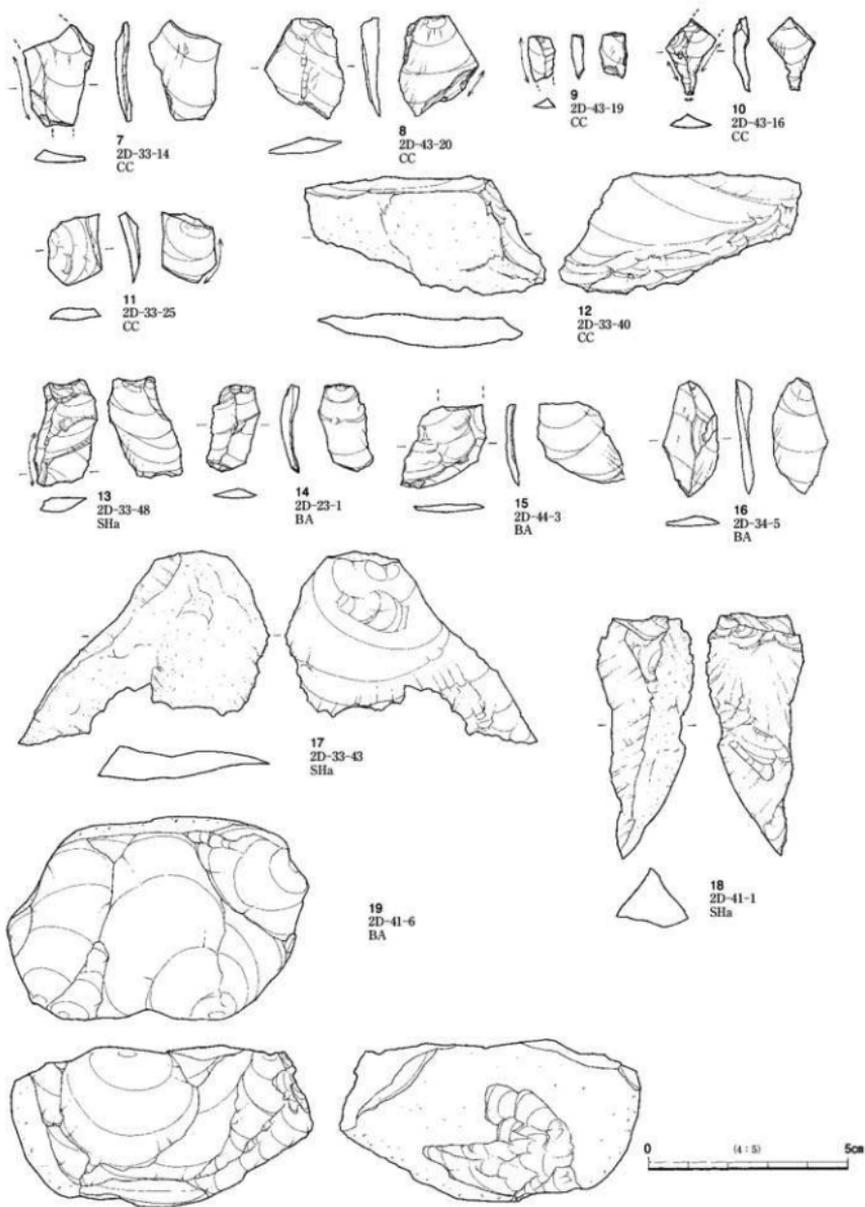
第6図 集中2D器種別石器分布図



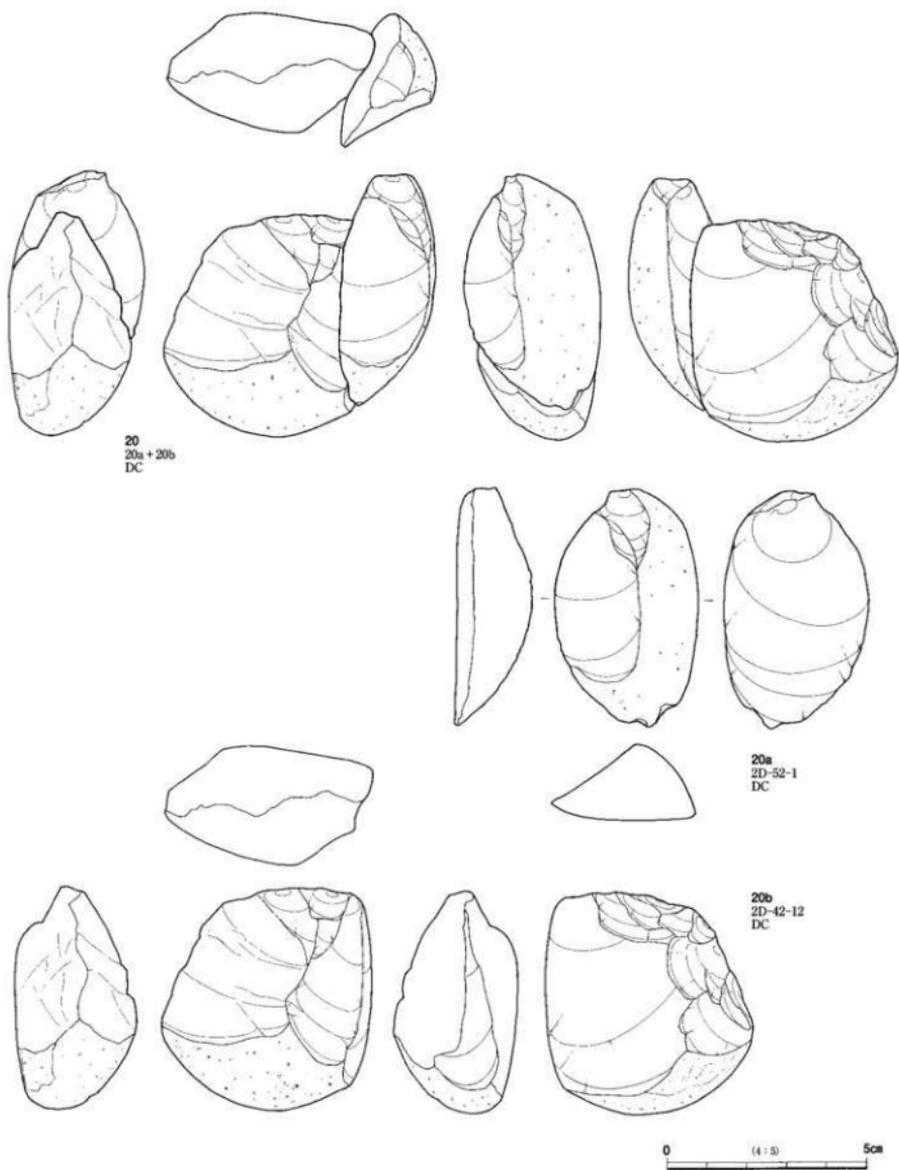
第7図 集中2D石材別石器分布図



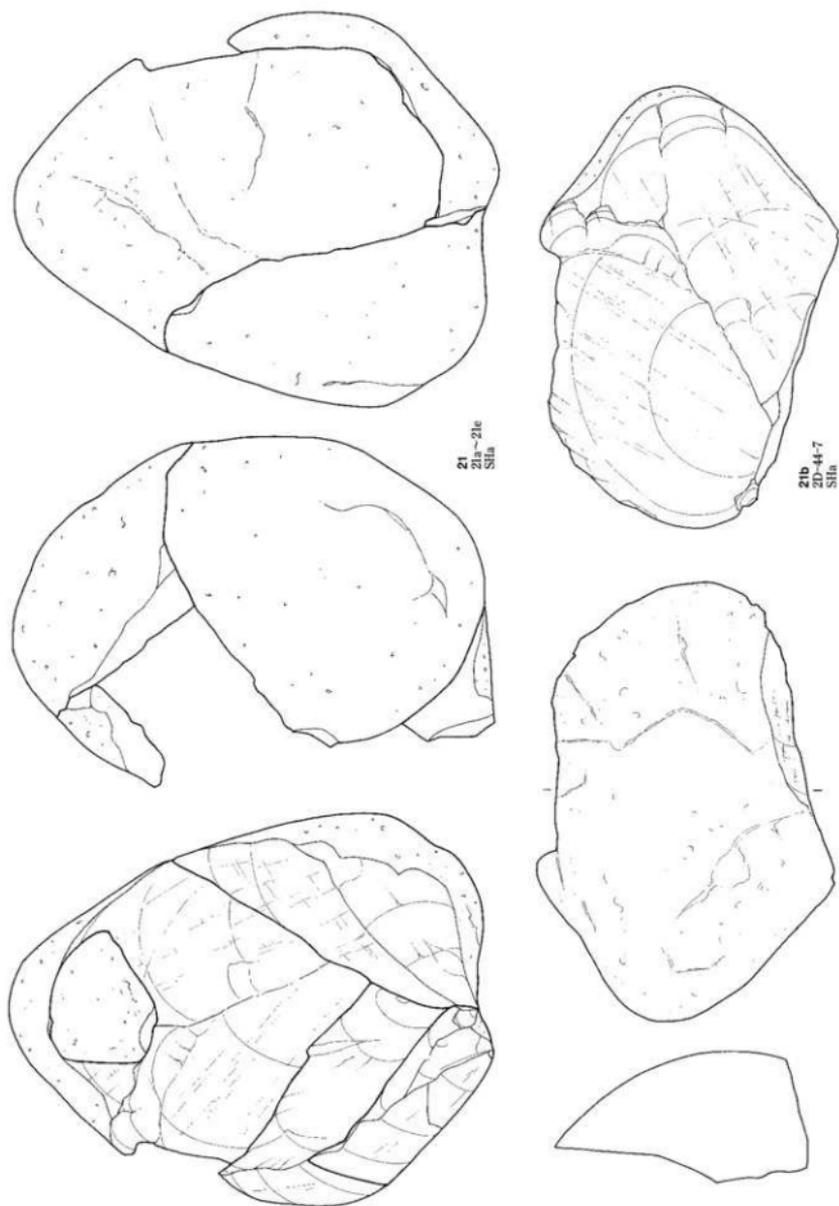
第8图 集中2D出土石器(1)



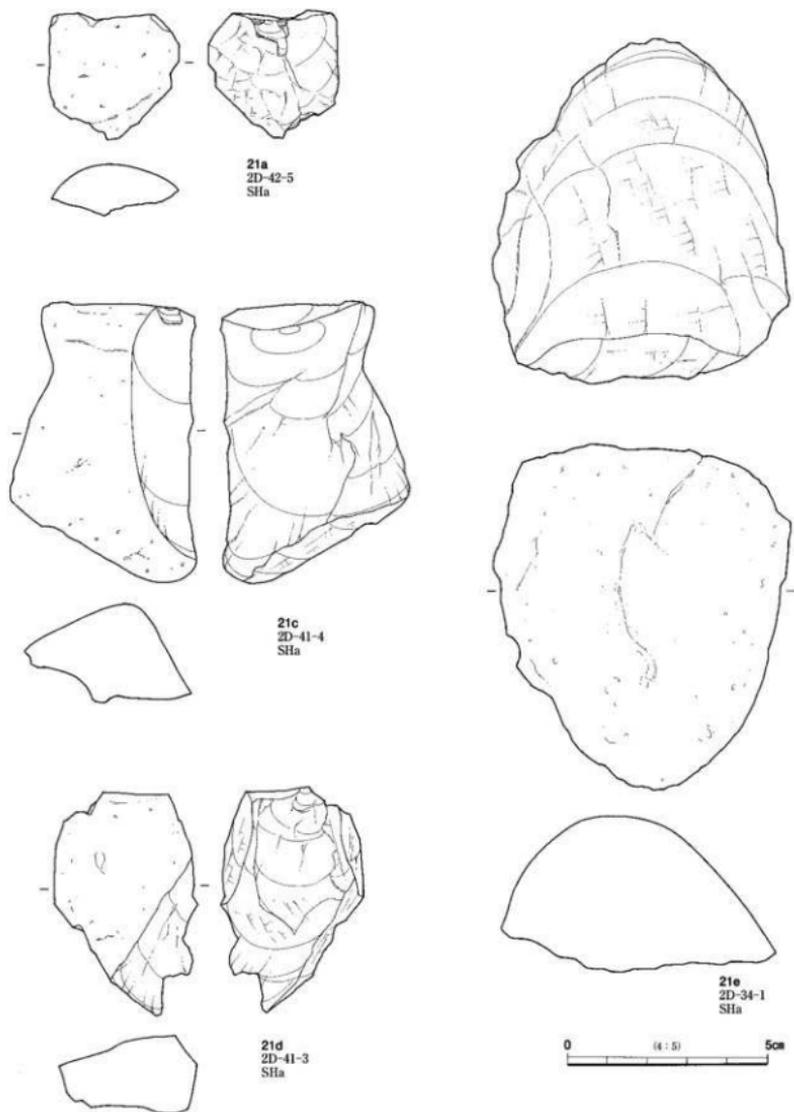
第9图 集中2D出土石器(2)



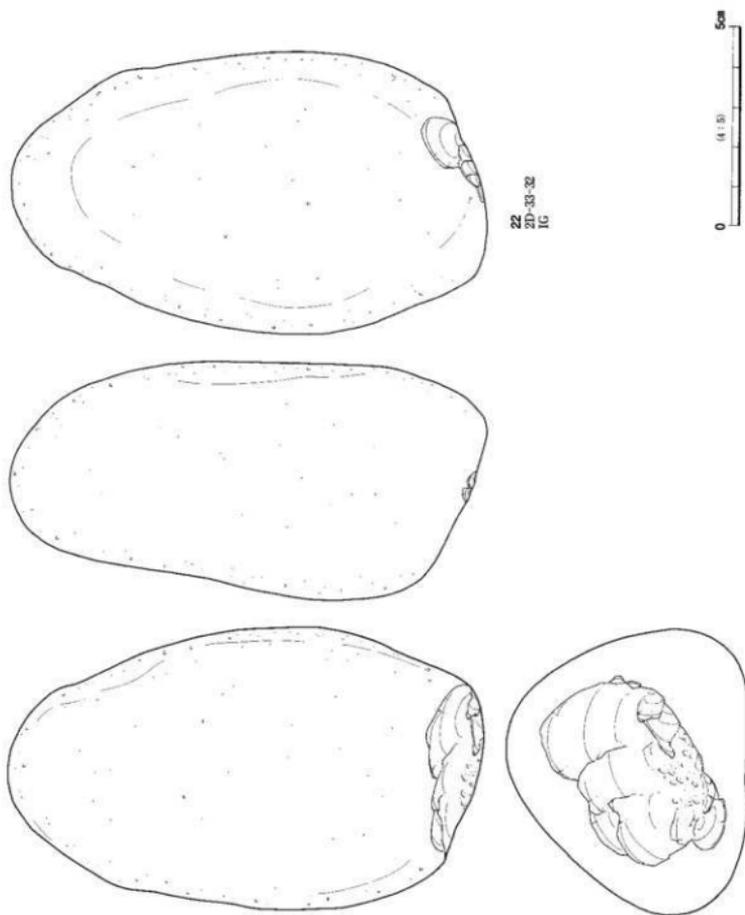
第10图 集中2D出土石器(3)



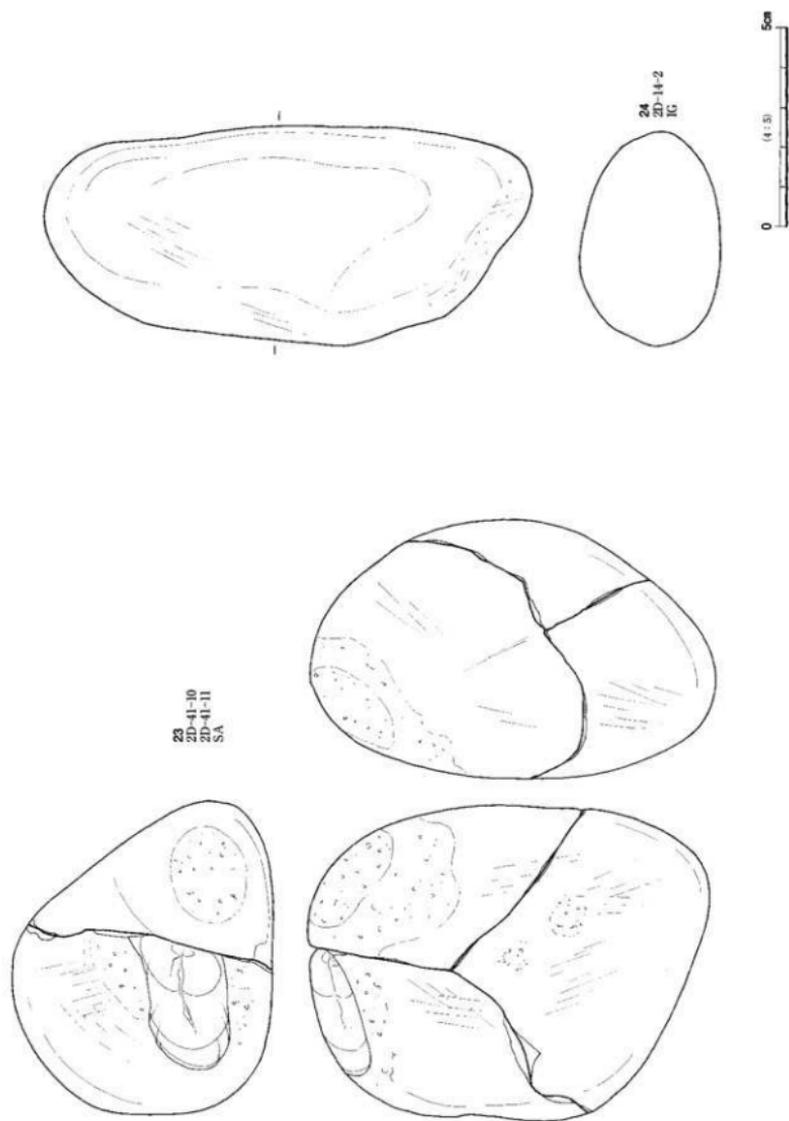
第11图 集中2D出土石器(4)



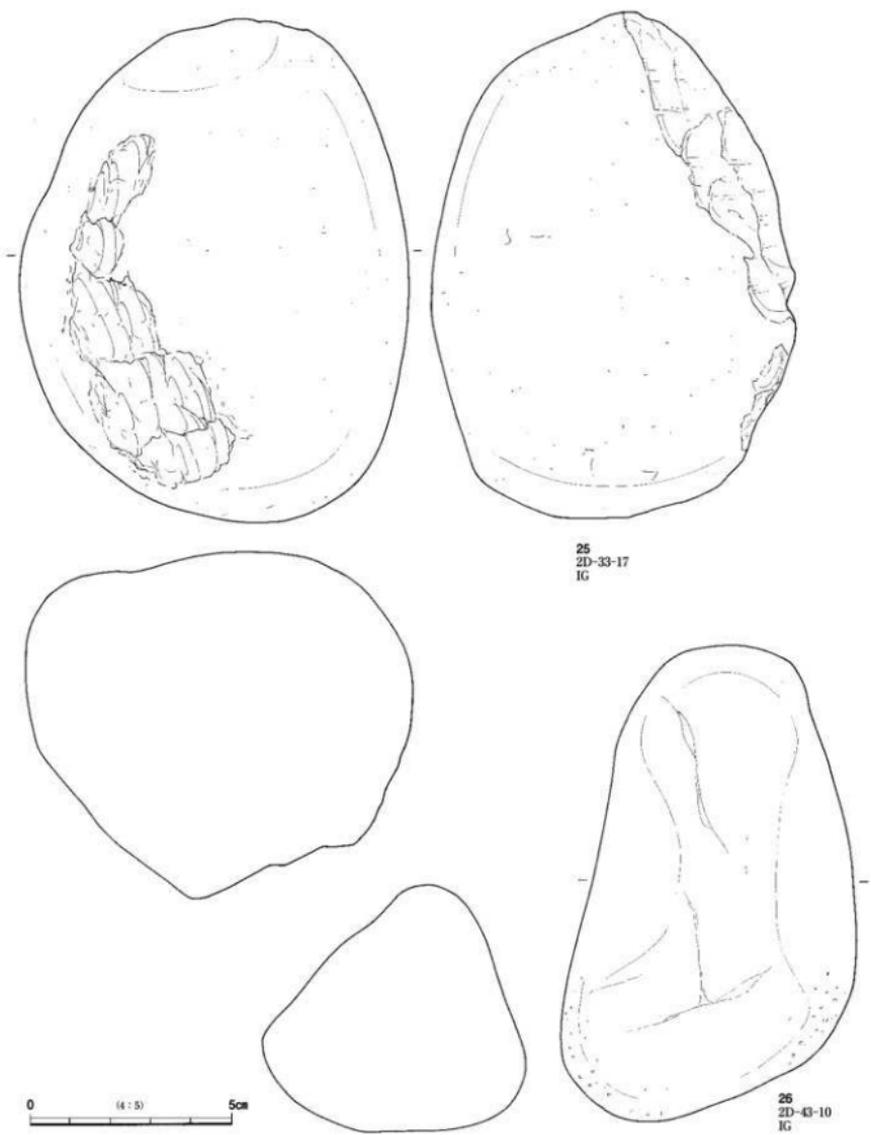
第12图 集中2D出土石器(5)



第13图 集中2D出土石器(6)



第14图 集中2D出土石器(7)

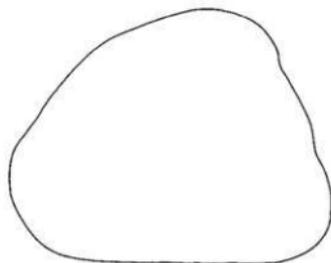
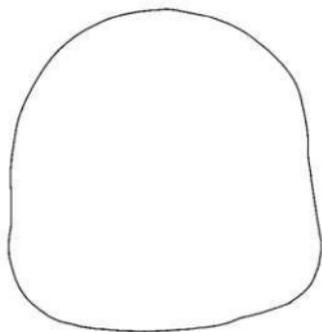
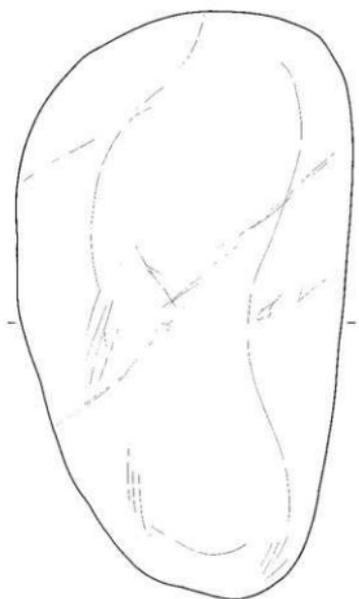
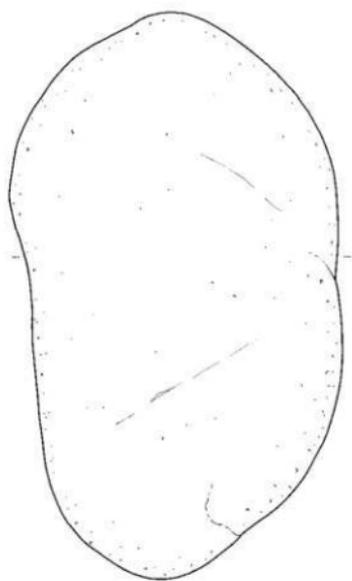


25
2D-33-17
IG

25
2D-43-10
IG

0 4 5 5cm

第15图 集中2D出土石器 (8)



27
2D-42-2
SA

28
2D-33-19
SA



第16图 集中2D出土石器(9)

状況から剥片側縁部の刃部作出過程の資料であることがわかる。また、小型幾何形刃器の存在から、産出層準である標準土層Ⅲ a 層上半部のおおよその形成年代が判明した。武蔵野台地Ⅳ層上部～Ⅲ層に相当しよう。Ⅲ a 層中位以下の土壌層の年代に関しては情報が無い。

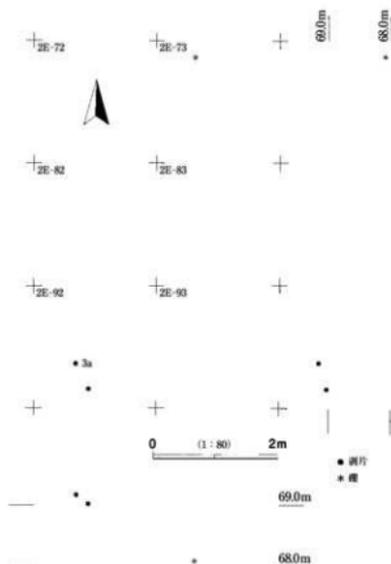
資料数が少ないので立ち入った議論はできないが、石材消費は浪費的である。生産された剥片のうち、使われたものは少ない。礫面つき剥片や、ジョイント分割礫はほとんど消費されないまま捨てられている。

集中2 E (第17・18図、図版8・9)

2 E-73グリッドⅥ層から礫片が1点出土している。周辺からの追加遺物はない。長軸70mm程度の偏平な砂岩の非焼成礫で、一部が欠けている。片面に黒色の付着物がある。石器として使われた礫がその場の近傍に廃棄されたものかもしれない。欠けた部分は未検出である。

やや離れた2 E-92グリッド周辺からは剥片5点と石核1点が散布しており、そのうち2点のみ出土位置を記録されている。これらの資料はかなり上層から(Ⅲ a 層～Ⅱ層)採集されているので、2 E-73グリッドの礫とは時期が異なる。

上層採集石材の消費過程や廃棄資料の構成は集中2 D と類似している。礫面つきの剥片が多くあり、刃こぼれが観察されないことも、共通する。



第17図 集中2E器種別石器分布図

集中3 E

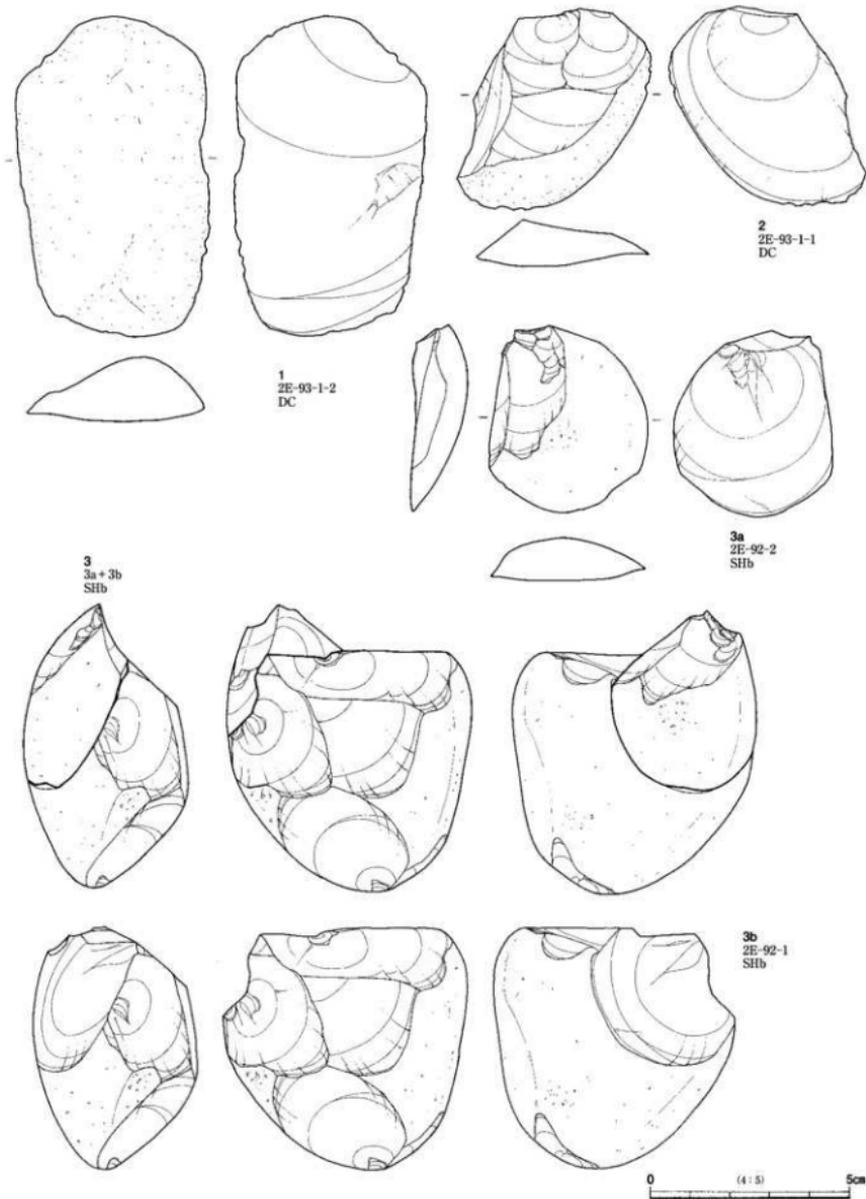
確認調査に際して、Ⅲ層下部から頁岩 a の小さな剥片が1点出土した。周辺からの追加遺物はない。

集中2 I

確認調査時にⅥ層から焼礫破片が2点出土している。周辺からの追加遺物はない。焼礫は砂岩別個体で、いずれも小破片である。集中2 J がほぼ同一層準なので、何らかの関連性が想定できないことはない。

集中3 I

確認調査時に、Ⅳ層上部から砂岩の礫片が出土した。周辺からの追加資料はない。礫は破砕片で、弱い赤化が認められる。集中2 E と類似した状況である。

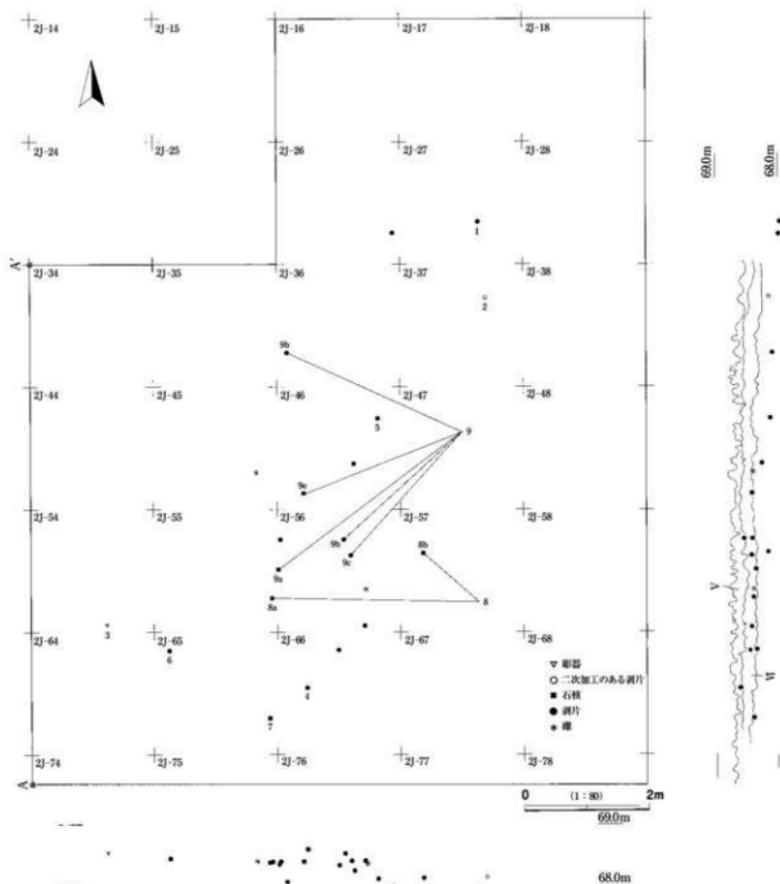


第18图 集中2E出土石器

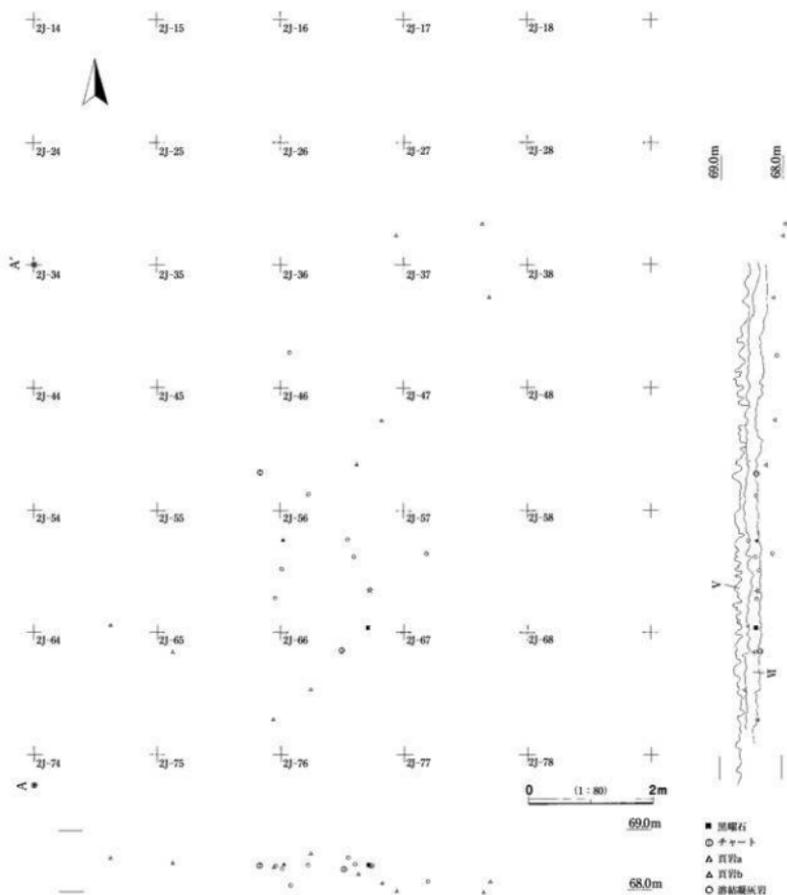
集中2J（第19図～第23図、図版1・10・11）

2J-56グリッド周辺に南北10mくらいの範囲でまばらに遺物が散布していた。産出層準はVI層からVII層と記録されている。緩斜面にあるので、投影図は出土状況を適正に反映していないため図示していない。やや低めになっている。

石器類20点、礫片2点という構成である。石器群の主体は剥片であり、全部で15点ある。剥片の大半が礫面つきで、剥片剥離の状況を示す溶結凝灰岩の接合資料がある（9）。二次加工や刃こぼれのある剥片は少ない。

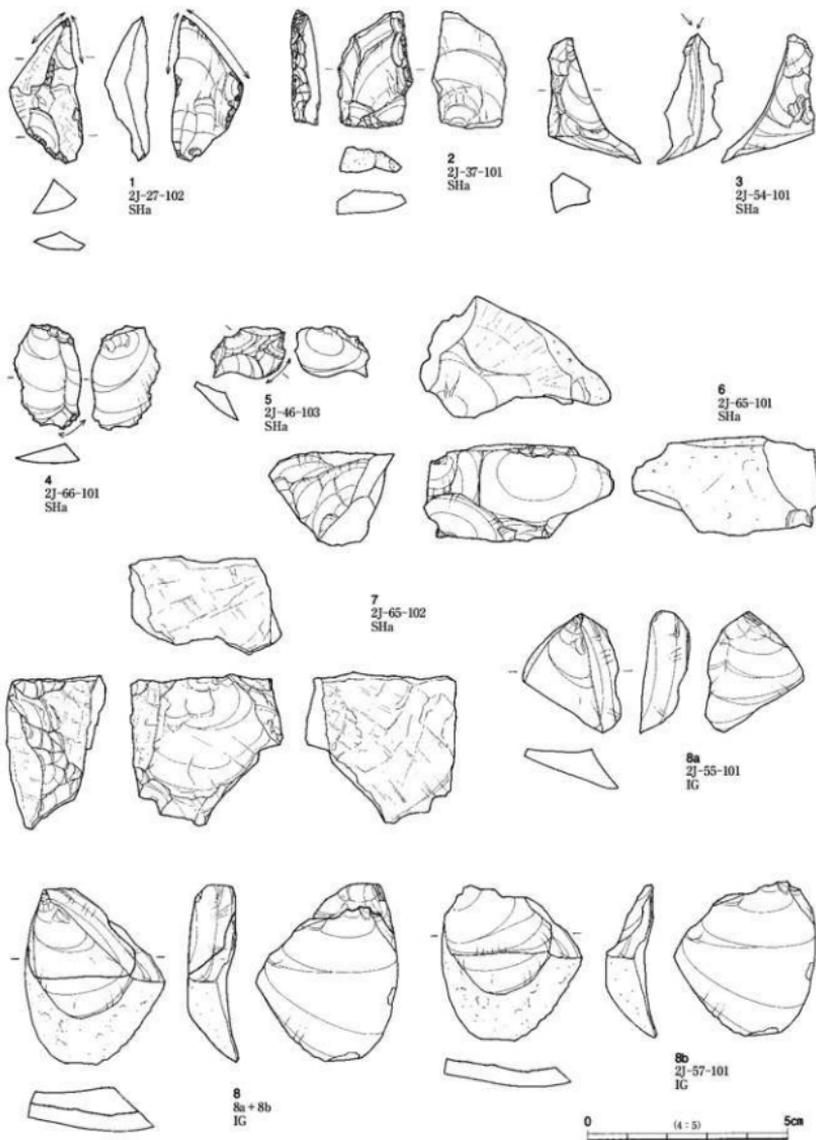


第19図 集中2J器種別石器分布図

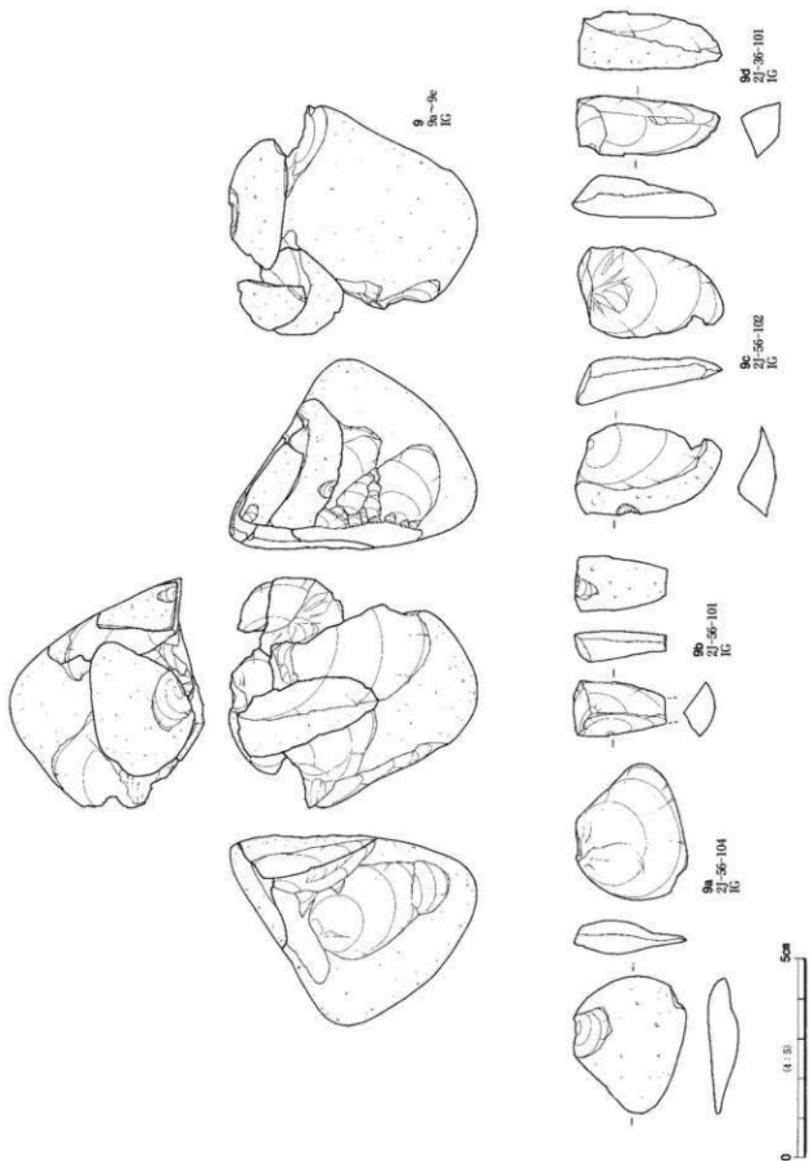


第20図 集中2J石材別石器分布図

1は刃こぼれのある剥片で、尖頭部と基部に刃こぼれが集中的に観察される。尖頭部には微細な衝撃剥離痕があり、基部の刃こぼれには周辺稜線の軽微な摩滅をともない、明らかに着柄の痕跡である。刺突・投射用尖頭器として使われた未加工の剥片である可能性が高い。従来この種の石器については注意されてこなかった。本報告では刃こぼれある剥片に含めたが、今後は剥片製小型尖頭器という意味で端刃器というべきだろう。2は二次加工のある剥片である。背面左側縁に刃つぶし、右側縁に魚鱗状の剥離痕がある。ナイフ形石器が削器につくりかえられたものとみられる。打面を残し背部の屈曲した一側縁加工のナイフ形石器であるが、この種のナイフ形石器は当地域Ⅸ層上部～Ⅶ層石器群に多く含まれている。3は不



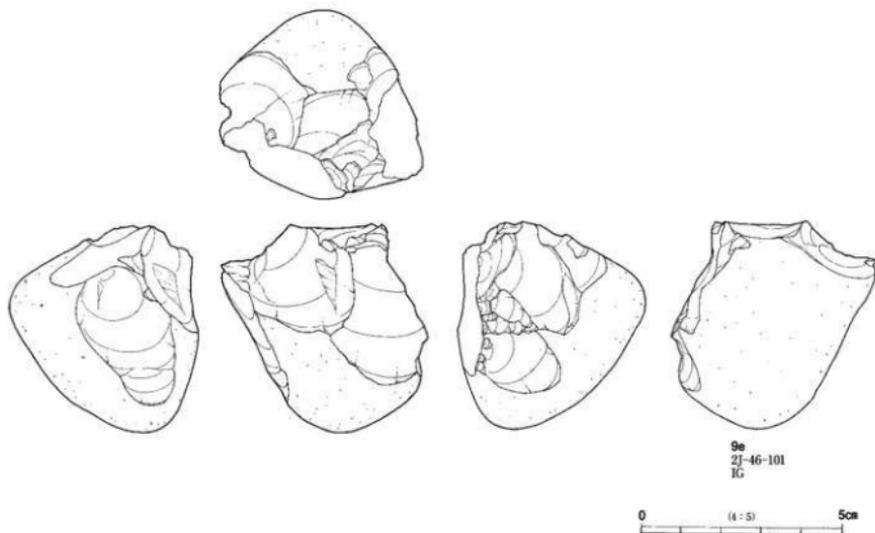
第21图 集中2J出土石器(1)



第22图 集中2J出土石器(2)

定形な剥片の一端に交差する面取り加工が認められるもので、彫器に分類される。

調査所見によると、本ブロックはⅥ層に帰属している。石器群の内容は剥片製の尖頭器や刃器を少量含む、非石刃石器群である。よく知られているように、下総台地北部では、Ⅵ層石器群は筑摩山地産黒曜石製石刃石器群と、矢子層産珪質頁岩製石刃石器群とが交差している。本石器群のような万田野層産剥片石器群はいわば第3の石器群というべきものである。



第23図 集中2J出土石器 (3)

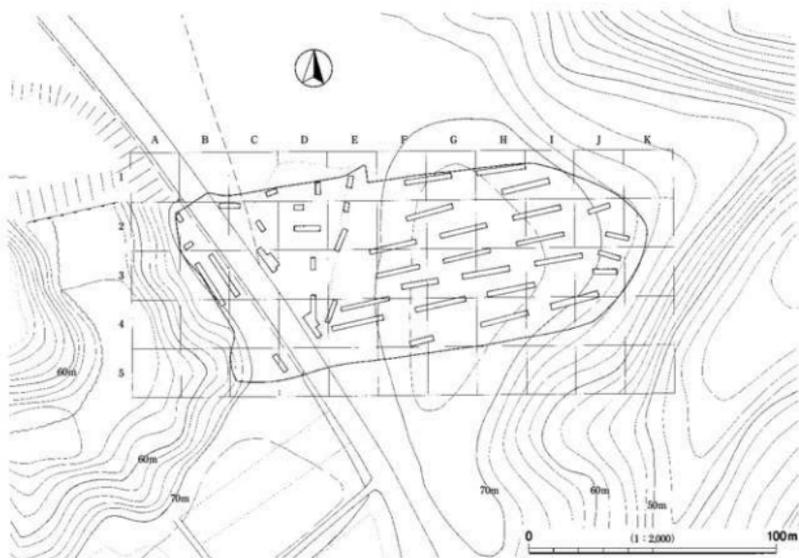
2 縄文時代

縄文時代に帰属する可能性の高い遺構には、土坑、炉穴があげられる。また、遺物は土器、石器、礫がある。縄文土器は第24図に提示した確認のトレンチや、遺構が検出された周辺の拡張によって出土しているが、調査区の全域を調査していないことなどから、出土点数は少量にとどまっている。同じく石器や礫についても、トレンチや遺構周辺の拡張によって出土したものに限定される。まず、遺構と遺構に伴う遺物を報告し、続いて遺構に伴わない遺物についてふれる。

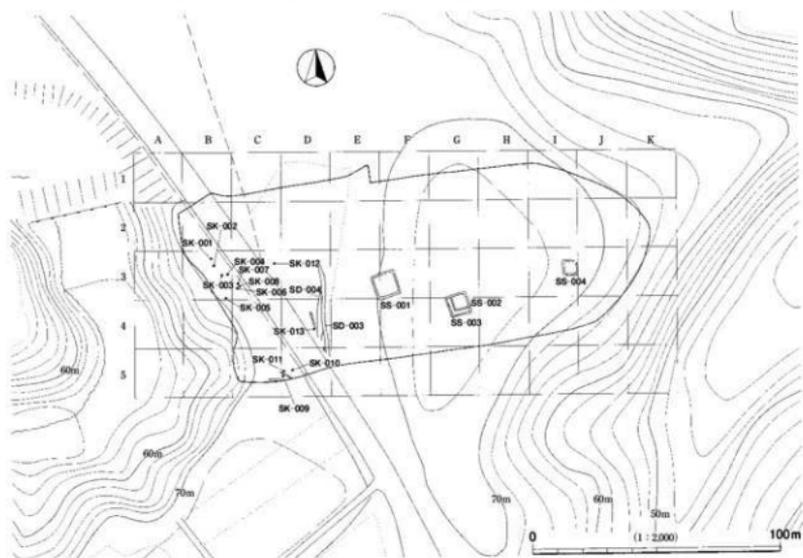
SK001 (第28図、図版2・12)

調査区の西端部である3B-15に位置する。この土坑の周辺からは小ビットが6基以上検出されているが、それらが堅穴住居の柱穴になる可能性は低いと判断されるため、単独の土坑とした。

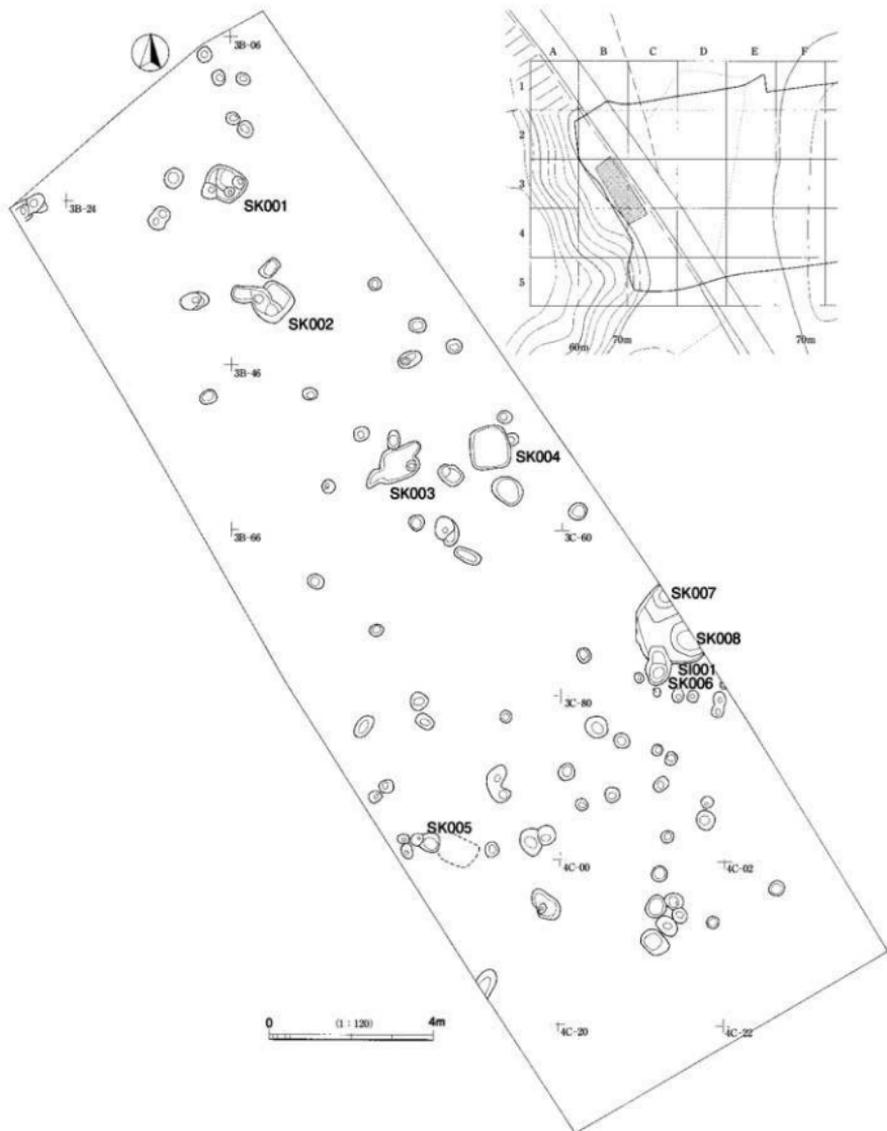
形態は隅丸方形に近いが、特に形状を考慮している状況は認められない。規模は長軸長100cm、その直交方向80cmで、深さは20cmである。この土坑には3か所の小ビットが存在するが、南西側にあるビットは



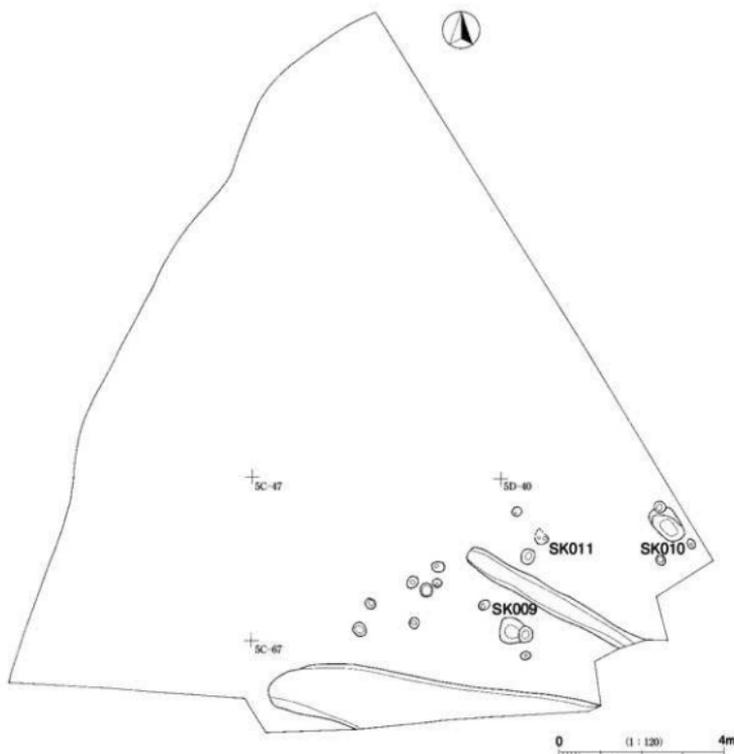
第24図 林遺跡・林遺跡 (3) 上層遺構確認トレンチ設定図



第25図 林遺跡・林遺跡 (3) 遺構分布図



第26图 林道跡土坑分布图(1)



第27図 林遺跡土坑分布図 (2)

本土坑に伴う可能性が低い。覆土は暗褐色土や褐色土が主体になり、焼土粒は含まれていない。

遺物は覆土中から縄文土器が出土している。1・2は同一個体とみられる。

覆土中から沈線文系土器が出土しているので、この時期の土坑とみてよさそうであるが、礫の出土もなく、どのような性格の土坑であったのかは不明である。

出土した土器は同一個体であったとみられる。1・2はやや太めの沈線が斜格子状に施されている。施文は器表面の乾燥が少し進んだタイミングで行われ、器表面に削り込むように施された沈線の断面はUの字形を呈している。3は斜め方向に沈線が引かれている。内面はケズリに近い調整を行った後に、ミガキを施している。焼成は良く、色調は暗褐色である。

SK002 (第28図、図版2)

調査区の西端部である3B-36に位置する。SK001の南東方向に約2mの距離を隔てて存在する。本土坑の周辺からも小ピットが検出されているが、土坑との直接の関係はないと考えられ、単独の土坑と判断

した。形態は不整形で、長軸長は150cm、その直交方向が100cmである。検出面からの深さは最大でも30cmで、底面は平坦でない。覆土は暗褐色土が主体になる。

時期決定が可能な遺物は出土していない。したがって、縄文時代に帰属するという確証は得られていない。また、土坑の性格も不明である。

SK003 (第28図、図版2)

3B-57・58に位置する。SK002の南東方向に約4mで東側にはSK004が存在する。この遺構の周辺にも小ピットが検出されており、本土坑の一部も小ピットと重複している。形態は不整形で、長軸長170cm、その直交方向は90cmである。ただ、後から掘られたピットによって、本来の土坑の形状が不明瞭になっている部分もある。本来の形態は隅丸方形であった可能性が考えられる。検出面からの深さは最大でも10cmで底面は比較的平坦になっている。覆土は暗褐色土が主体になる。

時期決定が可能な遺物は出土していない。したがって縄文時代に帰属するという確証は得られていない。土坑の性格も不明である。

SK004 (第28図、図版2)

3B-59のポイント付近に位置する。SK003が西方向1.2mの位置に存在する。長軸長110cm、その直交方向に100cmの隅丸方形を呈する、深さ10cmの土坑である。底面は平坦で、壁はやや傾斜して立ち上がる。東側に張り出す半円形の施設は土坑に伴う可能性は低いと考えられる。覆土は暗褐色土と褐色土が主体になり、焼土粒はみられない。

時期決定が可能な遺物は出土していない。縄文時代に帰属するという可能性があるものの、土坑の性格も不明である。

SK005 (第28図)

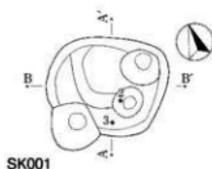
3B-98に位置する。直径50cmの範囲に堆積する焼土を確認した。その周囲の精査を行ったところ、この焼土範囲の東側に掘り込みを有していた痕跡を検出することができた。その痕跡から燃焼部を西側に設ける炉穴と推測した。炉穴自体の掘り込みは検出時にすでに失われており、検出したのは火床部と東側に設けられた足場の底面という判断である。

燃焼部が西側に設けられていたという推測は、直径50cmの焼土を主体にした火床部の存在からで、西側には掘り方を一度埋め戻して設定された足場部分がある。規模を推測すると長軸長120cm、短軸長70cmとみられる。

足場と考えられる底面付近から礫が出土しているが、時期を限定する土器の出土はない。炉穴という推測が妥当であるならば早期に帰属するであろう。

SK009 (第28図)

調査区南西部の5D-50に、直径50cmの範囲に堆積する焼土を確認した。この焼土の周辺からは小ピットが多く検出されており、そのような性格不明の小ピットの1基が焼土堆積の東側にも掘り込まれている。焼土の厚さは10cmである。



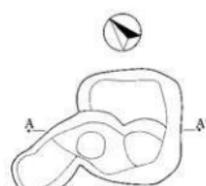
SK001



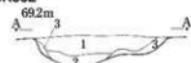
1. 暗褐色土
2. 褐色土 ソフトローム粒を含む
3. 黄褐色土 ソフトロームを主体にする



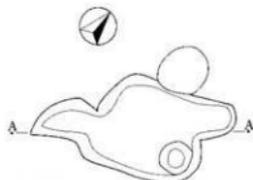
0 (1:3) 10cm



SK002



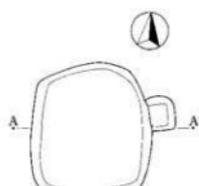
1. 暗褐色土 ローム粒をマープル状に含む
2. 暗褐色土 よりもローム粒多く含む
3. 暗黄褐色土 ソフトロームを主体にする



SK003



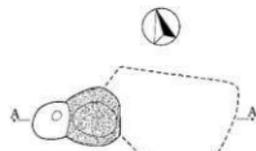
1. 暗褐色土
2. 暗褐色土 若干ローム粒が混ざる
3. 褐色土
4. 暗黄褐色土 ローム粒多く含む



SK004



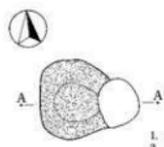
1. 暗褐色土
2. 褐色土 ローム粒をマープル状に含む
3. 暗黄褐色土 ソフトロームを主体にする



SK005



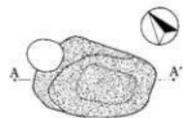
1. 褐色土 焼土粒を少量含む
2. 暗褐色土
3. 暗黄褐色土 ソフトロームを主体にする
4. 暗褐色土 焼土粒と炭化粒を少量含む
5. 暗橙褐色土 焼土粒を含む
6. 橙褐色土 焼土主体



SK009



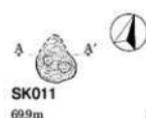
1. 暗褐色土 焼土粒、炭化粒をわずかに含む
2. 暗褐色土 焼土にロームブロック含む
3. 暗橙褐色土 焼土粒、炭化粒
4. 暗褐色土 焼土粒をわずかに含む



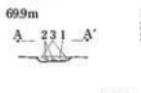
SK010



1. 褐色土 焼土粒を少量含む
2. 褐色土 焼土粒を含む
3. 暗橙褐色土 焼土主体
4. 褐色土 焼土粒を少量含む

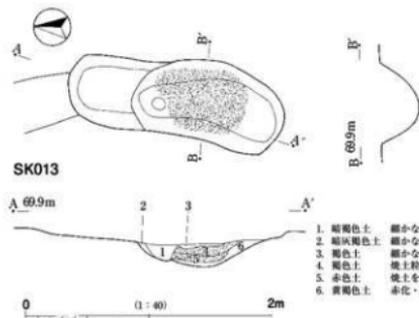
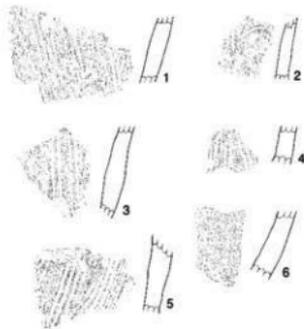
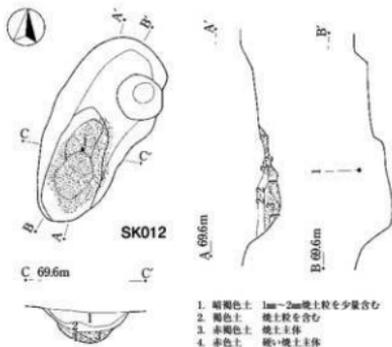
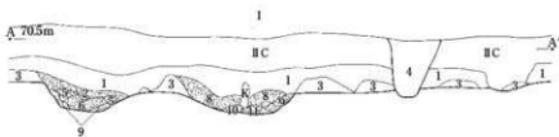
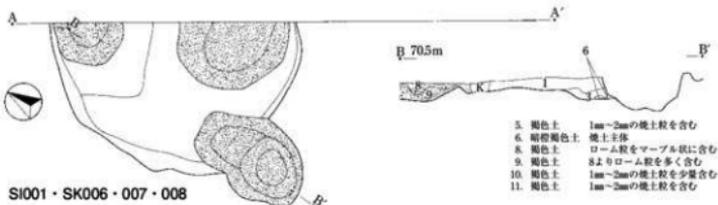


SK011



1. 暗褐色土 焼土粒を含む
2. 暗橙褐色土 焼土主体
3. 暗褐色土 ローム非化

0 (1:40) 2m



第29図 SK006・007・008・012・013

焼土堆積のほかは周囲に関連する痕跡を検出できず、遺物も出土していないが、炉穴の燃焼部の残部と推測した。炉穴という推測が妥当であるならば早期に帰属する可能性がある。

SK010 (第28図)

調査区南西部の5D-41・42に位置する。長軸長95cm、短軸長60cmの不整楕円形を呈する焼土がまつた落ち込みを検出した。周辺からは小ピットが多く検出されており、その1基が焼土堆積を切っている。焼土の厚さは15cmである。長軸の方向は北から40°西に振れている。炉穴の燃焼部の可能性があり、仮に炉穴という推測が妥当であるならば、長軸方向の北西側か南東側に足場が設けられていたことも考えられる。出土遺物が認められず、燃焼部の一部のみから断定するのは困難を伴うが、現場で判断した炉穴という見解を重視すれば、早期に帰属する可能性がある。

SK011 (第28図、図版2)

調査区南西部の5D-40に検出された長軸長40cm、短軸長30cmの焼土堆積である。焼土の厚さは5cmである。保存状態が極めて不良であるが、現場における所見では炉穴の燃焼部の残部と判断している。遺物が認められず、火床部のみから断定するのは危険であるが、現場の所見からは炉穴と考えられ、帰属する時期は早期の可能性はある。

SK006・007・008・[SI001] (第29図、図版2)

調査区西側の3C-71付近に径200cmの焼土を含む覆土の拡がりを検出した。やや小型ではあるものの堅穴住居になることも推測されたため、堅穴住居の先頭記号として用いていた「SI」を付して調査を開始した。調査を進めた結果、検出した遺構は燃焼部を3か所に設けた炉穴であることが判明した。遺構番号は燃焼部それぞれにSK006・007・008と付した。

SK006は南側に設けられた燃焼部である。焼土の堆積は長径100cm、短径60cmの楕円形の範囲に認められ、南側がやや深く掘り込まれている。SK007は北側に検出された燃焼部で、直径60cmの範囲に焼土が堆積する。焼土の厚さは20cmになる。SK008は東側に位置する燃焼部である。直径45cmの範囲に焼土が堆積し、厚さは10cmになる。足場は検出面から13cm前後の深さを残し、底は比較的平坦になっている。

このような検出状況から、当初「SI」とした落ち込みは炉穴であることと、3か所に位置を変えて燃焼部を設けていることが明らかになった。遺物が出土していないため時期の決定は難しいが、早期になる可能性もたれる遺構である。

SK012 (第29図、図版2・12)

調査区の西側である3C-28に検出された。長軸長155cm、短軸長80cmの不整楕円形を呈している。長軸の方向は北から28°東に振れ、南西側に焼土の堆積が認められる。北東側が足場となり、焼土が堆積する南西側が燃焼部になる炉穴と考えられる遺構である。検出面から足場までの深さは15cmで、壁はやや傾斜して立ち上がる。足場から燃焼部に向かって若干傾斜し、火床部の底面には段が存在し、南西部に向かって燃焼部の造り直しが行われた形跡が認められる。検出面から火床部底面までは28cmの深さになり、焼土の厚さは15cmになる。

遺物は縄文土器の破片が出土している。出土位置は覆土中で、火床面からの出土は認められない。1～5は、表面に縦方向の条線を施文しており、内面は条痕やナデによって調整されている。内面の条痕は目立たず、ナデによる調整が優先している。6の表面は擦痕が認められ、内面はナデが行われている。いずれも胎土にわずかに繊維を含み、石英の細粒が多く認められる。焼成は比較的良好であり、色調は暗褐色や褐色を示している。

SK013（第29図、図版2・12）

調査区の西側である4D-66に検出された。長軸長160cm、短軸長65cmの長楕円形を呈している。長軸の方向はほぼ北-南を向き、南側に焼土の堆積が認められる。検出面から10cm程度で北側に設けられた足場まで達し、底面はやや南側に傾斜している。南側に設けられた燃焼部には長径75cm、短径50cmの不整楕円形の範囲に焼土の堆積が認められる。焼土は15cmの厚さで堆積し、火床面も赤化して良く焼けや状態を呈して硬化した状況がみられる。

縄文土器の破片が覆土中から出土している。1は縦方向と横方向に施された擦痕がわずかに残り、内面は条痕状の調整により平滑さは認められない。2～4は条痕やナデによって調整され、内面についてはナデ主体の調整が施されている。胎土にわずかに繊維を含み、繊維の抜け落ちた痕跡を認める。ほかに赤色のスコリアの様な細粒が含まれている。焼成は普通で、色調は褐色である。

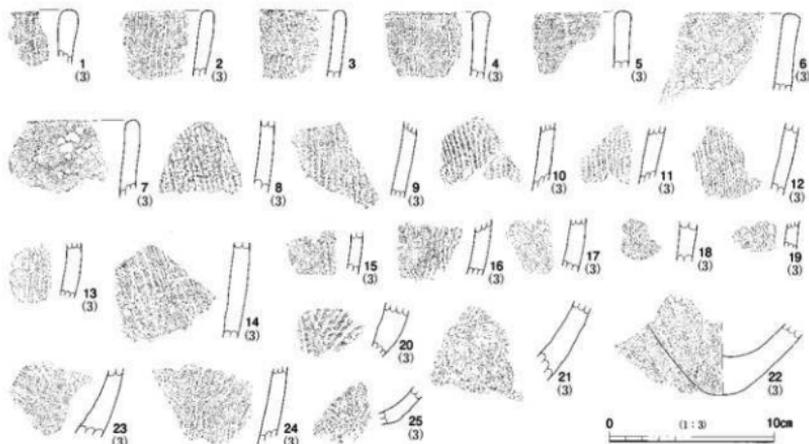
遺構外出土の土器と石器

遺構に伴わない遺物に土器、石器、礫がある。縄文土器は総破片数で232点と少量の出土にとどまっている。

土器（第30・31図、図版12～13）

第30図は燃糸文系土器である。総数で38点出土し、25点を提示した。提示した土器片は林遺跡（3）から多く出土しているが、集中して出土する状況はとらえられず、散発的に出土したにすぎない。1～3は口唇部直下から縄文や燃糸文が施文されている。口唇部の肥厚の度合いは弱い。4は丸頭状の口唇部から胴部にかけて条間の開いた燃糸文の施文が認められる。5は口縁部に横方向のナデの痕跡が認められ、その下に胴部にかけて施された燃糸文が残存する。6は文様の施文が認められない口縁部である。いずれも焼成は良く、色調は暗褐色や橙褐色である。以上は夏島式から稲荷台式になると考えられる。7は一見無文に見えるが、斜方向から横方向に近い方向に施文された燃糸文が認められる。口縁部は直立し口唇部が幾分内削ぎを呈している。文様が浅いので、施文は器表面の乾燥がある程度進行してから行ったと推測される。大浦山式と考えられる。8～19・24は胴部の破片である。条間が比較的狭いものが多く存在する。20～23・25は底部近辺から底部の破片である。22はナデが認められるのみで、燃糸文の施文は及んでいない。それに対し25の底部には燃糸文の施文が認められる。

26～44は沈線文系土器に比定したものである。破片点数は35点で、本調査地点全体に点在するように出土している。26は斜方向に細沈線が施されている口縁部である。27は内削ぎ状の口唇部になり、口縁部直下から斜方向に沈線が施されている。28～31は無文の口縁部になる。表面が摩滅しており状態が不鮮明になっているので、元々の調整も判然としにくい。32は横方向に引かれた沈線が認められる。沈線の断面形は浅いUの字形である。33～43は胴部の破片で、いずれにも明確な装飾は認められない。36・37の外表面は擦



第30図 林遺跡・林遺跡(3)出土縄文土器(1)

痕によって半透明の乳白色を呈する混和物の移動が目立つが、内面は全体に平滑にされている。44は中央部が小さく突出する底部である。

45~51は前期の土器である。これらの分布は袖ヶ浦市林遺跡内に限定される。45~47は胎土に繊維を含む特徴が顕著である。胴部の破片になるが、47は口縁部と胴部の境界になるかと推測される。関山式や黒浜式と考えられる。48~51は半截竹管による文様が認められ、胎土に繊維を含まない部類である。諸磯式になるものである。

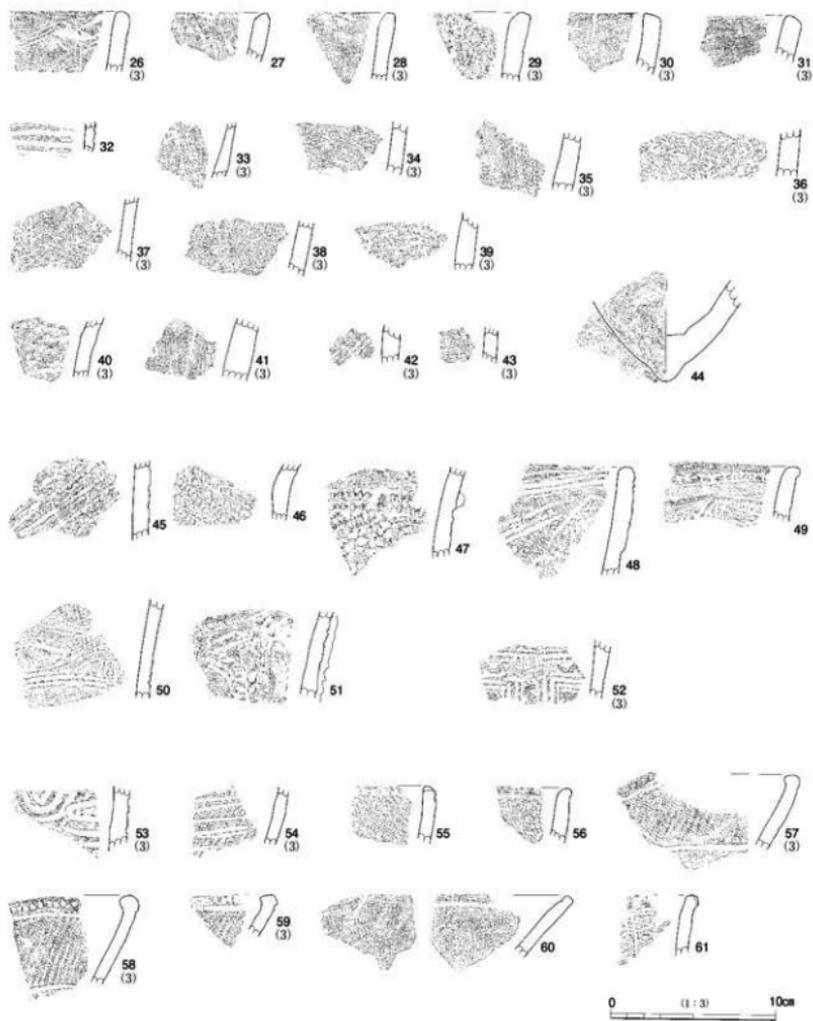
52は五領ヶ台式の胴部破片である。横方向と縦方向に交互刺突文が施されている。木更津市朝から1点出土しており、中期の土器はこれ以外には出土していない。

53~61は後期に比定した土器である。調査地点のほぼ全域から散在して出土した。53は地文に縄文を施文しその後やや太い沈線で曲線を加えている。堀之内式の深鉢で胴部の破片になる。54~61は加曽利B式になる。深鉢のほか57・58のように波状口縁となる鉢も存在する。60は内外面とも丁寧にミガキが施され無文になっている。61は粗製深鉢の口縁部である。

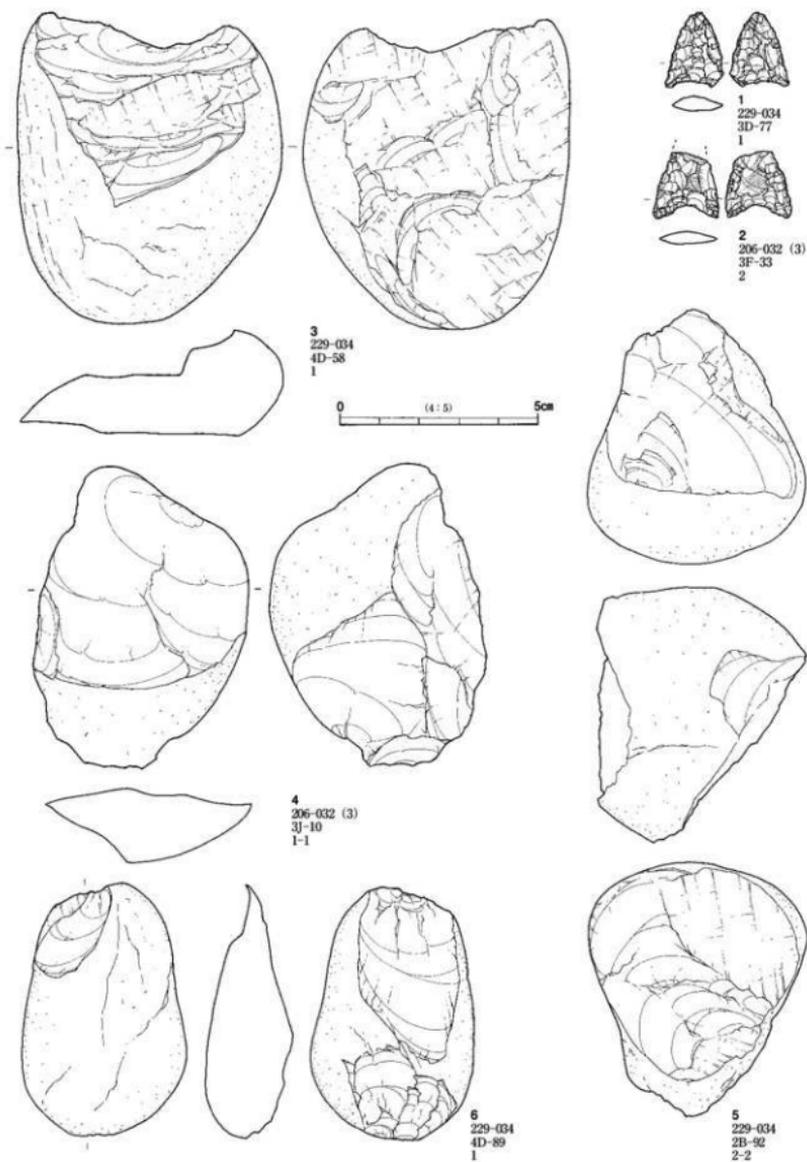
石器(第32~41図、図版14)

この調査地点から出土した石器は35点である。石器個々については属性表に提示しているので、図と併せて参照願いたい。ここでは表の器種について補足を行っておきたい。表で加工具Ⅰとしたのは未加工の円礫を加撃や堅果類の加工に使うものである。加工具Ⅱとしたものは、円礫の一端を剥離し、加撃具、加工具として使うものである。

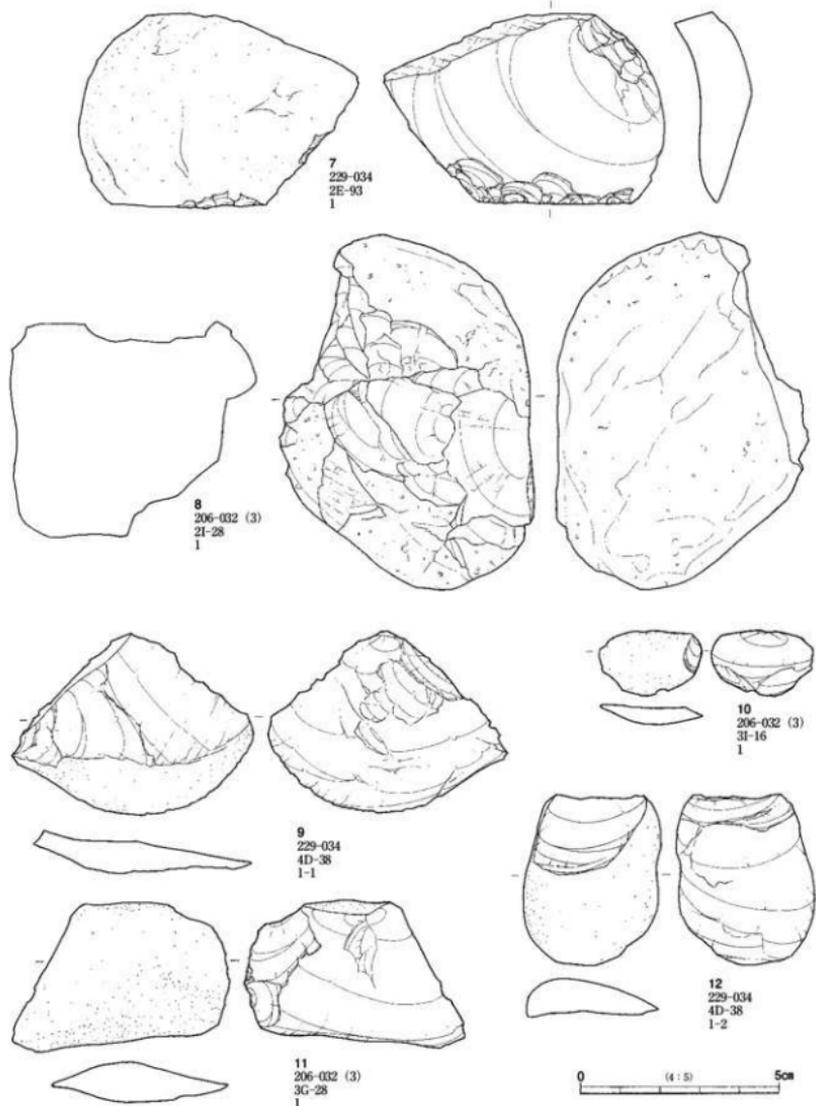
第32図1・2は石鏃である。石鏃は林遺跡(2)から1点出土しており、合計しても3点と少ない。1はチャート製で2は黒曜石製である。3~7は石核である。石材は多様で、3は玉髓、4は砂岩、5・6



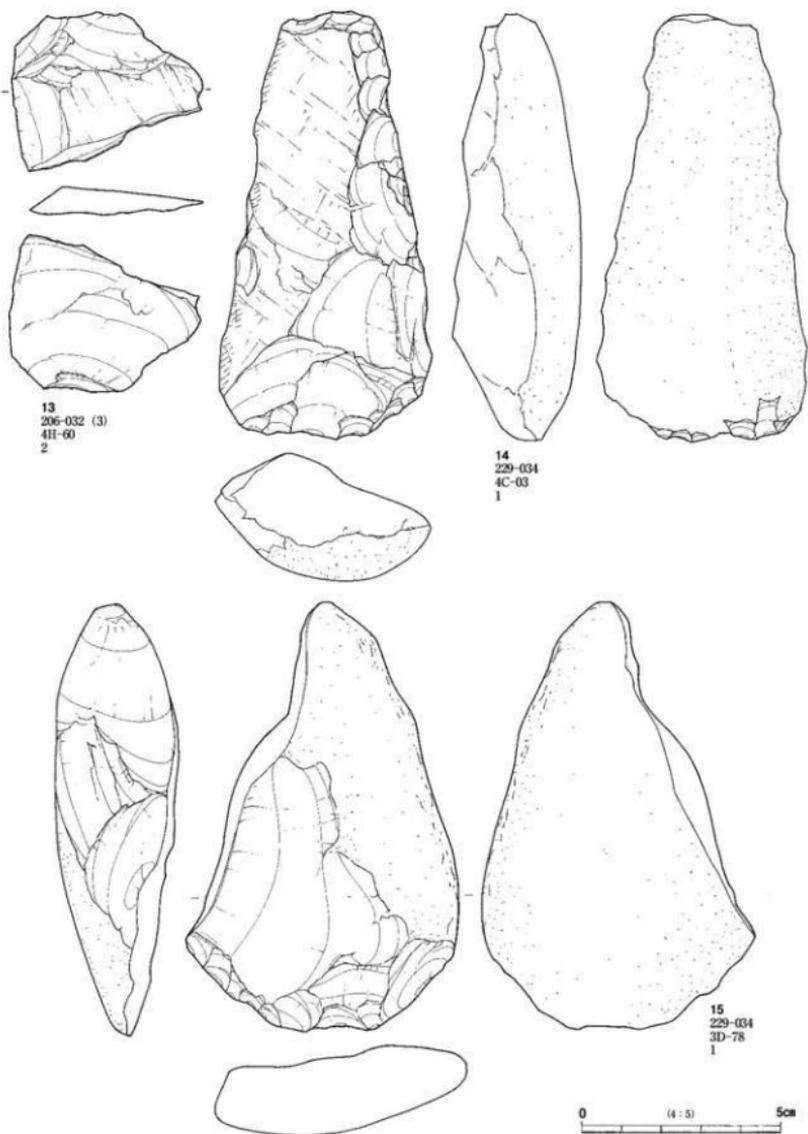
第31図 林道跡・林道跡 (3) 出土縄文土器 (2)



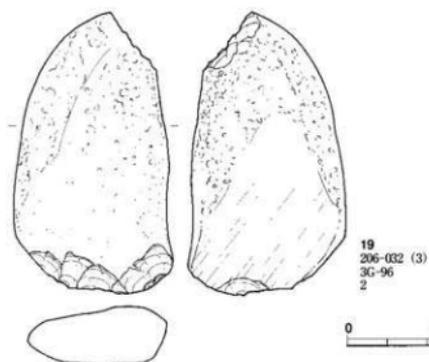
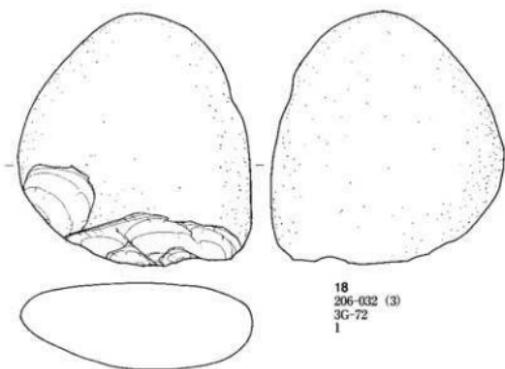
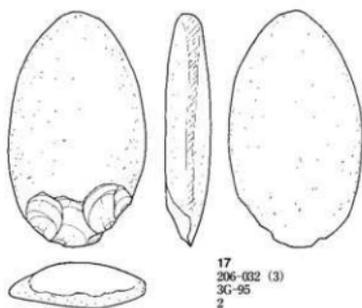
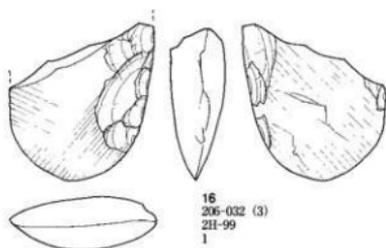
第32図 林遺跡・林遺跡(3)出土縄文時代石器(1)



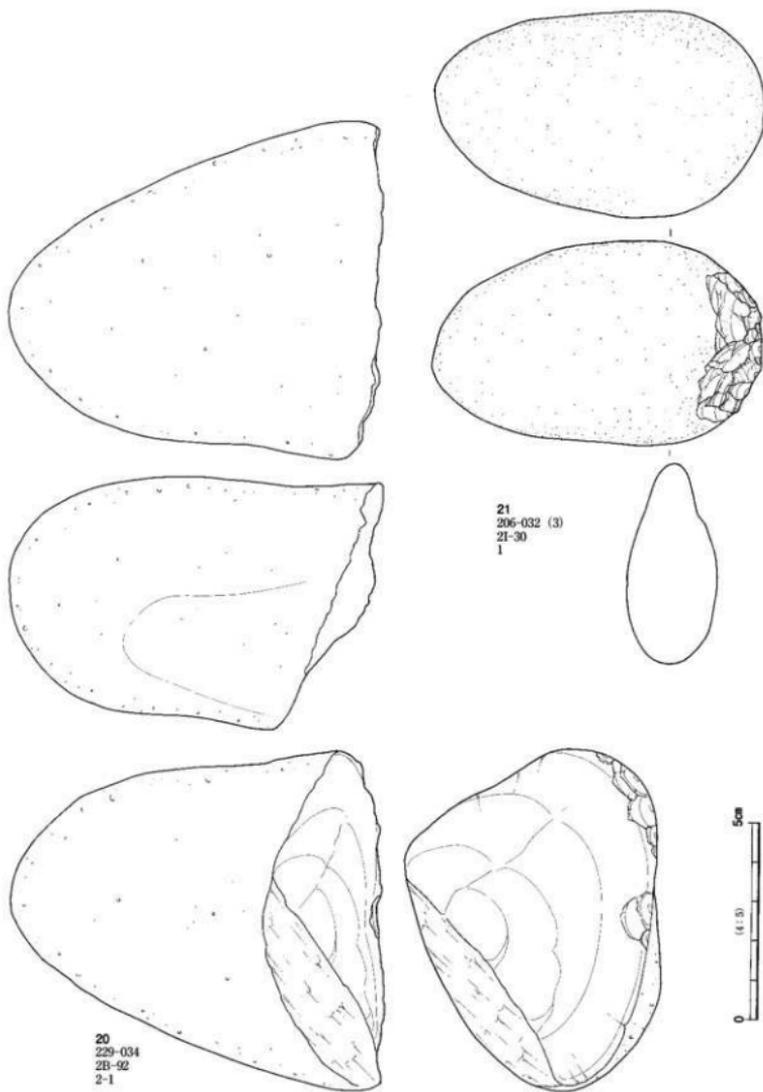
第33図 林遺跡・林遺跡(3) 出土縄文時代石器(2)



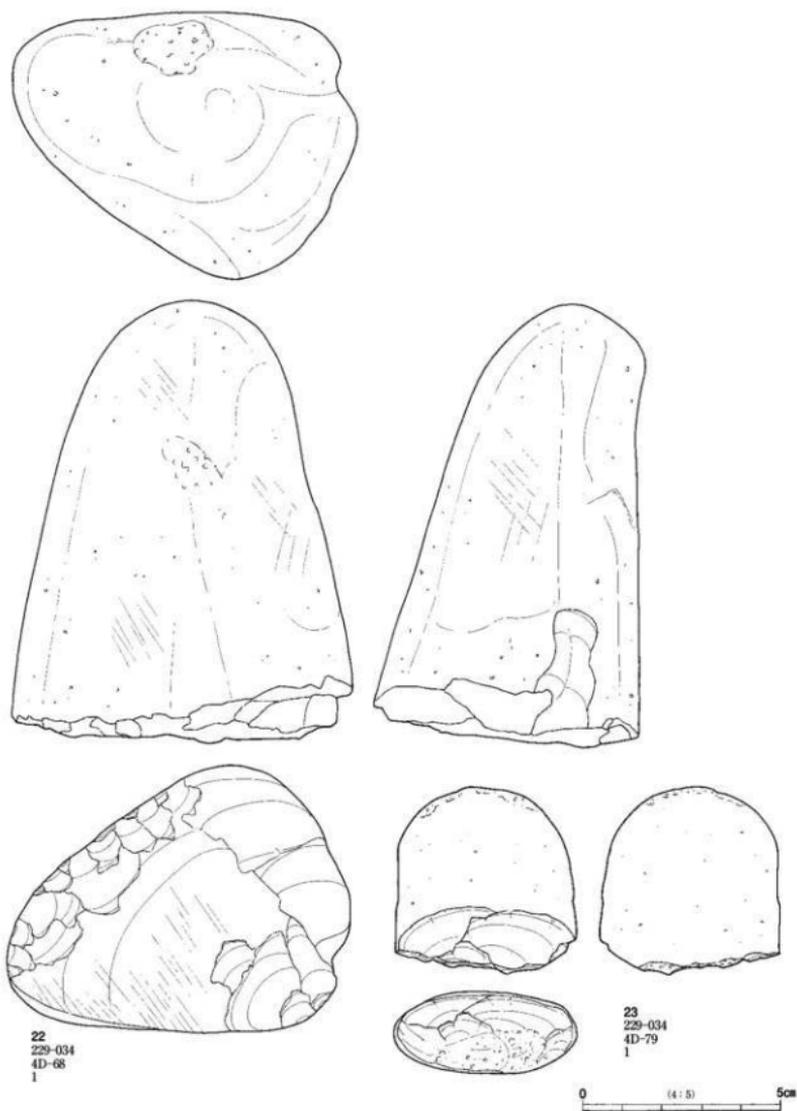
第34圖 林遺跡・林遺跡(3)出土縄文時代石器(3)



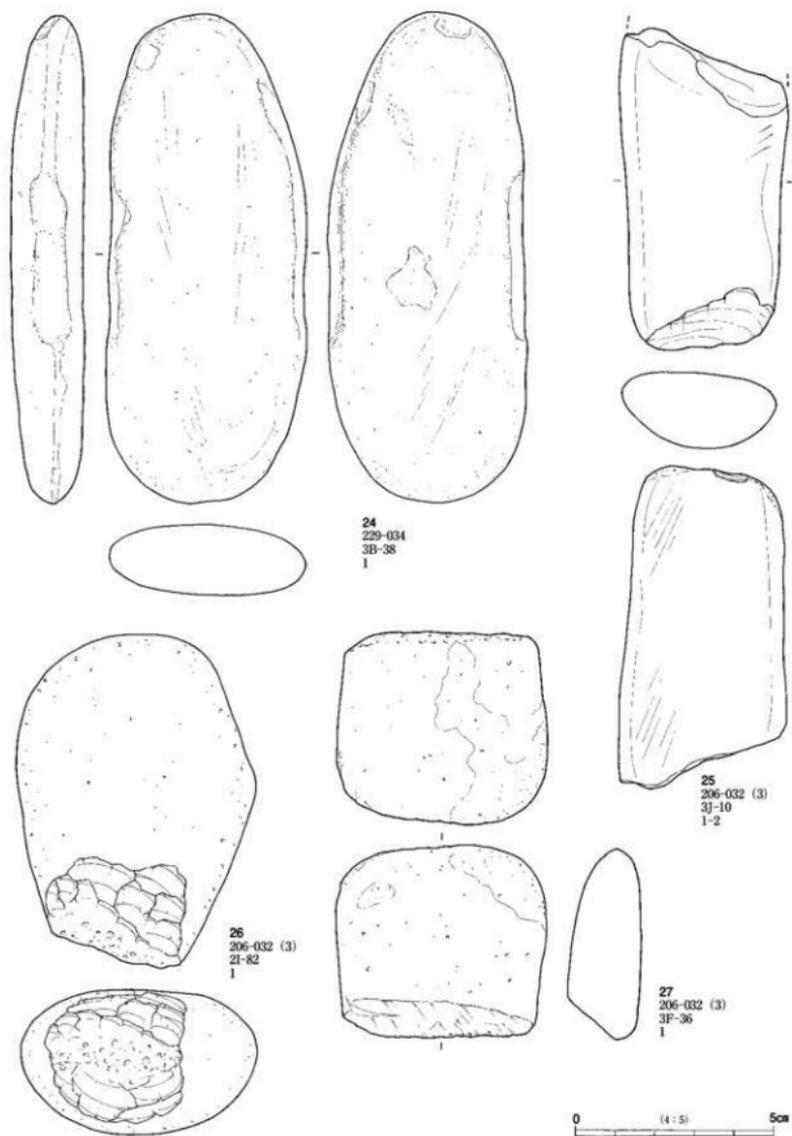
第35図 林遺跡・林遺跡 (3) 出土縄文時代石器 (4)



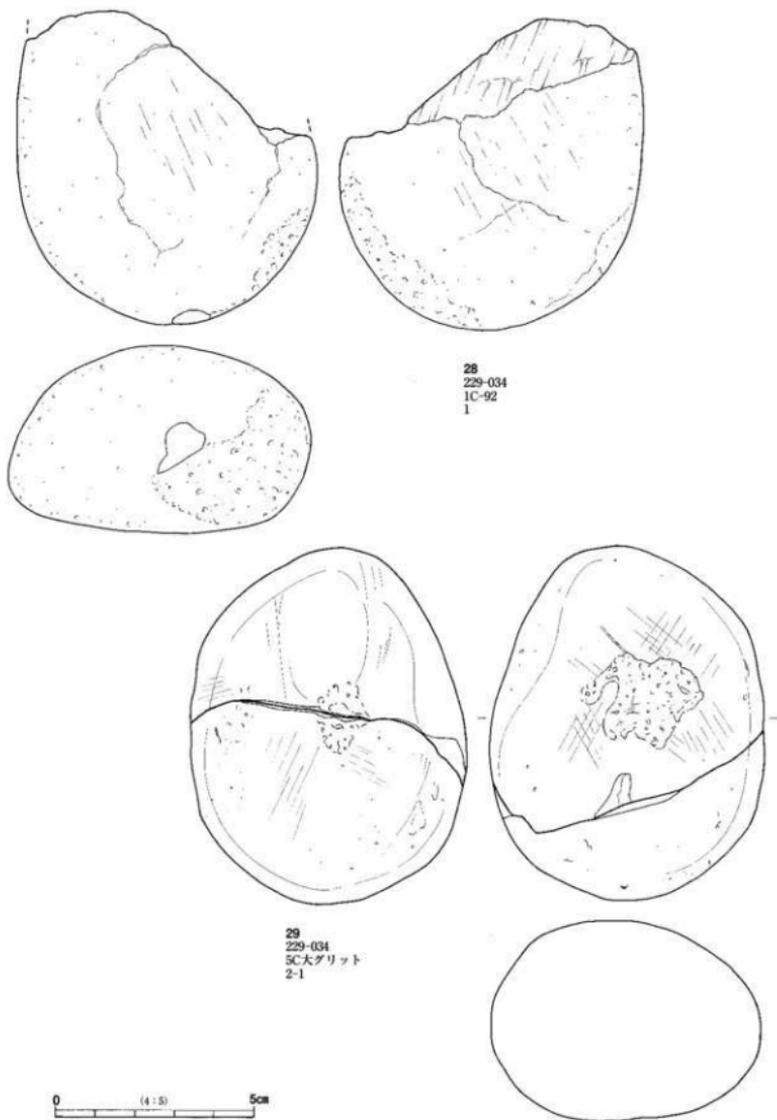
第36図 林遺跡・林道跡(3)出土縄文時代石器(5)



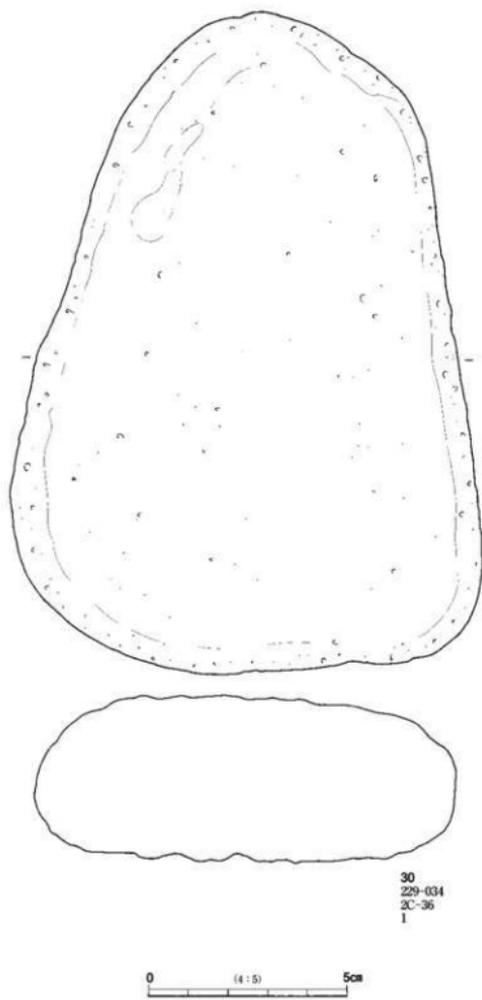
第37図 林遺跡・林遺跡(3)出土縄文時代石器(6)



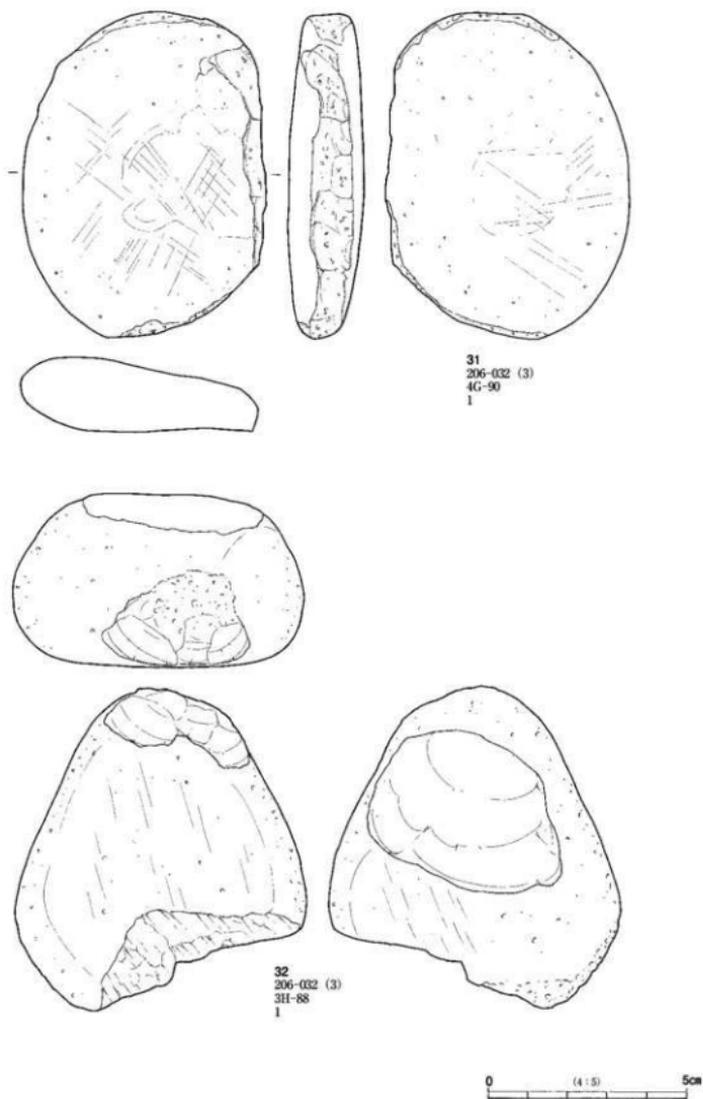
第38図 林道跡・林道跡(3)出土縄文時代石器(7)



第39図 林遺跡・林遺跡 (3) 出土縄文時代石器 (8)



第40圖 林遺跡・林遺跡(3)出土縄文時代石器(9)



第41図 林遺跡・林遺跡(3) 出土縄文時代石器(10)

はチャート、7は無斑晶流紋岩である。6は両極剥片の特徴を示す資料である。7は周辺に加工の痕跡が認められる。8は頁岩の原石になる。9～13は剥片である。石材は砂岩ホルンフェルスである。

14・15は打製石斧である。両者とも原礫面を残している。14は細粒凝灰岩製、15はホルンフェルス製である。第35図16は局部磨製石斧の欠損品である。石材は砂岩である。

17～21は円礫加工具Ⅱと分類したものである。いずれも円礫の一端に剥離を施している。石材は砂岩が多く、ほかに溶結凝灰岩がある。

22～32は円礫加工具Ⅰと分類したものである。加撃に用いた部類が多く存在する。24・28・29は加撃や揺り潰しに用いられたと推測される。

このほかに礫が1,788点出土しており、重量で140kg強になる。これらは、石器や土器と同様に、上層遺構の確認トレンチや、上層遺構の本調査に伴う拡張によって出土したものである。詳しくは第4・5表にまとめたとおりである。主要な石材はチャート、溶結凝灰岩、砂岩であるが、ほかにホルンフェルス、泥岩、玉髓などが含まれている。これらの礫の供給源は、遺跡の所在する基盤岩と考えられる。礫は完形と破損したものが存在し、それぞれ熱を受け赤化した部類と非赤化のものがある。また、大きさも最大値が100mm以上となるもの(表の中でaとしているもの 以下同様)、50mm～100mm (b)、30mm～50mm (c)、30mm以下 (d)に分けた。その結果は、点数では破損礫で赤化が認められるcの大きさが最も多く出土していることが明らかになった。次に破損し赤化しているbの礫、3番目に完形で赤化しているbの大きさの礫、という集計結果となった。

3 奈良時代以降

奈良時代以降に比定可能な遺構としては、いわゆる方形周溝状遺構がある(第42図)。遺構は標高70mの等高線の内側に分布し4基が存在する。ただ、その中の1か所については、2方向の溝を共有する検出状況からみて拡張が行われたと考えられる。

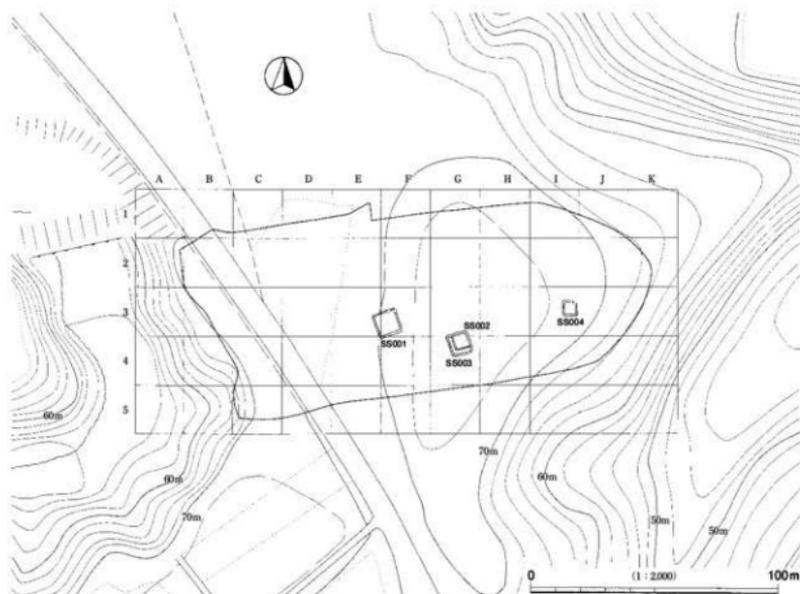
SS001(第43図、図版3)

3F-71を中心とした位置に検出された。全4基のなかでは最も西側に位置する。調査前に盛土の痕跡は認められず、遺構検出面まで全域掘り下げ、方形に巡る溝を明らかにした。3か所に木の根による擾乱が認められるものの、溝は途切れる部分がなく全周していたと判断できる。溝の内側上端での規模は、南北方向に約8.5m、東西方向に約8.5mで四隅にやや丸さを認めるが、整った方形を呈している。南北方向の溝については、北から西へ20°振れている。

溝の幅は65cm～110cm前後で、検出面からの深さは20cm～55cmである。断面形態は逆台形を呈する部分が多いが、やや開き気味のUの字形となる部分も見受けられる。底面の標高は南側が北側の溝よりも高くなる傾向が認められる。覆土はローム粒を含む黒褐色土や暗褐色土が主体になる。

この種の遺構は墓としての性格を有していたと考えられ、周辺遺跡の状況からもその判断に間違いはないと考えられる。しかし、ここでは埋葬施設や副葬されたと推測可能な遺物は検出されていない。本来盛土があった可能性は高いが、仮に埋葬に関連する施設、例えば墓坑が盛土の中に掘り込まれ、ローム層にまで達していない場合などは、その痕跡を目にすることはできないと考えられる。

遺物は溝の覆土中から礫が出土している。そのほか遺構に伴う遺物は出土していない。



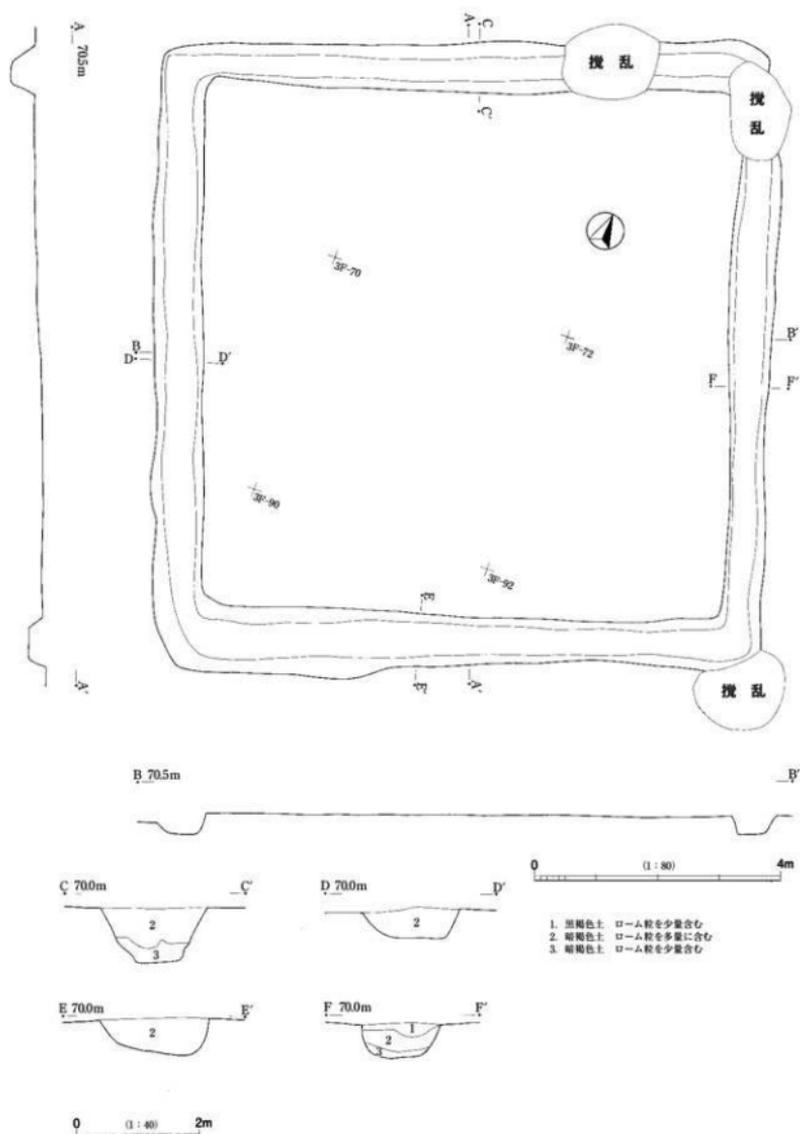
第42図 林遺跡 (3) 方形周溝状遺構分布図

SS002・003 (第44図、図版3)

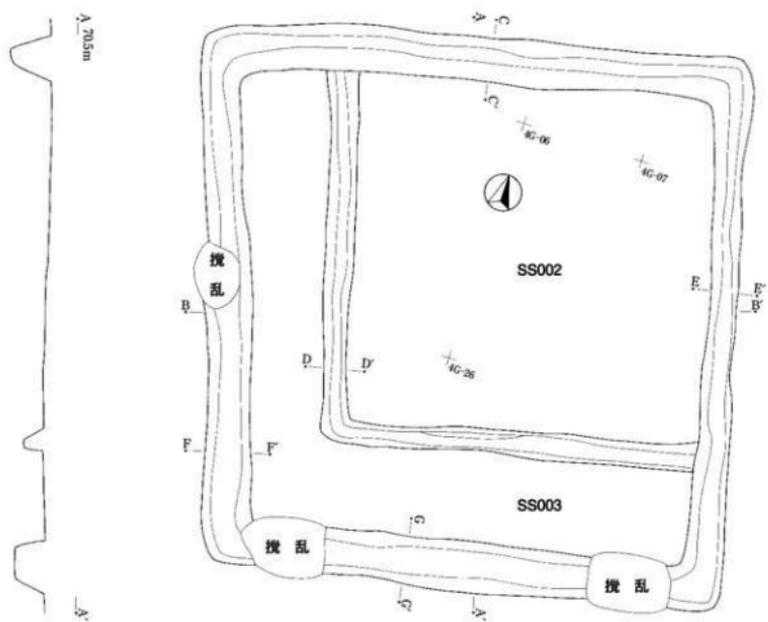
4 G-16を中心にした位置に検出された。SS001から東に18mの位置で、SS004とは直線距離で約38mの距離をおいている。確認調査で溝の存在が明らかになっていたが、盛土の痕跡は認められず、遺構検出面まで全域を掘り下げた。その結果、1辺8.8m前後で方形に巡る溝の内側に、2辺の一部を共有しそこに連結するL字状の溝が存在すること明らかになった。この内側の方形に巡る溝の存在から、外側の区画に先行して構築された方形周溝状遺構があったことが判明した。先に構築された小型の方形周溝状遺構にSS002という遺構番号を付し、後から造られた方形周溝状遺構をSS003とした。

SS002は構築当初の状況は断定できないが、検出状況から判断すれば、溝は途切れずに全周していたとみられる。溝の内側上端での規模は、南北方向に約5.6m、東西方向に約5.7mで整った方形を呈している。南北方向の溝については北から西へ19°振れている。溝の幅は北側で80cm前後で、他は50cm前後である。断面形態は逆台形で、深さは東側60cm、西溝と南溝は30cm前後である。覆土はローム粒を含む暗褐色土が主体になる。埋葬施設や埋葬に関係すると考えられる遺物は検出されていない。

SS003は木の根による攪乱が南溝に2か所、西溝に1か所の計3か所に認められるが、検出状況からは全周していたと判断できる。溝の内側上端での規模は、南北方向に約7.4m、東西方向に約7.4mで整った方形を呈している。溝の南北方向の向きはSS002と同様に北から西へ19°傾いている。溝の幅は東溝で50cm前後で、他は70cm～90cmである。深さは50cm～55cmになり、断面形態は逆台形を呈し、底面は全体に平



第43図 SS001



B 70.5m

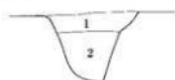
B'



0 (1:80) 4m

C 70.2m

C'



D 70.2m

D'



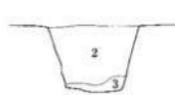
E 70.2m

E'



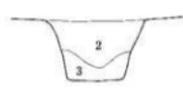
F 70.2m

F'



G 70.2m

G'



1. 原層位: ローム状を少量含む
2. 中間位: ローム状を少量含む
3. 新層位: ローム状を多量に含む

0 (1:40) 1m

第44図 SS002・003

坦になる。覆土はローム粒を含む黒褐色土や暗褐色土が主体になる。

埋葬施設は検出されず、遺構に伴うと考えられる遺物の出土も皆無である。

以上のような検出状況から推測すると、最初のSS002が構築され、その後東側の溝と北側の溝を延長する形で、拡張を図りSS003を構築したと推測される。SS002の方台部面積は約31.9㎡、SS003の方台部面積が約54.8㎡なので、当初に比較し拡張後は1.7倍の規模になったことになる。また、施設の拡張時にはSS002の溝をさらに掘り下げたことも推測される。いずれにしても、盛土の状況や、埋葬施設の有無について明らかにする痕跡は残存していない。

SS004（第45図、図版3）

3 I-48を中心にした位置に検出された。SS002・003から直線距離で40m東に存在し、調査区のなかでは最も東側に位置する。ほかの3基と同様に調査前に盛土の痕跡は認められず、方形に巡る溝の存在のみが明らかになった。溝は北東の隅で途切れた状態で検出され、そのほか3か所の隅はやや丸みをもっている。また、東溝が西溝よりも長さが短いため、全体に歪んだ状態を呈している。中央部の溝内側上端での規模は、南北方向に約4.9m、東西方向に約4.9mで、南北方向の溝は北から東へ約12°傾いている。溝の幅は北溝と東溝で55cm前後で、南溝と西溝が80cm前後である。検出面からの深さは10cm～20cmである。溝の断面携帯は逆台形であるが、第45図に示したように、溝底面の標高は場所によってかなり異なる状況が認められる。覆土はローム粒を含む黒褐色土や暗褐色土が主体である。

埋葬施設や遺物は検出されていない。

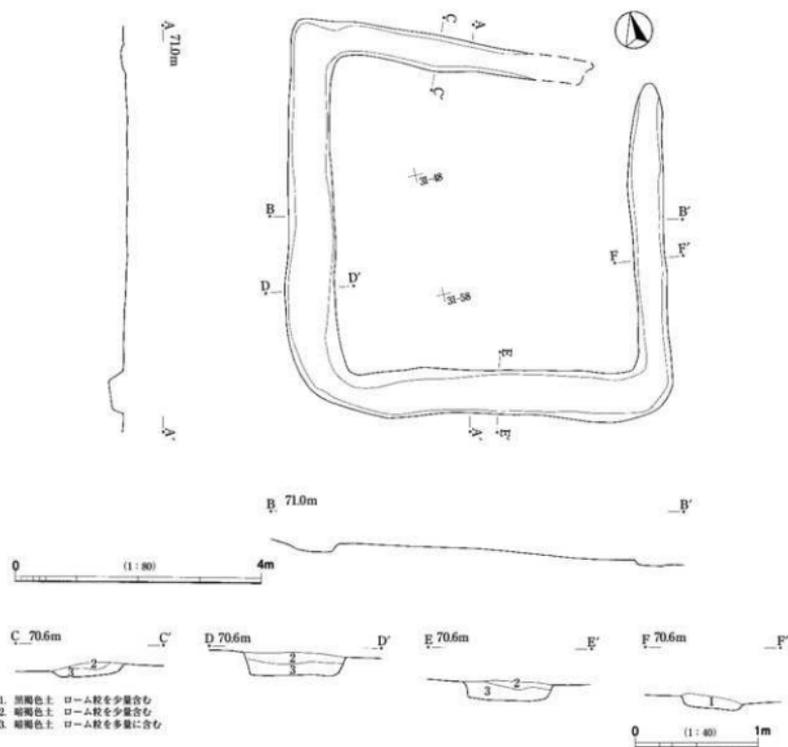
SD003・004（第46図）

袖ヶ浦市域の林遺跡で検出された溝状の遺構である。位置は3 D～4 Eであり、SD003は長さ40mを検出した。SD004はSD003の西側に検出され、土層断面の観察からSD003の後に掘られていることが明らかになった。

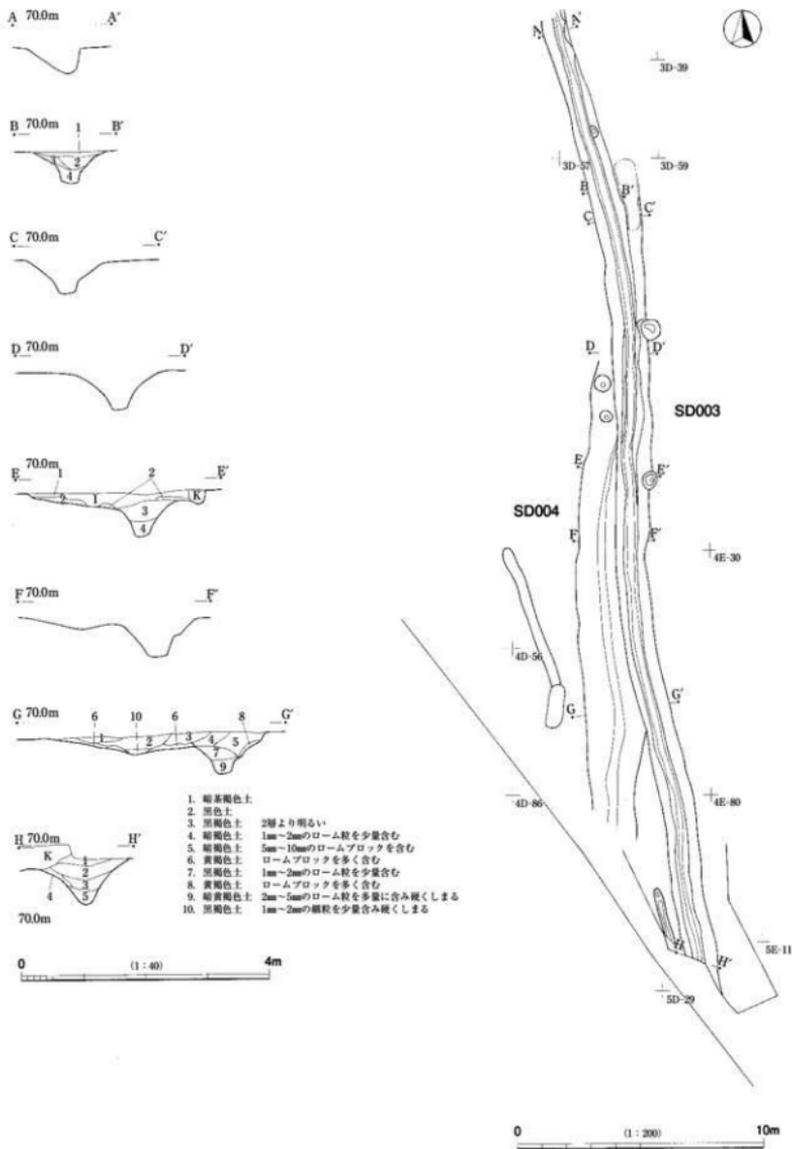
SD003は幅100cm～140cmで、北側が南側に比較すると狭くなる傾向が認められるが、ほぼ一定した幅で掘られている。溝の底は平坦にされ、幅は30cm内外である。深さは北側で40cm前後を測り、南側で60cmとなる。底面の標高を比較しても、北から南に向かって傾斜している状況が認められる。

SD004はSD003とほぼ同じ方向に延びている。幅は220cm前後で深さは20cm程度と全体に浅い。底面は平坦で、幅は40cm前後である。部分的に硬化している面が残存している。道として機能していた可能性が高い。

いずれからも時期を決定づける遺物は出土していない。



第45図 SS004

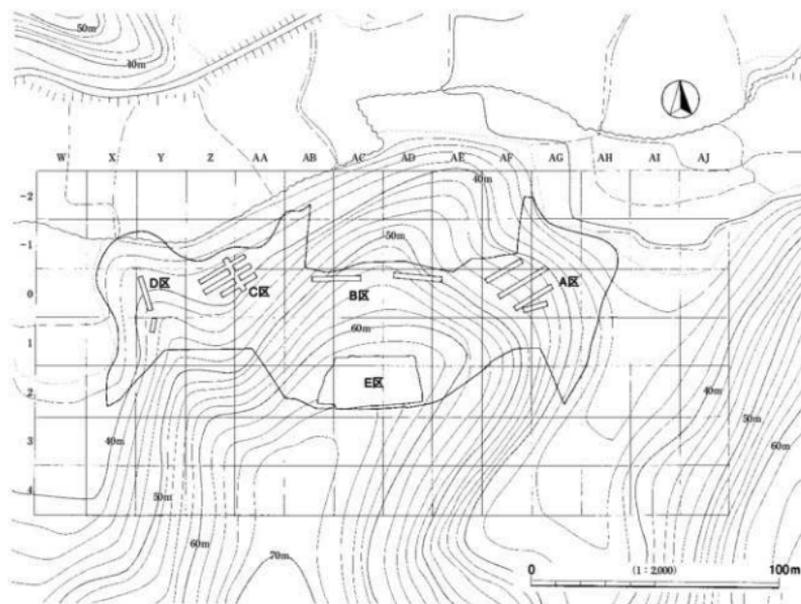


第46図 SD003・004

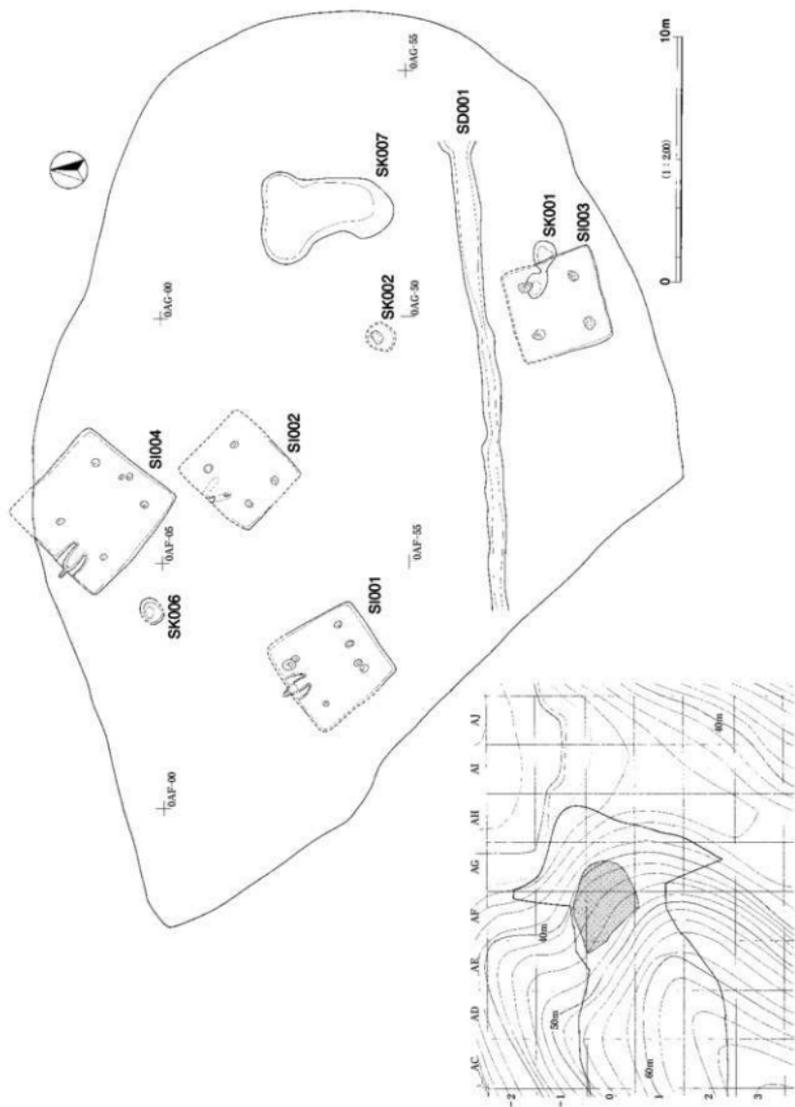
第2節 林遺跡(2)・林城跡

第1章において概略を述べたとおり、本地点は斜面部が大部分を占めている。ただ、見かけ上平場の形成が数か所に存在することも明らかであった。城跡という所見も平場の存在を根拠の1つとしていた。その平場に対してトレンチを設定した。大グリッドの0AF・0AG付近をA区、0AB～0AE周辺をB区、0Z・0AA付近をC区、0Y・01Y周辺をD区と仮称して、各平場に幅2mの長さ任意でトレンチ調査を行った。また、標高62mの等高線の内側については、全面に表土を除去し、E区と仮称した。仮称A区～D区におけるトレンチ調査の結果、A区において竪穴住居が確認され、周辺を拡張して検出遺構の調査を実施した。A区では古墳時代後期から奈良時代の竪穴住居4軒と、縄文時代に帰属する可能性のある炉穴3基、土坑1基、溝1条を検出した。また、当初から表土除去を実施したE区では、炉穴3基を調査した。ほかに表土中から縄文土器、縄文時代の石器が出土した。

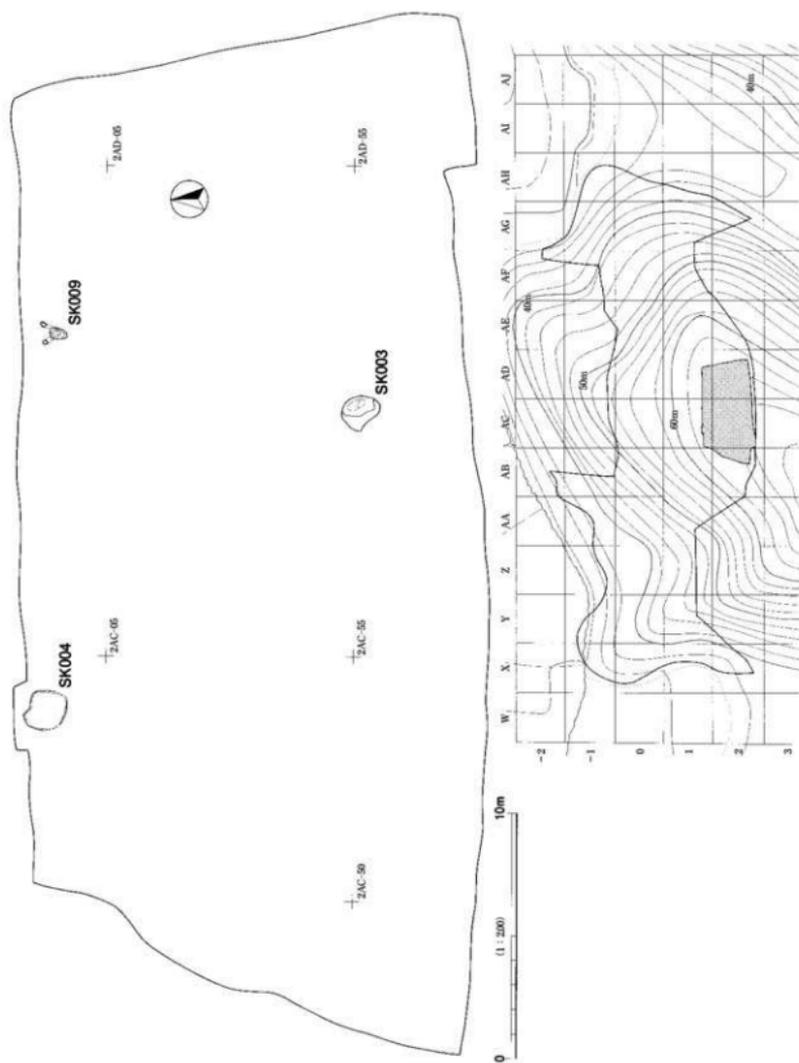
斜面部に存在が確認できた平場については、人為的に平坦面を構築したともみられ、城跡である可能性があるため、発掘調査に入る前に、路線内と周辺に限定した範囲について地形測量を行った。地形測量では、土塁や堀の形跡は認められず、平場に対して実施したトレンチ調査によっても、城跡に関連する遺構や遺物は発見されなかった。



第47図 林遺跡(2) 上層遺構確認トレンチ設定図



第48图 林道跡 (2) A区遺構分布図



第49图 林道跡 (2) E区遺構分布図

1 縄文時代

縄文時代の炉穴になると考えられる遺構は、A区とE区において発見されている。また、トレンチ調査や表土除去、あるいは遺構の精査に伴い出土した縄文土器や石器を回収した。

SK001 (第50図)

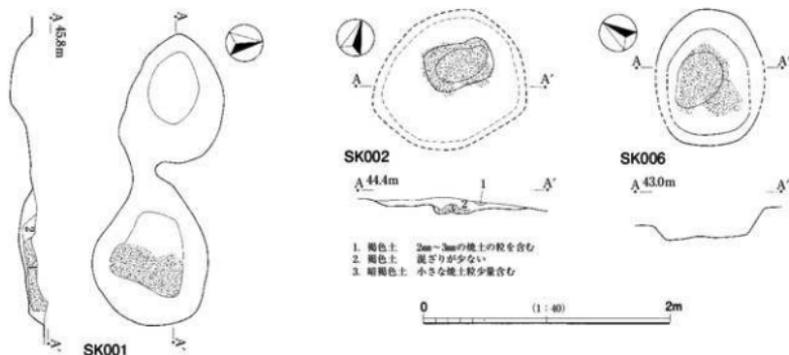
A区に検出した。A区の南側である0AG-70・71に位置する。平面形態は楕円形の土坑が連結して瓢形と呼べるような形状を示している。長軸長は240cmで、東側に焼土が堆積が認められる。検出面から10cmで火床部上面になる。火床部は厚さ7cmに赤化し硬化する。覆土は焼土粒を含む暗褐色土を主体にして

いる。遺物は出土していない。明確な時期決定はできないが、縄文時代の炉穴の可能性はある。

SK002 (第50図、図版15)

A区の0AF-49に位置している。検出面で焼土を確認しているが、掘り込まれている範囲は確定できず、焼土の堆積のみを検出した。焼土堆積遺構という検出状況を呈している。焼土は長径50cm、短径35cmの楕円形の範囲に堆積する。

遺構の平面形が不明で遺物も出土していないため、明確な判断は困難であるが、現場での所見にしたがい縄文時代の可能性が高い遺構としておきたい。

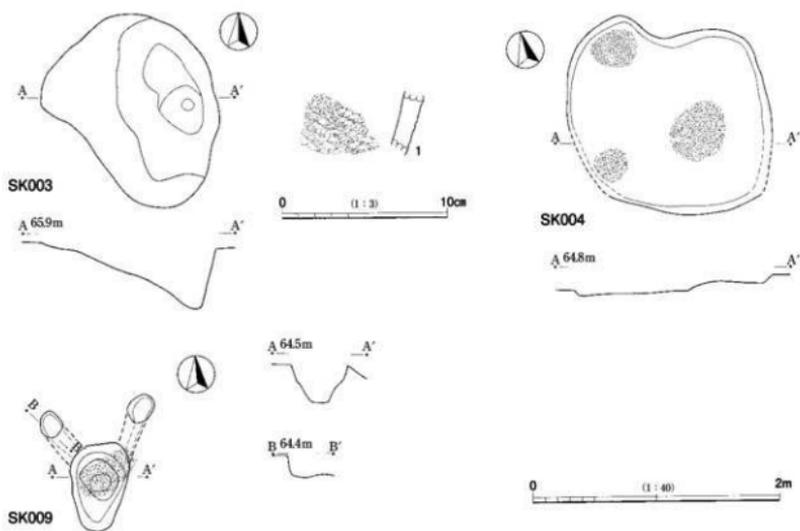


第50図 SK001・002・006

SK003 (第51図)

E区の2AD-50のグリッドポイント付近に位置する土坑である。長軸長160cm、短軸長135cmの不整長楕円形を呈している。検出面からの深さは50cmである。断面形状は漏斗状を呈し、土坑底部はすばまっている。覆土はローム粒を含む暗褐色土を主体にする。

覆土中から1の縄文土器破片が出土している。深鉢の胴部とみられ、縄文が施文されている。遺構の性



第51図 SK003・004・009

格や時期は不明であるが、縄文時代の遺構の可能性はある。

SK004 (第51図)

E区の1 A C-83付近に位置する土坑である。長軸長190cm、短軸長170cmの不整長円形を呈している。検出面から底面までは8cmと浅い。タライ状の形態を示し、底面に焼土の痕跡が2か所と炭化物の分布が1か所認められる。

覆土もほとんど残存せず遺物も出土していない。縄文時代の遺構の可能性も否定はできないが、それよりも新しい時期の遺構であるかもしれない。

SK006 (第50図、図版15)

A区の1 A F-93付近に位置する。長軸長110cm、短軸長90cmの楕円形を呈している。深さは15cm前後で底面は平坦になる。壁はやや傾斜して立ち上がる。底面の中央部に焼土が認められる。

SK002と同じような形状である。遺物は出土していない。明確な時期や性格は明らかでない。

SK009 (第51図、図版15)

E区の1 A D-91付近に検出された。長軸長70cm、短軸長50cmの楕円形を呈する遺構の北側に、北東方向と北西方向に延びる煙道状の施設が付属する。楕円形の土坑の掘り込みは20cmで、底の中央部に焼土が存在する。また、2方向に延びる煙道状の空洞のなかにも焼土が認められる。

遺物は出土していない。遺構の性格は明らかにならないが、焼土の堆積が認められる楕円形土坑の掘り

込み浅いので、この状況での炉穴としての用途には疑問がある。仮に楕円形土坑の南側につながる掘り込みが存在していたならば、焼土の検出された北側が燃焼部になり、南側が足場になる炉穴ということになる。この想定のように、かつて存在していた遺構の一部との見方も可能である。

遺構外出土の土器と石器

土器（第52～54図、図版18・19）

遺構に伴わない遺物に縄文土器、石器、礫がある。縄文土器は総破片数95点とわずかである。

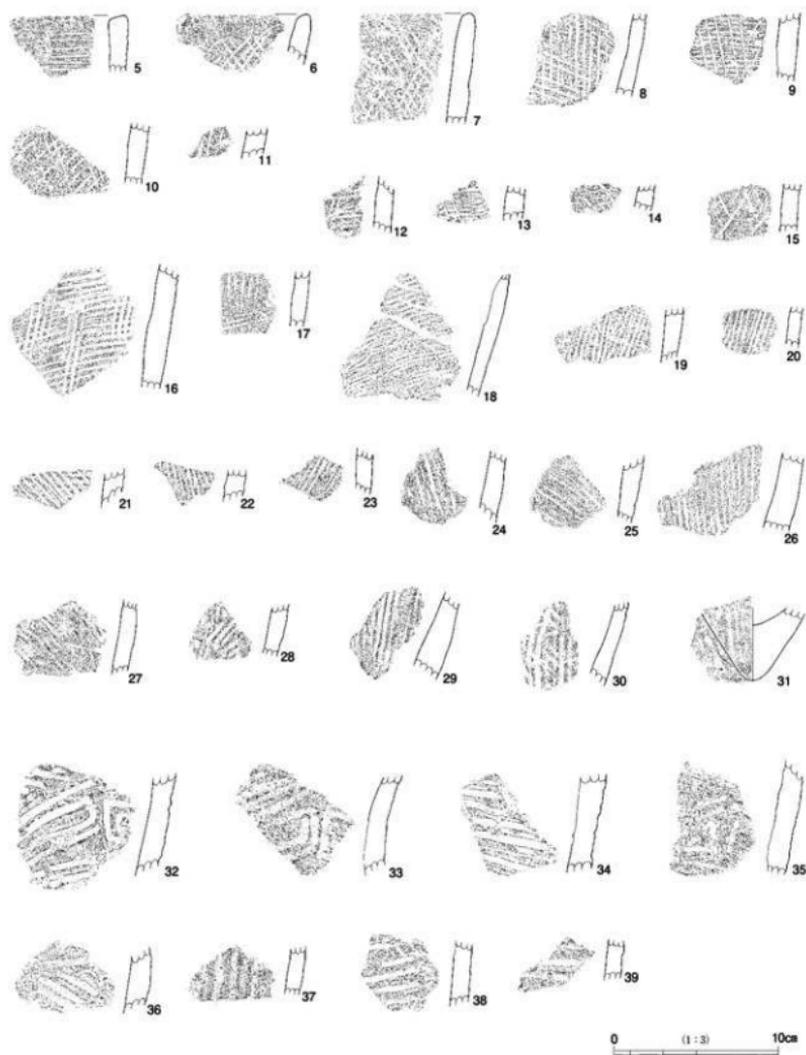
第52図は撚糸文系土器である。総数で5点出土し、4点を提示した。提示した土器片はすべてA区から出土している。1は口縁部である。口唇部は丸くわずかに外反する。口唇部の上部から縦方向に撚糸文が施文される。撚糸文の間隔は狭い。内外面とも摩滅している。胎土に砂粒を含む。2～4は胴部である。4は判然としなが、1～3は同一個体であろう。1の口縁部の特徴から夏島式とみられる。



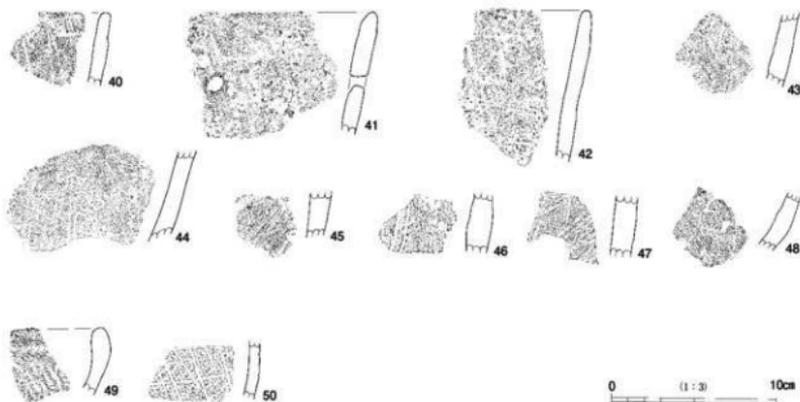
第52図 林遺跡 (2) 出土縄文土器 (1)

第53図は沈線文系土器である。5は口唇部が内側に削られやや厚くなる。口唇部直下を残し横方向の細い沈線文が施されている。胎土に石英粒や長石粒とみられる細粒が多く含まれている。内面は平滑に仕上げられている。三戸式である。6・7も内削ぎの口唇部になり平縁になると推測される。口唇部の下から胴部にかけて、細い沈線で格子状を描いている。6の口唇端部には細い刻みが施されている。二次的な火熱を受けたかのように、表面がひび割れた状態を呈する。内面の調整はナデである。8～16にも細い沈線による斜格子が描かれている。8・10は格子の間隔が密になるが、15・16は方向の異なる斜方向の沈線の間隔に粗密が認められる。また、9は平行する沈線を引いた後に斜方向の沈線を加えているが、左上がりの沈線のほか右上がりの沈線も認められることから、平行沈線の上に鋸歯状の沈線を施していた可能性がある。表面がやや摩滅していたり、二次的な火熱を受けたかのようにざらついている。胎土に砂粒を含むが目立った混和物は認められない。色調は橙褐色や暗褐色である。いずれもA区からの出土で、古墳時代以降の竈穴住居の覆土などに含まれていた。18～23は主に1方向に細い沈線を施すものである。いずれも胴部の破片になる。24～31はやや太めの沈線が斜方向に施されるものである。30は異なる方向に沈線が引かれ斜格子状を呈するが、28～31は同一個体であったと考えられる。31は底部になる。以上は三戸式に比定しておきたい。

32～39は同一個体になると考えられる。いずれもA区から出土し、36以外はSI004の覆土に入っていた。すべて胴部破片で器厚が1 cm前後と厚いので、やや大型の深鉢であったと推測される。器表面全面にナデを施した後、32・33にみられるような、枠状の区画を二重に描き、枠状の区画間に短沈線を加えている。沈線の断面は浅いUの字形になり、太いところで幅は0.5cmになる。全体に脆くなっており保存状態は不良である。色調は暗茶褐色である。田戸下層式である。



第53图 林道跡 (2) 出土繩文土器 (2)



第54図 林遺跡 (2) 出土縄文土器 (3)

40～48はA区とA区のSI004の覆土から出土している。40～42は平縁の口縁部破片である。口唇部は丸く、胴部にかけて斜方向の擦痕が観察される。部分によっては沈線にもみえるが、特に意匠を施している状況は認められない。無文に近い。41には補修孔と考えられる円孔が存在する。43～48は胴部から底部近辺になる。いずれも擦痕状の調整痕が認められる。田戸下層式の無文系統と考えられる。

49は口縁部が無文で胴部に縄文が施された鉢である。加曾利E式の新しい部類になる。A区から出土しており、唯一中期に比定した破片である。

50は縄文を施し、その上に沈線を格子状に施している。加曾利B式の鉢胴部である。

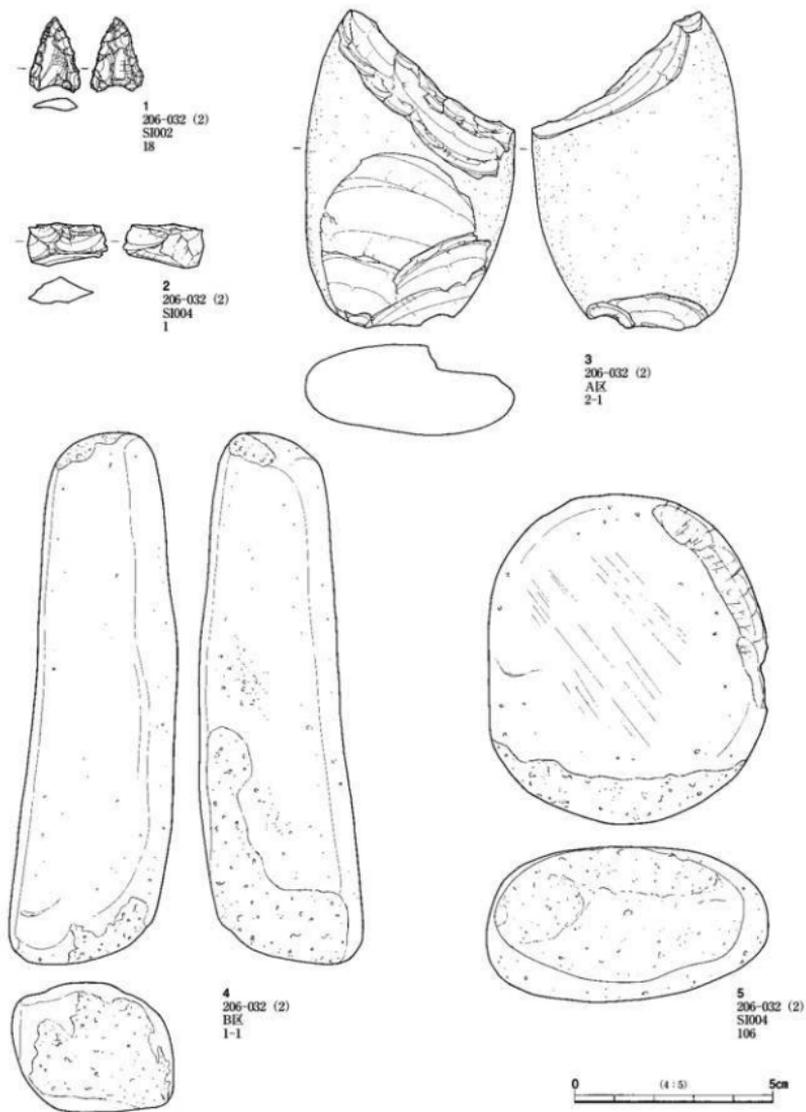
石器 (第55～57図、図版20)

第55～57図に石器を提示した。林遺跡・林遺跡 (3) と同様に、個々の石器のついでには表にまとめているとおりである。この調査地点から出土した石器は13点で、その中の10点を図示している。

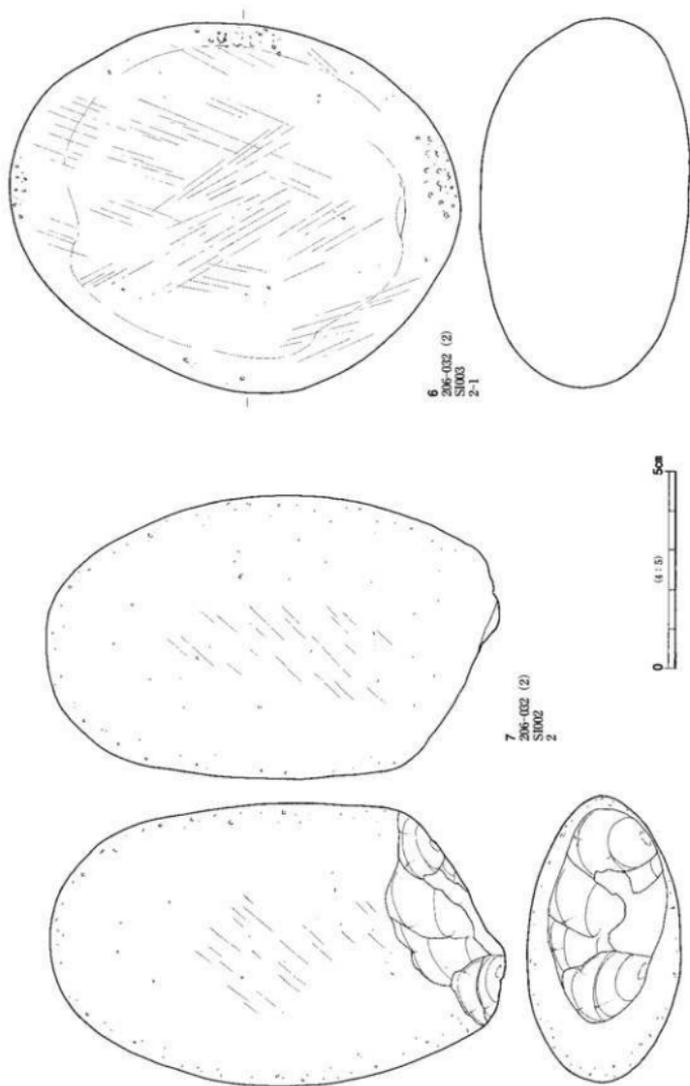
1は黒曜石製の石鏃である。2はチャートの剥片になる。

3は円礫製加工具Ⅱに分類したホルンフェルス製の石器である。4～10は加撃や堅果類の加工に用いられた円礫の加工具である。表の中で円礫製加工具Ⅰとした礫を使った石器になる。4は長さ134.6mmの礫の端部に加撃痕が認められる。ここでは4のような長軸と短軸の長さが大きく異なる石器は例外で、平面形と断面形が楕円形となる礫の選択が優越している。

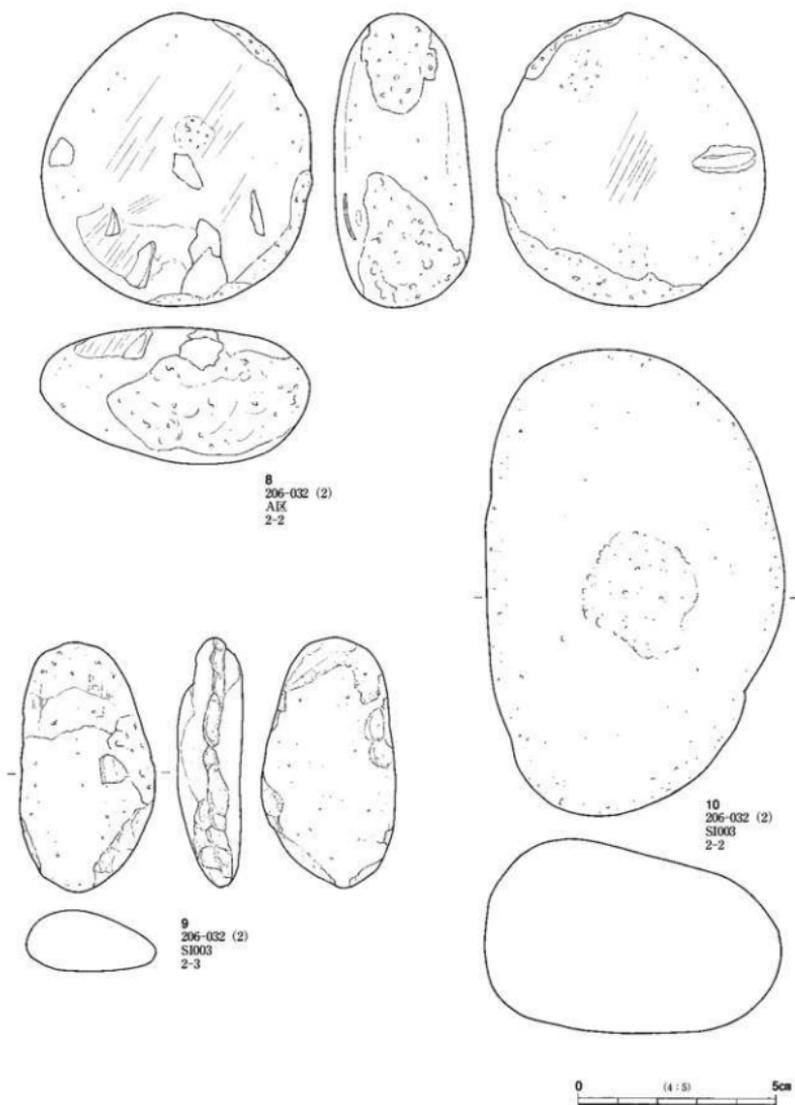
ほかにA区の拡張の際や古墳時代以降の堅穴住居の覆土中を主体に礫が出土している。この礫についてはまとめたなかで詳述する。



第55図 林遺跡 (2) 出土縄文時代石器 (1)



第56図 林遺跡 (2) 出土縄文時代石器 (2)



第57図 林遺跡 (2) 出土縄文時代石器 (3)

2 古墳時代以降

古墳時代から奈良時代にかけて構築された遺構はA区においてのみ検出された。検出された遺構は、堅穴住居4軒、土坑1基、溝1条である。

SI001 (第58図、図版21・22)

OAF-32付近に検出されたカマドを北壁に設けた方形の堅穴住居である。主軸方向の傾きは北から西に38°振れている。規模は主軸方向に4.1m、その直交方向に4.0mで、壁は最大で21cm前後残存する。壁は全体に南側で立ち上がりがとらえられ、北側ではほとんど明瞭な立ち上がりが残存していない。壁の下に壁溝は認められない。柱穴はP1～P4の4か所が該当する。それぞれの床面からの深さは、P1が44cm、P2が44cm、P3が40cm、P4が51cmである。4か所に掘られた柱穴が正しく対角線上には配置されていないため、やや歪んだ配置状況となっている。P5は入り口の梯子穴になるとみられるが、真っ直ぐな掘り込みとなっていて、深さは17cmになる。P3に隣接する深さ51cmのP6の性格は明らかにならない。

床面は4か所の柱穴を繋ぐ内側に硬化面の形成が確認できたが、全体にやや東側に傾斜する状況がとらえられた。

カマドは北壁のほぼ中央に設けられている。遺構全体の保存状態が不良であるため、カマドの残存部も限定的である。袖部の基部と火床部の存在が明らかになる程度の遺存状況である。煙道は壁を掘り込んで住居の外に延びており、火床部はその煙道部に近いカマド奥に存在する。カマドの右側に隣接して土坑が存在する。位置から考えるとこの土坑は貯蔵穴であった可能性が高い。ただ、後述する遺物が本堅穴住居に伴うとすれば、極めて数少ないこの時期の貯蔵穴になると考えられる。

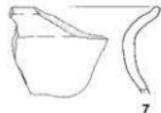
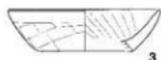
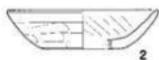
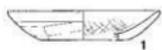
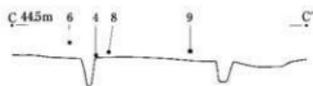
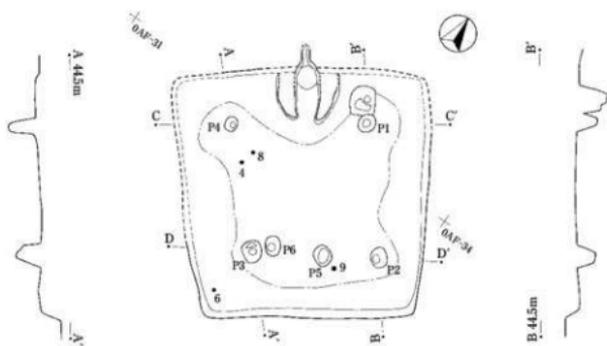
覆土は暗褐色土や黒褐色土が主体になる。

遺物は土師器、須恵器、鉄製品が出土している。出土量は少なく、保存状態の優れた個体は存在せず、破片で出土している。1～3は土師器の杯である。外面は口縁部と体部が調整で分かれる。内面は1に斜格子状の暗文が施され、2・3には斜行する暗文が施されている。4は小型の甕につく脚部と考えられる。5～7は緩やかに外反する甕の口縁部である。8は須恵器甕の胴部である。9は鉄製品で穂摘み鎌の一部になるとみられる。

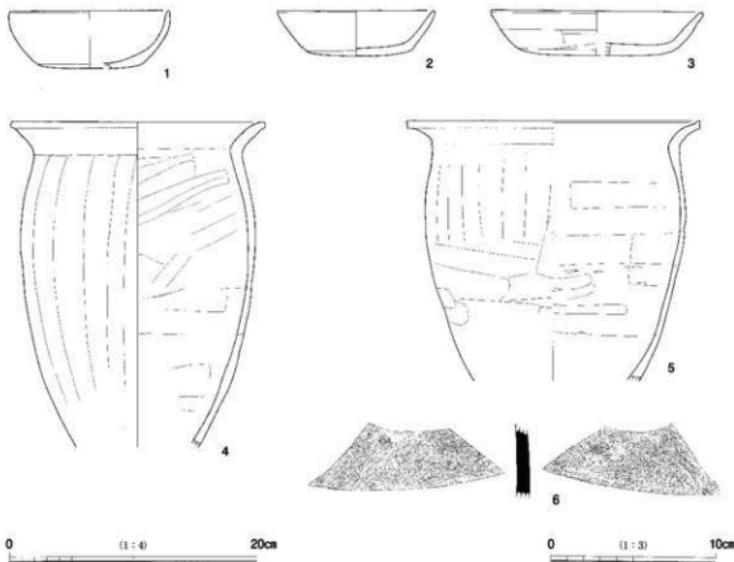
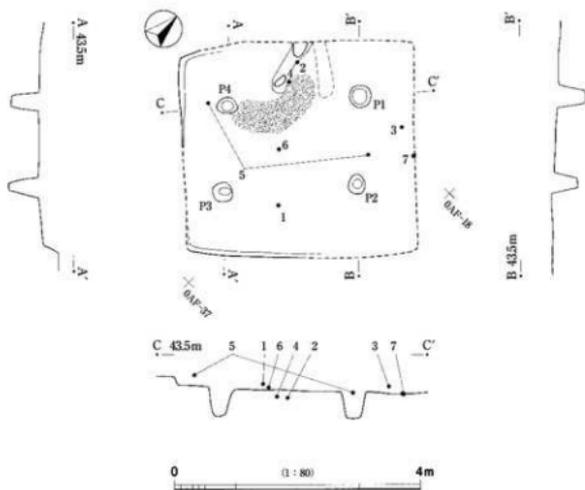
SI002 (第59・60図、図版16・21・22)

OAF-16・17付近に検出されたカマドを北壁側に設けた方形の堅穴住居である。SI001の北東側に存在し、主軸方向は北から西に45°振れている。壁を部分的に検出したにとどまり、保存状態がかなり不良であるため、本来の規模がはっきりしないが、カマドをとる主軸方向に3.5mと推測され、その直交方向に3.8m前後と推測される。壁の高さは西隅で最も残存し27cmになる。そのほか南東側の壁の一部が検出されているが、検出した壁の下に壁溝は存在しない。柱穴はP1～P4の4か所が該当する。それぞれの床面からの深さは、P1が52cm、P2が44cm、P3が52cm、P4が50cmである。入り口の梯子の基部を固定するP5は存在しない。各柱穴間はP1-P2・P3-P4が140cm、P2-P3・P4-P1が210cmになり、主軸方向と直交する方向に柱間間隔が長くなる。

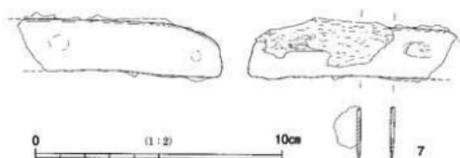
床面は比較的平坦な状態を呈しているが、踏み硬められた硬化面の拡がりは判然とせず、やや軟らかな



第58图 SI001



第59图 SI002 (1)



第60図 SI002 (2)

状態もみられる。

カマドは北側壁のほぼ中央に設けられている。遺構全体の保存状態と同様に、カマドの遺存状態も極めて不良である。左側の袖部基部が確認できる程度で、全容は不明である。カマドの全面から検出された焼土は、カマドの構築材が流出している可能性が高く、炭化材の検出も認められなかったことなどから、いわゆる焼失住居であったとは考えられない。

遺物は土師器、須恵器が出土している。出土量は少なく、提示した遺物は床面上から出土している。1～3は土師器の杯である。底部はやや曲面となるが平底に近く、1の体部はやや内彎しながら立ち上がっている。2・3の体部は直線的に外方に開きながら立ち上がる。4は底部を欠く土師器の甕である。胴部は長胴を呈しその上部に最大径をもち、口縁部は「く」の字状に外傾して開く。胴部外面は縦方向のヘラケズリで調整され、内面は横方向のヘラナデが施されている。口径は胴部最大径をやや上回る。5も土師器の甕である。胴部の上部に張りをもち、口縁部は外反して口唇部の端部を上方につまみ上げている。6は須恵器甕の胴部である。7は床面から出土した穂柄み具である。木台部の一部が残存し、鉄製の鎌を固定した釘の痕跡が認められる。刃部は中央部がやや窪みすり減った状態を呈している。

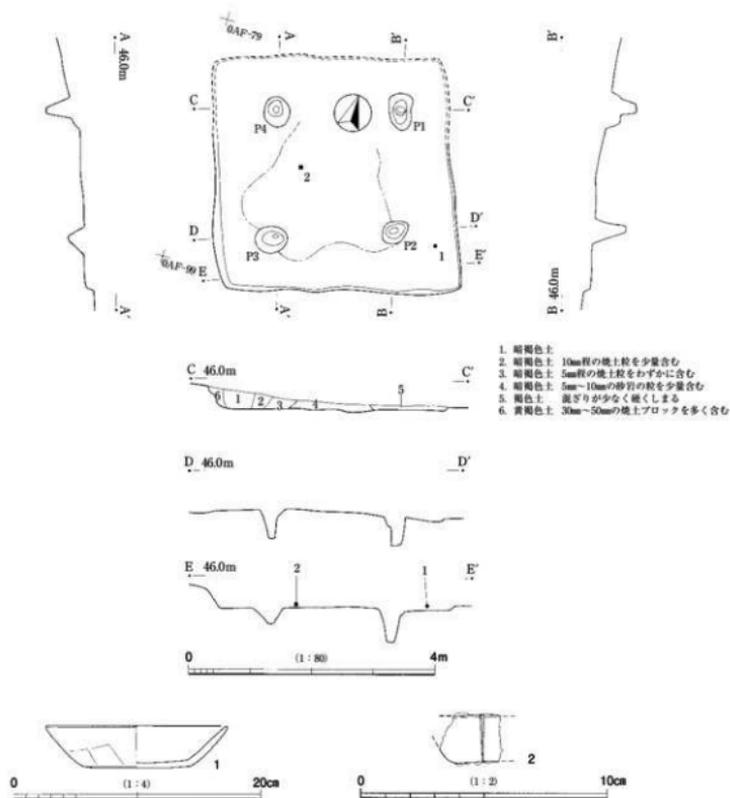
SI003 (第61図、図版17・22)

OAG-70・80付近に検出された方形を呈していたと推定される竪穴住居である。保存状態が不良のため、壁は竪穴住居の南半分を検出したにとどまり、おそらくカマドを造りつけていたであろう北側の壁は全く遺存していなかった。カマドを北壁に設置していたという前提で、主軸方向は北から西に15°傾いている。主軸方向の推定規模は3.9m、その直交方向に3.9mで、壁は南隅近辺で37cm前後残存する。壁の下に壁溝は認められない。柱穴はP1～P4の4か所が該当する。それぞれの床面からの深さは、P1が73cm、P2が54cm、P3が28cm、P4が62cmである。P4がほかの3か所の柱穴に比べ極端に浅く掘られている。4か所の柱穴はほぼ対角線上に配置されているとみられ、柱柱穴間はP1-P2・P3-P4・P2-P3・P4-P1とも200cmになり、各柱穴を結ぶと正方形になる。入り口に伴う梯子穴は存在しない。

床面は4か所の柱穴をつなぐ内側、特に南側では硬化面が確認できた。北側については、本来の床面が失われていた。

カマドは北側の壁に設けられていた可能性が高いが、痕跡は全く残されていなかった。

遺物は土師器、鉄製品が出土している。出土量は少なく、保存状態の優れた個体は存在せず、土器は1点を提示するにすぎない。1は土師器の杯である。全体の3分の1程度の遺存状態であるが、口径は14.7cm内外と推定され、器高は3.5cmになる。底部はやや曲面になるものの平底であり底径は8.6cmである。体部外面は手持ちヘラケズリが施されるが、器面が全体に摩滅しているため、調整の痕跡が不明瞭となって

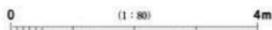
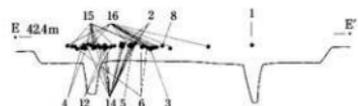
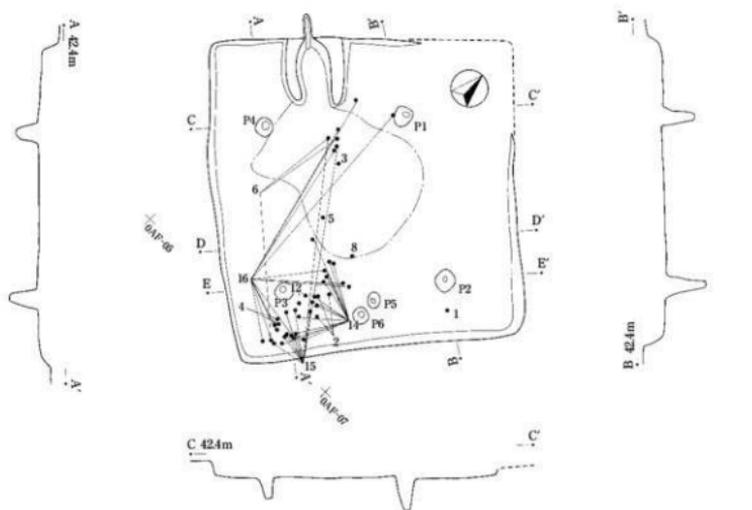


第61図 SI003

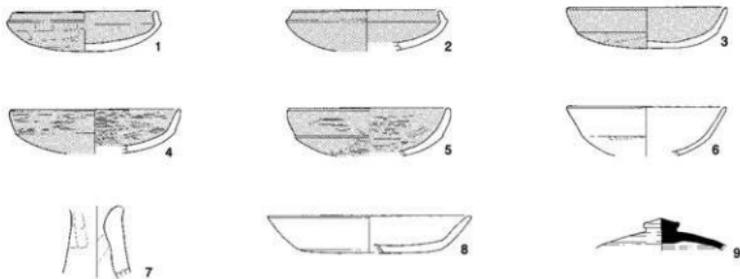
いる。胎土に砂粒が含まれ、焼成は比較的良好な状態である。床面から出土しており、本住居に伴う可能性が高い。2は鉄製品である。部分的で判然としないが、穂摘み鎌の一部と考えられる。

SI004 (第62・63図、図版17・21・22)

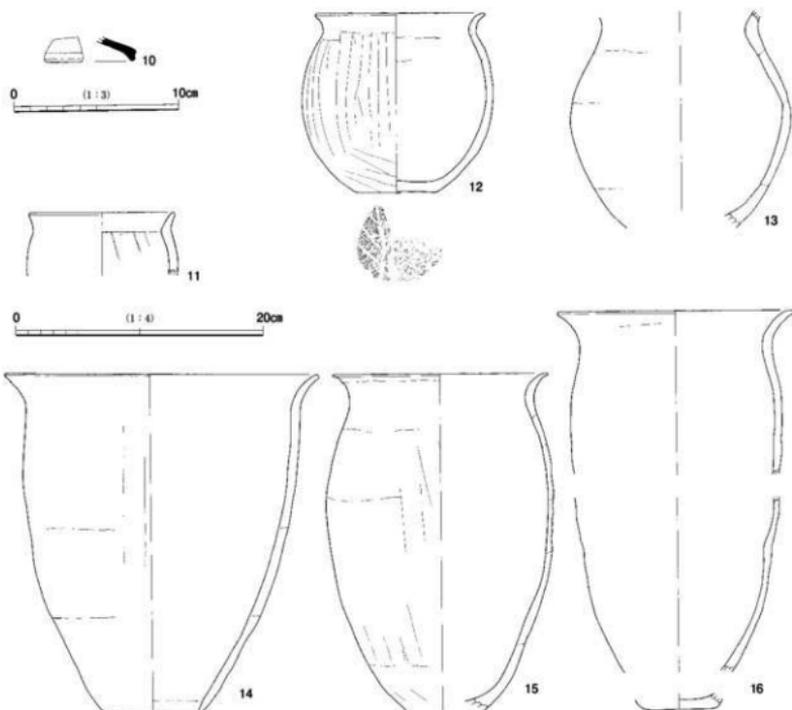
1 A F - 85・86付近に検出されたカマドを北側の壁に設けた方形の堅穴住居である。北の隅を検出することができなかったが、ほぼ全容を調査することができた。主軸方向は北から西に53°傾き、規模は主軸方向に5.0m、その直交方向に4.8mで、壁は9cm-34cm前後残存する。全体にやや傾斜しながら立ち上がる。壁の下に壁溝は存在しない。柱穴はP1-P4の4か所が該当する。それぞれの床面からの深さは、P1が53cm、P2が67cm、P3が49cm、P4が33cmである。柱穴P4がほかの3か所よりも浅く掘られている。各柱穴間はP1-P2・P3-P4が270cm、P2-P3が260cm、P4-P1が220cmになり、柱



1. 黒褐色土 黒色土の混じり、粘性のある土、細から炭化物を少量含む
2. 黒褐色土 1層より厚く、しまりがあり黒色土に近い
3. 黒褐色土 1層に限っているが炭化物を含まない
4. 黒褐色土 10mm-30mmの砂質を少量含む
5. 黒褐色土 しまりがあり1-4層より硬い



第62図 SI004 (1)



第63図 SI004 (2)

穴を結ぶと台形の配置になり、対角線上には配置されていない。P 5 は入り口の梯子穴になると考えられ、深さは24cmある。その南側に検出したP 6 も具体例を示せないが入り口の施設に関連する可能性が高い。このピットの深さは31cmである。

床面は柱穴をつなく内側からカマドの前面上にかけて硬化面の形成が確認でき、全体に平坦な状態が認められる。

カマドは北西壁の中央から向かってやや右側である南西寄りに設けられている。保存状態は不良で、袖部の基部近くが残存する程度の遺存状況である。煙道は壁を掘り込んで住居の外に延びている。

覆土は黒褐色土が主体になる。

遺物は土師器、須恵器の土器類が出土している。出土したレベルがいずれも床面から20cm浮いた位置に集中してしており、床面やカマド内からは全容がとらえられる土器は出土していない。また、南隅近辺に集中する。住居の廃絶後に一括廃棄されたような出土状況である。1～5は杯である。1・2は丸底で口縁部が内側に折れる須恵器の身模倣の土師器杯である。口縁部と体部との境界は明瞭な稜によって分かれ、内側も「く」の字状に内傾している。また、内外面とも黒色処理で仕上げている。4・5は丸底で体

部と口縁部との間に稜を巡らせ、口縁部は開きながら立ち上がる。内外面ともヘラミガキが行われ、黒色処理によって仕上げられている。6は丸底で体部と口縁部との境に明瞭な稜を作らずに、いくぶん外反気味に口縁部が立ち上がる杯である。器表面が摩滅しているため、調整が不鮮明である。7は高杯の脚柱部である。8は平底の杯である。口径16.4cmで底径は11.6cm前後になる。底面は若干丸みを残し、体部は直線的に外傾する。全体に器表面が荒れて調整の痕跡が不鮮明になっている。9は須恵器の蓋の天井部である。10は須恵器蓋の口縁部になる。端部は小さく下方に折れている。11～16は土師器の甕である。11は小型の部類になる甕の口縁部である。12は胴部に張りをもち口縁部が外反する甕で、底面に木葉痕が残る。13も胴部中位に張りをもつ甕である。14は単孔式の甕になる。胴部の張りは弱く、口縁部は外反して開く。外面に縦方向のヘラケズリが認められるが、摩滅していて鮮明ではない。15は胴部の上半部に最大径を作り、長胴となる甕である。16は接合しないが同一個体になると考えられる甕である。胴部の張りは全体に顕著ではなく、口径が最大径となる。

以上に提示した遺物は時期的に大きく2時期に分けることが可能である。1～7に提示した土師器の杯や高杯、11～14の甕は古墳時代後期の土器類になり、そのほかは奈良時代に比定可能である。床面から出土し器形が明らかな個体が皆無いため、当堅穴住居の年代の帰属を比定することは難しいが、覆土中から奈良時代の土器が出土しているので、住居の廃絶はそれと同じ時期かやや遅る時期と推測される。ただ、古墳時代後期の土器類が一括して出土した経緯や背景については不明である。

SK007 (第64図)

0AG-21・23・41・42付近に検出された不整形の土坑である。南北方向に長軸を取り長さは5.25mになる。その直交方向である東西の最大規模は3.80mになる。底面は地山の傾斜する北側が低く、水平にはならない。壁は曖昧な立ち上がりを示している。底面にピットは存在せず、踏み固められた状況も認められない。

覆土は小さく破砕された砂岩状の石を含む。遺物は出土していない。

自然に形成された窪みとの解釈も可能であるが、現場での認識にしたがい土坑、あるいは堅穴状の遺構としておくが、遺構としての性格については不明である。時期については明らかにならないが、周辺で検出された堅穴住居のいずれかと存在していた可能性もある。

SD001 (第65図)

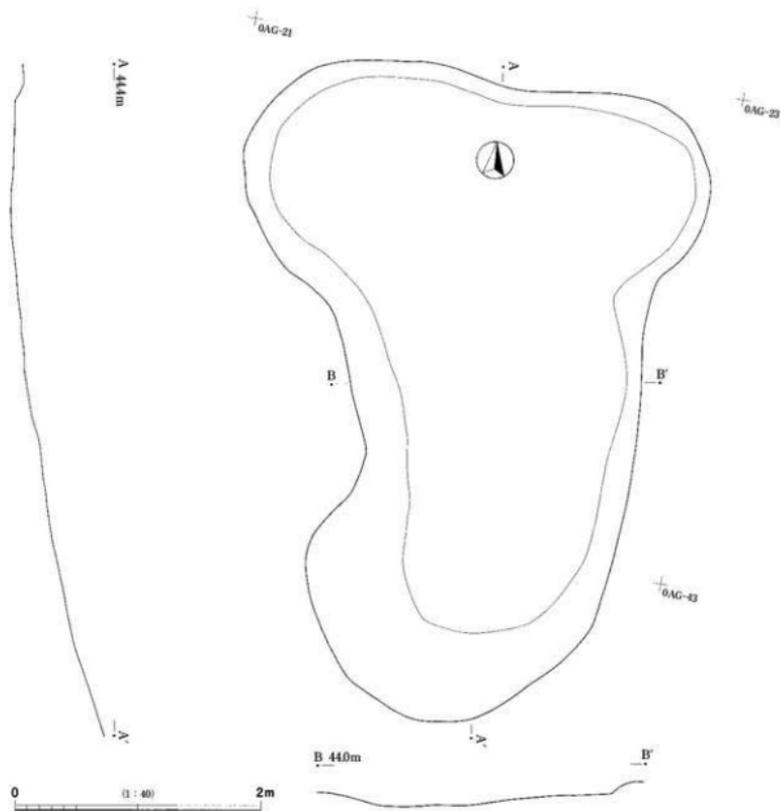
A区の0AF～0AGに検出された東西方向に延びる溝である。幅は0.5m～1.0mで東西に19mの長さを検出した。深さは最大で20cmで、断面形は浅いUの字形を呈する。底面に踏み固められた状況は認められない。

覆土はローム細粒を含む暗褐色土が主体になる。遺物は出土していない。

時期の決定は困難で、性格も明らかにならないが、堅穴住居であるSI003の東西方向とほぼ一致した向きで延びているので、堅穴住居と同時期に機能していたという推測もできるかもしれない。

遺構外出土の遺物 (第66図、図版22)

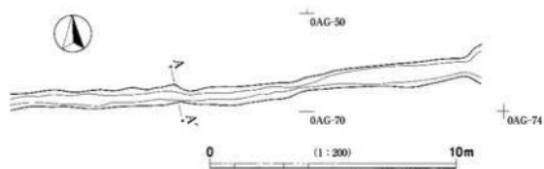
遺構検出に伴い出土した遺物を取り上げておきたい。1は土製羽口の破片である。高熱により表面が溶



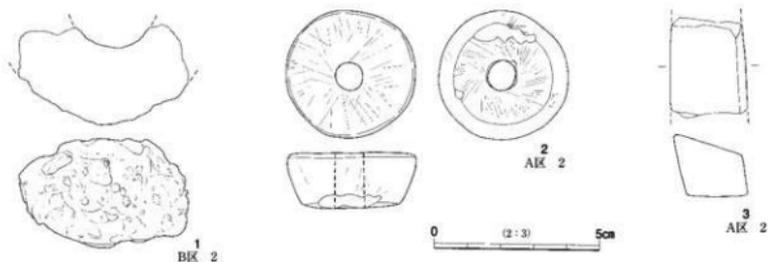
第64図 SK007



1. 堀周壁上 ローム状を少量含む
2. 堀周壁上 ローム状を多く含む



第65図 SD001



第66図 遺構に伴わない遺物

解している。製鉄関連の遺構の存在をうかがわせる遺物である。B区で出土している。2は石製紡錘車である。下面の一部に欠損が認められる。上面径39mm、下面径30mm、厚さ17mm、孔径8mm、重さ40.38gである。石材は滑石である。3は凝灰岩製の砥石の欠損品である。2・3はA区で出土しており、古墳時代以降の竪穴住居に帰属していた可能性がある。

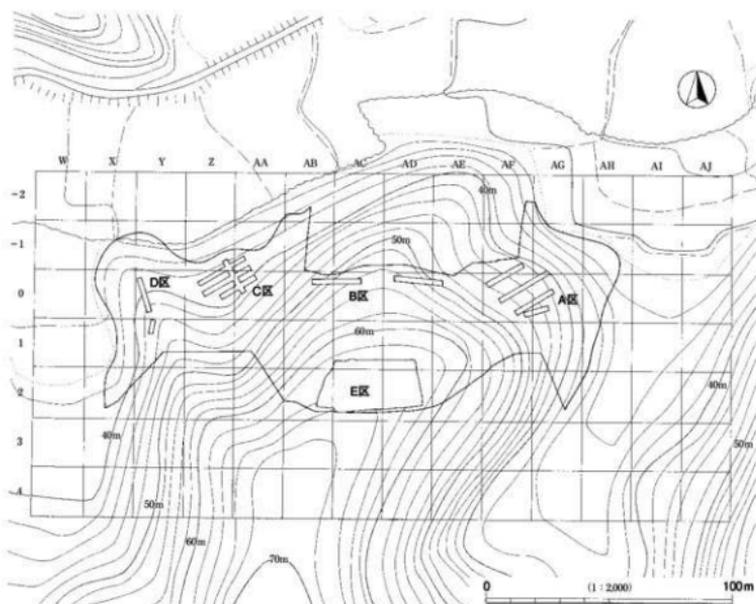
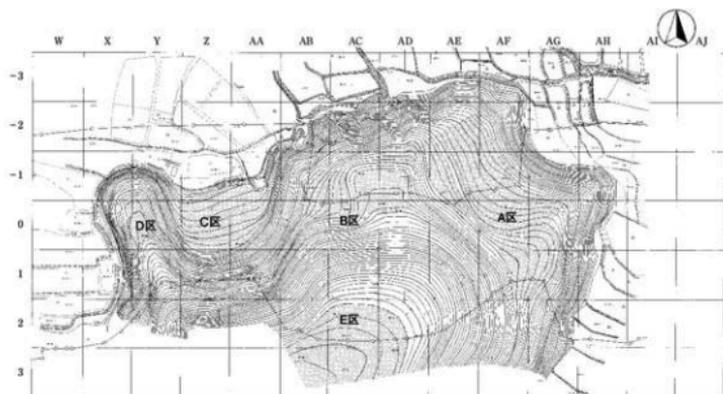
3 林城跡

林城跡については、調査前において確認されたのは平場のみである。土塁や堀といった城跡を特徴づける施設については、周辺の踏査を実施してもその痕跡を発見することができなかった。今回の道路建設予定地内と隣接地について地形測量を行ったが、測量図からも土塁や堀の存在をうかがわせる結果を見出すことはできない。平場については、現地での補尾を実施し、第67図上段、第68図の網を入れた地点をとることができた。その平場に対し、第67図下段のようにトレンチによる確認を行い、城跡に関連する遺構や遺物の検出を実施した。

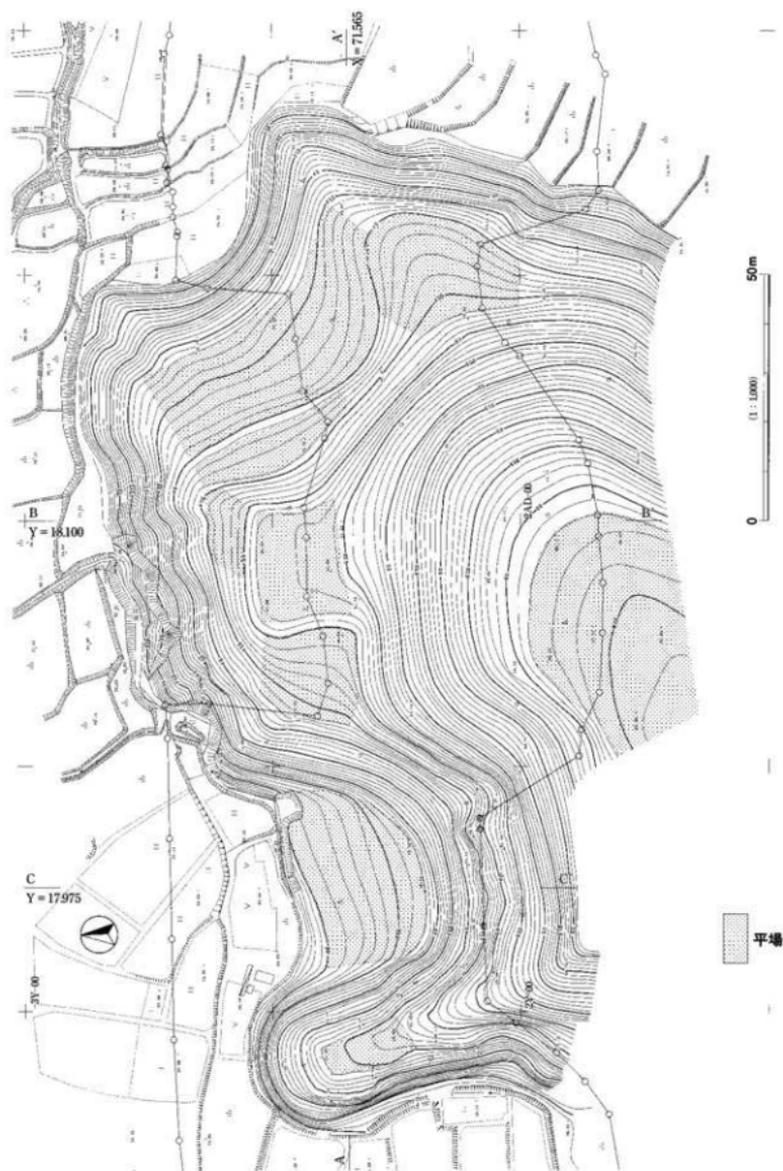
便宜的に平場について東側からA区・B区・C区・D区と仮称し、最も標高の高い2AC・2ADグリッド付近の平場をE区と呼んだ。A区～D区については平場の形態を考慮したトレンチを配置し、E区については全体の表土を除去することとした。

その結果、A区と呼称した平場で、すでに報告したような古墳時代から奈良時代にかけて営まれた竪穴住居が検出され、E区でも土坑が検出されたが、ほかの平場のいずれからも城跡に関連する遺構や遺物を検出することはできなかった。また、平場についても人為的に形成されたとする確証は得られなかった。

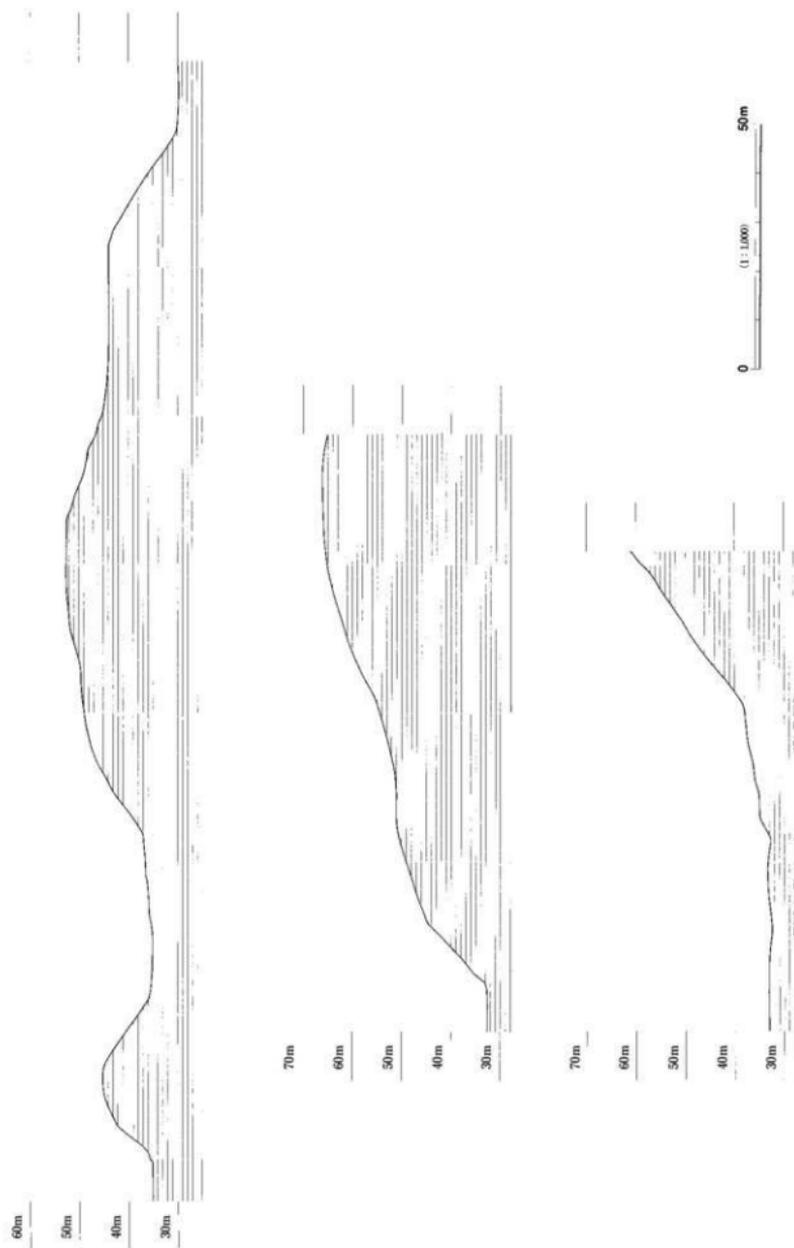
以上のように、路線内の限定された地域における部分的な調査であったため、今回は城跡の痕跡を具体的に示す資料を得ることはできなかった。今後周辺部について調査する機会があれば、城跡に関する遺構・遺物の成果があがることを期待したい。



第67図 林城跡の地形とトレンチ配置図



第68图 林城迹地形测量图



第69图 林城迹地形断面图

第3節 林遺跡（1）

林遺跡（1）は今回の林遺跡における調査地点で最も東側に位置している。調査対象範囲は標高60m～62mの平坦部になり、第70図上段のように、調査対象範囲に上層遺構の確認トレンチを設定し、遺構の有無を確認した。その結果、土坑が検出され、周辺を拡張して各遺構の調査を実施した（第71図）。

遺物は土師器の小破片が出土したほかは、土製品、石製品などについてはいずれの時代のものも検出されず、縄文時代と考えられる石器が2点出土したにとどまる。

下層については第70図下段のように2m×2mのグリッドを4か所に設定して行った。ローム層は薄く、また石器や礫は検出されなかった。

SK001（第72図）

3A O-15付近に検出された不整形の土坑である。東西方向に200cm、南北方向に190cmの規模で、検出面から底部までは40cmと浅い。底面は直径20cmで全体に傾斜して立ち上がる。覆土は黒褐色土を主体にしており軟らかい。

出土遺物はなく、時期についても明らかにならない。

SK002（第72図）

2A O-83・84付近に検出された不整形楕円形の土坑である。長軸長430cm、短軸長210cmの規模で、検出面から底部までは66cmである。底面の形態は楕円形でやや平坦さに欠ける。ピットは存在しない。検出面において直径30cmの範囲に焼土が確認され、覆土を掘り下げてみると、焼土は黒色土に混ざるように含まれており、底面に焼けた痕跡は認められなかった。

出土遺物が皆無で、構築時期や性格についても明らかにならない。

SK003（第72・73図）

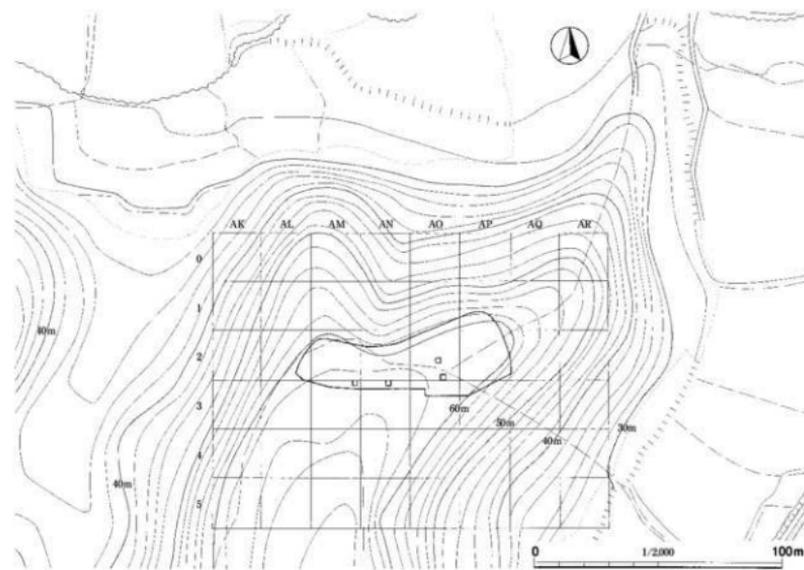
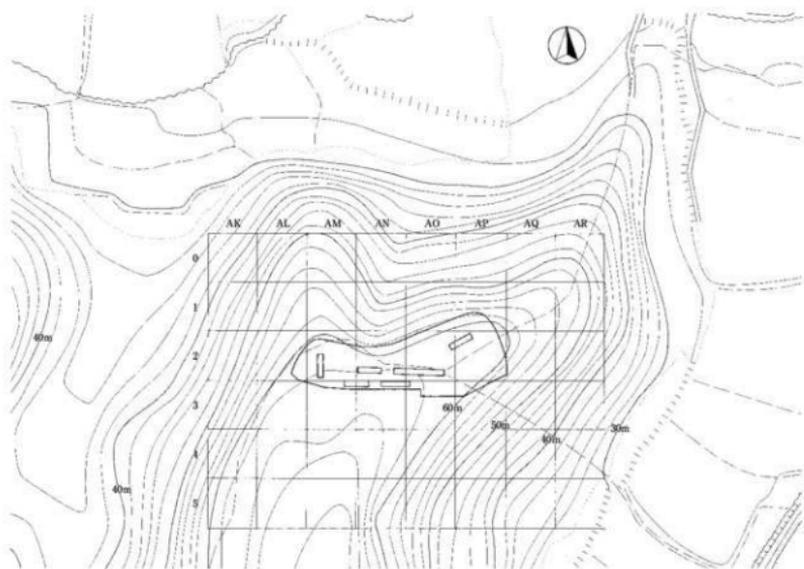
SK002の北東側である2A O-66・76付近に検出された不整形楕円形の土坑である。長軸長350cm、短軸長120cmの規模で、検出面から底部まで最も深い中央部分で50cmである。底面の中央部と北東部に窪みが存在する。窪みに焼土などの痕跡は認められない。

覆土はローム粒を含む黒褐色土や暗褐色土を主体にする。遺物は石器が2点出土している。土器の出土が皆無であるため、縄文時代の中での具体的な帰属時期は明らかにすることができない。

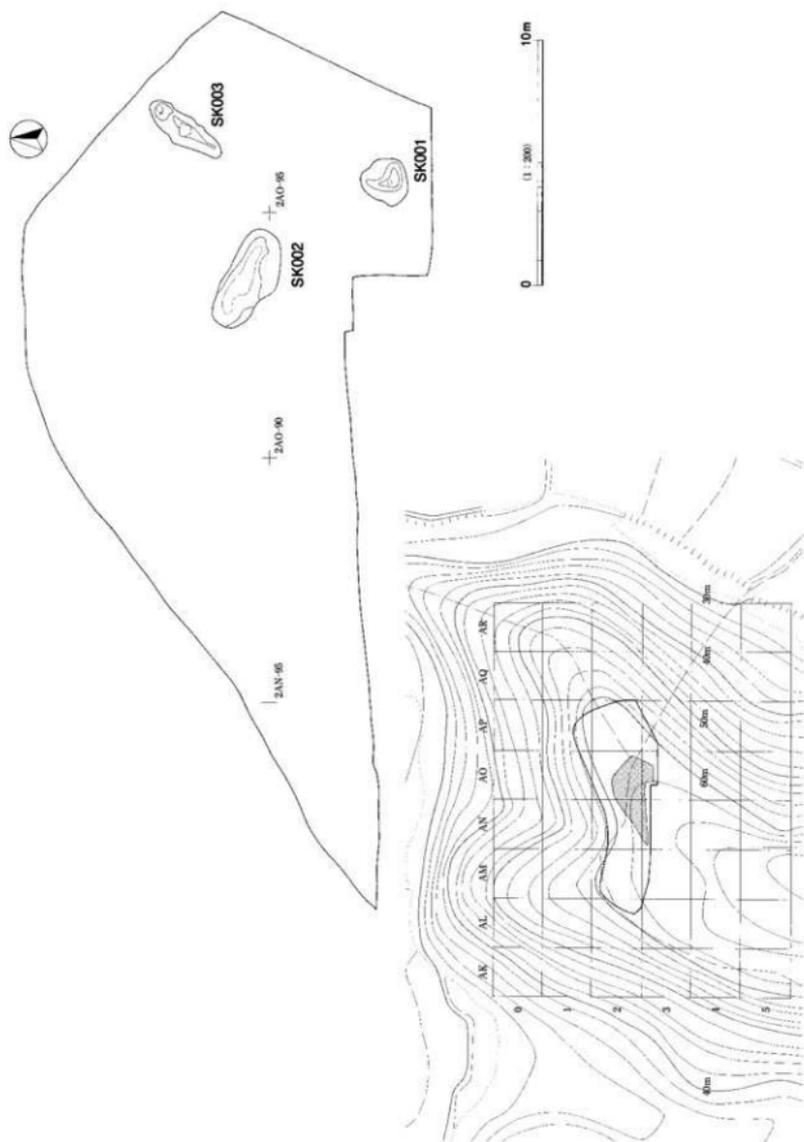
1・2は円礫加工具である。加工の痕跡は認められないので、これまでの分類基準にしたがい両者とも円礫加工具1になる。石材は1が安山岩で、2が砂岩である。

遺構外出土遺物

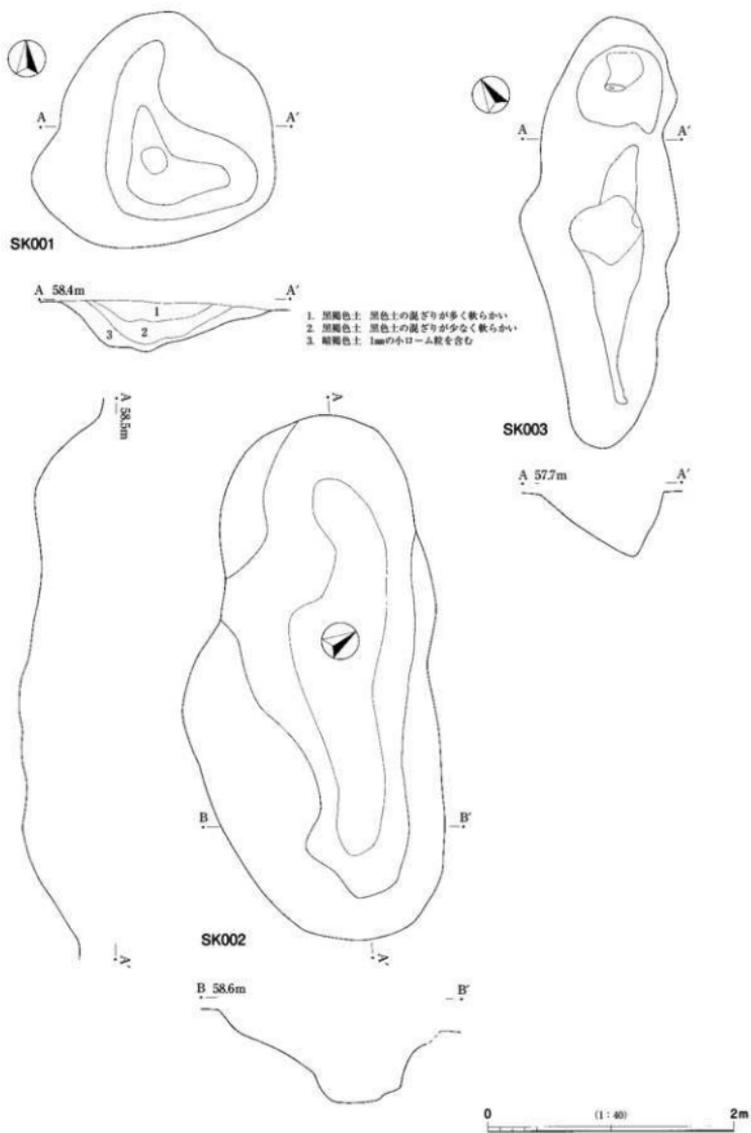
確認調査のトレンチ内や表土除去の際に、わずかに遺物が出土している。出土したのは、縄文時代に持ち込まれたと考えられる礫と土師器の小破片である。土師器の破片については図示することが不可能で、時期についても比定することができない。



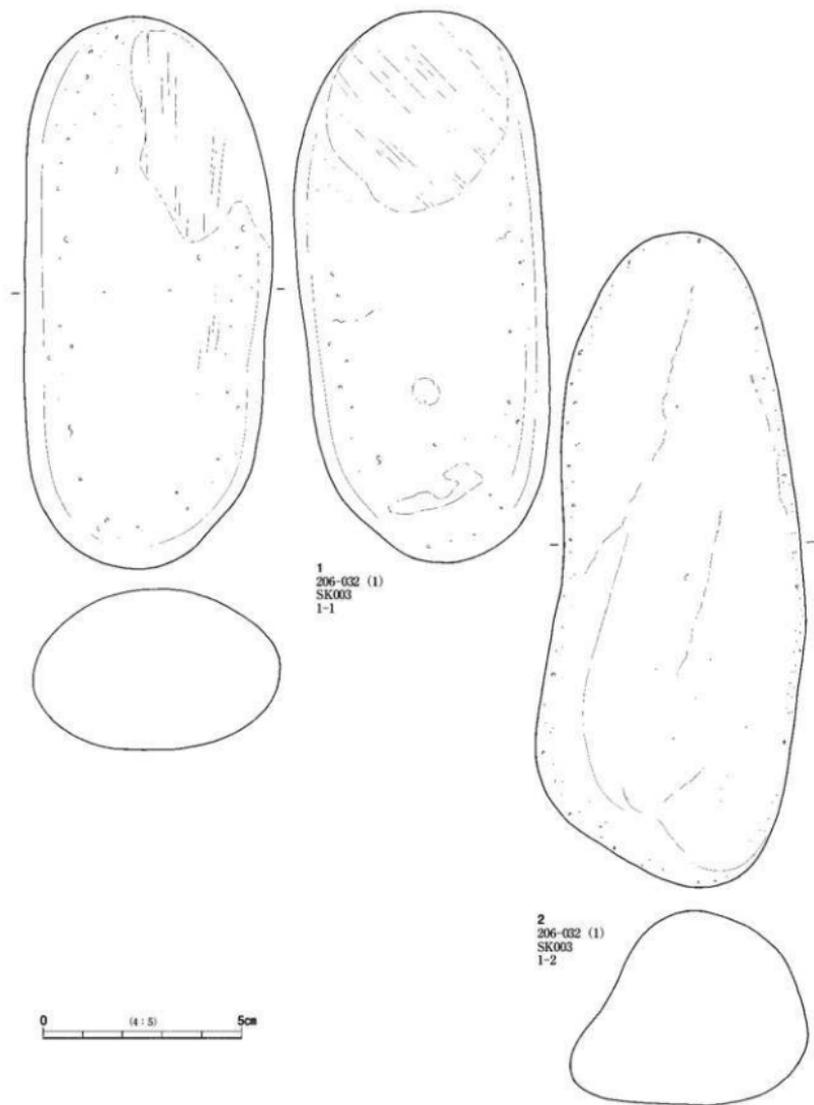
第70図 林道跡 (1) 確認トレンチ配置図



第71図 林遺跡 (1) 土坑分布図



第72図 SK001・002・003



第73图 SK003出土石器

第3章 まとめ

今回の林遺跡の調査は、遺跡全体からみれば遺跡北端部の部分的な調査であった。古墳時代以降の成果については、報告したとおりの成果であり、ここでは石器と礫について補足しまとめとした。

1 旧石器時代の石器集中地点

林遺跡から出土した5か所の集中地点について第2章に概要を報告した。いずれの集中地点も、廃棄された石器や礫片が堆積したものであり、背後の行動を指し示す手がかりがない。調査成果をまとめておく。

(1) 各集中地点を構成する石器群の石材は保田層産珪質頁岩と、万田野層産各種硬質岩類の2種に限定されている。万田野層産の礫は小型のものが多くあり、生産される剥片の相当量に原礫面の付着が観察される。

(2) 同様に、散礫を構成している礫のすべても万田野層産である。

(3) 剥片のうち、礫面をとどめない大小の剥片が道具として使われていた。また、尖頭部をもつ未加工の剥片が投射用尖頭器として使われていることを示す資料がえられた(集中2J-1)。従来、ナイフ形石器や両面加工尖頭器といった限定された器種が狩猟具と考えられてきたが、これ以外にも多種多様な投射具が使われていた可能性がある。

(4) 各集中は廃棄物の寄せ集めであり、いかなる意味でも特定の行動と対応するものではない。さまざまな行動によって生成された廃棄物が一挙に、あるいは緩慢に累積したものである。廃棄空間にすぎない集中を単位とする行動分析には何の意味もない。

(5) 礫片の多くは散礫を構成している。礫群と認定される遺構がないことは(4)で述べたとおりだが、廃棄礫といっても、縄文時代のように多量の円礫からなる散礫も形成されなかった。これは、後期旧石器時代と縄文時代の土地利用の大きなちがいであろう。縄文時代の散礫は、特定地点の頻繁な反復利用(たとえば毎年特定の季節)と経済行動としてのスキヤベンジングを背景とするが(縄文時代の礫の項参照)、後期旧石器時代の場合、土地利用は一過的であった。この理由は簡単ではないが、人口構造や資源構造-資源利用のちがいであるといっておこう。

(6) 剥片製Ⅵ層石器群を確認した。村田川以南ではこの時期の調査事例は多いとはいえないが、一般的剥片とともに少量の石刃が認められる。石刃の多くは袖ヶ浦市山谷遺跡3M-00ブロックのように石刃単体の持ちこみである。やや時期は下がるが、袖ヶ浦市下野洞遺跡では、筑摩山産黒曜石を素材とするナイフ形石器が集中的に生産されている。これ以降、古東京川西岸から断続的に黒曜石が搬入されるようになる。

(7) 尖頭器は加工の著明なものに限られてきたが、ほとんど未加工の尖頭剥片がこれに加わった。これを暫定的に端刃器とよび、後期旧石器時代を通底する普遍的器種と考えた。尖頭剥片はすでに移行期~後期旧石器時代初頭に確認されており、一貫して使われつづけていた。袖ヶ浦市関畑遺跡Ⅳa文化層は本ブロックと近接した時期の所産であるが、端刃器を多数含む非石刃石器群である。

2 縄文時代の石器・礫

林遺跡の縄文時代の石器と礫について報告するが、はじめに(財)君津郡市文化財センターによる隣接区域の調査によって出土した石器と礫について簡単に紹介しておく。特に、まとまった資料がえられていた第2次調査分についてふれておく(能城 1994)。

遺構としては礫群4か所と集石2か所が報告されている。報告書によれば、比較的集中度の低いものを礫群、狭い範囲に集中するものを集石とよんでいる。礫群や集石には含まれない礫も大量にある。礫と比較して石器数は著しく少なく、総数71点であった。礫器や石斧が比較的多く合計25点あり、石鎌や円礫素材の加工具は少量であった。石器や礫の帰属時期については明確ではないが、縄文石器には草創期後半～早期(大別基準は山内に従う)のものが多い。

a. 礫について

養老川以南の縄文時代草創期後半から早期にかけての遺跡からは礫が多く出土する。報告書を見ると、これらの礫については、礫群とされる場合、礫群と集石を区別する場合、格別の名称を付さない場合など、取り扱いがまちまちになっており、統一的な基準が必要だろう。猪尻遺跡(小高 2005)や踊ヶ作遺跡(宮 2006)の報告書では、多数の礫を礫群として一括処理している。いうまでもなく、礫群という用語は後期旧石器時代の厨房施設をいい、広域に散布する縄文時代の礫に対して定義された用語ではない。上記能城秀喜の見解のように、礫群と集石を区別する立場もあるが、本来集石とは縄文時代の厨房施設のことをいい、礫群と併置できるものではない。また、後期旧石器時代の礫群には集石のように著しく集中度の高いものも少なからずある。このように、いずれの立場も不都合なところがあり、賛成できない。

まず、礫群と集石を本来の定義どおりに使う必要がある。集中度についての議論はひとまずおくとし、後期旧石器時代の礫の集中を「礫群」とよぶ。そして、掘り込みの有無を問わず、縄文時代の礫の集積所を「集石」とよぶ。問題は、本遺跡をはじめとする多くの遺跡で認識される広域におよぶ低密度な礫の分布域をいかに定義するのかということになる。これについては、簡単に「散礫」というべきだろう。「散礫」という用語は、宮崎県内第1遺跡(原田 2005)や老瀬坂上第3遺跡(阿部・竹田 2005)などの報告書で導入された用語である。宮崎県の報告書を通読すると、その定義には齧齧もあるようだが、時代を問わず、集石や礫群以外の廃棄礫を総称できる便利な用語である。礫の記載にあたっては「散礫」、「礫群」、「集石」という枠組みでの理解が合理的ということになる。

林遺跡から出土した礫は総数2,520点、総重量は182kgであった。これは上層遺構確認用トレンチから出土した資料である。くわしい分類結果は表に示した。分類の方法については、前記猪尻遺跡等と示されたものと同じである。同じ基準で比較しないと不都合が生じるので、以後も同一基準を適用する必要がある。主要石材であるチャート、流紋岩質溶結凝灰岩(溶結凝灰岩と略記)、砂岩以外の諸種の礫(ホルンフェルス、泥岩、各種斑岩類、玉髄など)は一括処理している。これらの細かい分類は不要と判断した。いずれも少量であり、選択的な採集が行われた形跡は指摘されていない(木更津市中越遺跡は例外)。

これらの礫の供給源は、遺跡の所在する台地の基盤岩であり、極めて潤沢であるばかりか、どこでも容易に採集することができる。基盤に礫層をもたない、下総台地北部とは決定的に異なる石材環境といえる。自然礫層産出礫との比較が試みられている(小高前掲書、吉田 2001)。しかし、サンプリング方法

のちがいで、結果が大きく異なっており、遺跡出土礫と岩体構成礫との比較は非常に難しい。礫の大きさや種類は企画的に選択されるものであり、また多数の礫層ごとに構成礫のサイズや種別が同一であるという保証は全くない。吉田らは任意の場所をバケツですくいとったサンプルを分析しているが、このような前提条件を念頭において分析結果を評価したい。

今回報告する林遺跡の礫はすべて散礫を構成していた。遺跡内における礫の分布状況を見ると、明らかに分布の疎密がある（4D、2H、3Hなどに集中する傾向がある）。これについては廃棄行為における廃棄頻度による分布の偏り、あるいは、集石形成後の人為的かつ自然的な変換過程を想定することができる。散礫の形成過程は十分に究明されていない。木更津市金二矢台遺跡（小笠原 2000）では、草創期後半～早期の集石と散礫が出土した。これらの礫を分析した結果、礫の遺存状態と赤化の多寡とに必ずしも正の相関が存在しないことが明らかになった。この結果について、小笠原は、遺跡内に搬入された礫が使用され、廃棄され、再使用されるという過程において、礫の破碎と赤化が相対的に独自に進行した結果であると解釈した。小高も前掲報告書において、地点を異にする2か所の散礫の礫属性のちがいに着目し、搬入された礫が使用・再使用されるながら、異所的に順次破碎と赤化が進行することを指摘している。礫の分析にあたっては、このようなダイナミックな視点が望ましい。

本地域における草創期後半以降の集石は数十点から百数十点程度の礫から構成されている。草創期後半から早期を含む長期間に、繰り返し集石や集石類似施設が構築された。この間に、新しい礫が加わると同時に、地表に散乱する礫が使い回された。使い回しの過程で古い集石は解体され、不要石材は廃棄された。このような再利用のことをスキヤベンジング（本来は肉食獣の腐肉アサリのことだが、先史考古学では先行居住者の残した石器や礫の拾得・再利用も含めている）というが、散礫の主要メカニズムはスキヤベンジングであろう。本地域における多くの遺跡で散礫が観察される。これは、この地域における縄文時代草創期後半から早期におけるセトルメント・パターンが、非常に移動性の高い分散的なものであったことを物語っている（後期旧石器時代の項も併せて参照）。定着的な要素はどこにも認められない。

b. 石器について

林遺跡から出土した縄文時代の石器は50点であった。第3次調査に際しては71点の石器が出土しているので、やや少ないようにみえるが、礫と同様に、同じ前提での比較はできない。内容については表に示した。個々の資料については図と表を参照されたい。表で、加工具Ⅰとしたのは未加工の円礫を加撃やグラインド（など堅果類の加工）に使うものである。加工具Ⅱは円礫の一端を剥離し、加撃具、加工具として使うものをいう。石斧と類似した使われ方が指摘されるが、石器長軸と直交する調整加撃痕のある場合を石斧と分類している。

石器群の一般的な特徴として以下の点があげられる。

(1) 遺跡内には剥片剥離の痕跡がほとんど残されていない。剥片の多くは加工具Ⅱの製作にともなう撥ねものである。このことから、遺跡内では刃器を使うような作業も行われていなかったようにみえる。また、動物の解体作業の痕跡も乏しい。加工と解体に使われた刃器類は遺跡外に搬出されたり、遺跡外（特定作業スポット）に廃棄されたものと考えられる。刃器類は礫層直下あるいは河床で製作され、必要な剥片のみが選択的に抜き取られた可能性が高い。

(2) 石鏃をほとんど使用しない狩猟方法が想定される。残された資料からは民営を主体とする狩猟行動

を想定せざるをえない。タケや木、骨角を使った矢と槍が使われていた可能性も高いが、これらの製作のための剥片製加工具が残されていない。搬出されたのではなく、加工自体がおこなわれていない可能性が高い(剥片がない)。石器から狩猟活動を想定することは極めて難しいことがわかる。また、石器を使わないでも狩猟は可能であった。

(3) 加工具Ⅰは20点ある。一見たくさんあるようにもみえるが、遺跡の占地期間の長さを考えるといかにも少ない。使い捨てられた礫が大量にあったはずである。その一部が散礫を構成しているはずだが、判別・抽出は難しい。

(4) 加工具Ⅱや石斧も少ない。これらの一部は(2)に運用された加工具(特に罌の補修や一過的シェルターの構築)ともみられるが、加工行動は極めて低調であった。

c. まとめ

以上から、遺跡内で展開された活動を具体的に想定することはできないことは明確である。というよりも、石器群から具体的な活動を想像することは不可能である。これは、石器の大半が集団移動にともなって持ち出されたり、散礫に混入したりした結果である。数千点(あるいは数万点かもしれない)もの礫を搬入し、長期にわたる居住行動が繰り返行われた場所であっても、たかだか数十点の石器しか残されていない。しかも、これらの石器が、遺跡内における行動を指し示していないことも上述のとおりである。要するに、①石器を(土器も)残さない、運び出す、②礫は使いまわし(スキャベンジング)、不足分のみ足下の礫層から補充する、というのが、縄文時代草創期～早期における移動生活の実態であった。持ち運ばれることのなかった礫のみが長期間集積されていったのである。くり返すが、草創期～早期にかけての生活は、極めて移動頻度が高く、非定着的なものであった。このような移動生活は、その後も形をかえて長期にわたって継続されていた可能性が高い。本地域にあっては、定住的な集落が特異な現象であると考えられるばかりか、ほんとうにそこに定住していたのか、誰も答えていない。

引用・参考文献

- 阿部直人・竹田亨志 2005 「老瀬坂上第3遺跡-東九州自動車道(都農～西都門)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書23」宮崎県埋蔵文化財センター
- 小笠原永隆 2000 「東関東自動車道(千葉・富津線)埋蔵文化財調査報告書6-木更津市金二矢台遺跡・堀ノ内遺跡」(財)千葉県文化財センター
- 小高春男 2005 「首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書3-袖ヶ浦市猪尻遺跡」(財)千葉県教育振興財団
- 能城秀喜 1994 「林道跡Ⅱ-道路改良工事(市道145号線)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」(財)君津郡市文化財センター
- 原田茂樹 2005 「牧内第1遺跡-東九州自動車道(都農～西都門)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書11」宮崎県埋蔵文化財センター
- 宮 重行 2006 「東関東自動車道(木更津～富津線)埋蔵文化財調査報告書6-君津市鯛ヶ作遺跡-」(財)千葉県教育振興財団
- 吉田直哉・柴田 徹・山本(三澤)薫 2001 「小野山田遺跡群出土礫と万田野磨産出の岩種構成について」『小野山田遺跡群Ⅲ-先土器時代篇』(財)山武郡市文化財センター 90-94頁

第1表 旧石器時代石器属性表

| 採回番号 | グリッド | 遺物番号 | 器種 | 石材 | 最大長 (mm) | 最大幅 (mm) | 最大厚 (mm) | 重量 (g) | 標高 (m) | 備考 |
|-------------|-------|-------|--------|--------|----------|----------|----------|---------|--------|------------|
| | 3B-86 | 001-1 | 剥片 | 頁岩a | 20.6 | 27.7 | 5.8 | 3.13 | | |
| | 3B-86 | 001-2 | 石核 | 頁岩a | 31.7 | 38.3 | 25.3 | 17.16 | | |
| | 4C-10 | 001 | 剥片 | 頁岩a | 28.0 | 61.1 | 25.5 | 33.69 | | |
| 集中2D | | | | | | | | | | |
| 第14回24 | 2D-14 | 002 | 礫 | 溶結凝灰岩 | 123.0 | 55.9 | 35.4 | 395.02 | 69.280 | |
| 第9回14 | 2D-23 | 001 | 剥片 | 黑色安山岩 | 21.7 | 13.5 | 4.6 | 0.87 | 69.207 | |
| 第8回5 | 2D-32 | 001 | 剥片 | 玉髓 | 43.2 | 53.8 | 11.3 | 16.61 | 69.085 | 刃こぼれ |
| | 2D-33 | 005 | 剥片 | 黑色安山岩 | 27.1 | 22.8 | 9.2 | 2.20 | 69.155 | |
| | 2D-33 | 009 | 剥片 | 頁岩a | 41.2 | 50.4 | 10.0 | 22.49 | 69.125 | 礫面あり |
| | 2D-33 | 010 | 剥片 | 頁岩a | 31.3 | 39.6 | 10.1 | 9.30 | 69.157 | 礫面・刃こぼれあり |
| | 2D-33 | 011 | 剥片 | 黑色安山岩 | 16.0 | 11.2 | 2.0 | 0.27 | 69.183 | |
| | 2D-33 | 012 | 剥片 | テイスサイト | 43.0 | 38.5 | 7.3 | 6.27 | 69.165 | |
| | 2D-33 | 013 | 剥片 | 黑色安山岩 | 9.8 | 20.1 | 2.6 | 0.55 | 69.210 | |
| 第9回7 | 2D-33 | 014 | 剥片 | 玉髓 | 25.9 | 13.3 | 3.7 | 1.23 | 69.205 | 刃こぼれあり |
| | 2D-33 | 015 | 剥片 | 黑色安山岩 | 15.2 | 9.9 | 2.2 | 0.25 | 69.184 | |
| 第15回25 | 2D-33 | 017 | 礫 | 溶結凝灰岩 | 128.6 | 99.0 | 92.4 | 1509.60 | 69.095 | 加撃痕あり |
| 第16回28 | 2D-33 | 019 | 礫 | 砂岩 | 149.6 | 85.4 | 64.9 | 1223.72 | 69.085 | |
| 第9回11 | 2D-33 | 025 | 剥片 | 玉髓 | 17.9 | 13.8 | 4.5 | 0.69 | 69.125 | 刃こぼれあり |
| 第13回22 | 2D-33 | 032 | 礫 | 溶結凝灰岩 | 120.5 | 72.1 | 60.8 | 679.36 | 69.075 | 加撃痕あり |
| | 2D-33 | 036 | 剥片 | 頁岩a | 35.5 | 20.5 | 7.6 | 3.02 | 69.125 | 礫面あり |
| 第9回12 | 2D-33 | 040 | 剥片 | 玉髓 | 30.6 | 61.8 | 11.9 | 17.73 | 69.095 | |
| 第9回17 | 2D-33 | 043 | 剥片 | 頁岩a | 49.6 | 64.6 | 11.9 | 17.91 | 68.960 | 礫面あり |
| 第9回13 | 2D-33 | 048 | 剥片 | 頁岩a | 26.5 | 17.1 | 6.4 | 1.93 | 68.770 | 刃こぼれあり |
| 第12回21e | 2D-34 | 001 | 剥片 | 頁岩a | 87.9 | 75.3 | 41.4 | 261.36 | 69.052 | 礫面あり |
| | 2D-34 | 002 | 剥片 | 黑色安山岩 | 17.7 | 22.2 | 4.4 | 1.40 | 69.090 | |
| | 2D-34 | 004 | 剥片 | 玉髓 | 34.0 | 28.9 | 14.4 | 12.59 | 68.962 | |
| 第9回16 | 2D-34 | 005 | 剥片 | 黑色安山岩 | 29.5 | 13.8 | 4.2 | 1.30 | 68.945 | 礫面あり |
| | 2D-40 | 001 | 剥片 | 頁岩a | 31.5 | 31.5 | 1.5 | 8.14 | 69.050 | 礫面あり |
| 第9回18 | 2D-41 | 001 | 剥片 | 頁岩a | 61.9 | 24.6 | 38.8 | 30.28 | 69.031 | 礫面あり |
| 第12回21d | 2D-41 | 003 | 剥片 | 頁岩a | 57.2 | 36.6 | 19.4 | 41.59 | 69.047 | 礫面あり |
| 第12回21c | 2D-41 | 004 | 剥片 | 頁岩a | 71.9 | 41.8 | 28.1 | 83.73 | 69.006 | 礫面あり |
| 第9回19 | 2D-41 | 006 | 石核 | 黑色安山岩 | 41.1 | 76.3 | 52.2 | 210.62 | 69.060 | 礫面あり |
| | 2D-41 | 009 | 剥片 | テイスサイト | 43.6 | 38.5 | 11.1 | 15.38 | 69.045 | 礫面あり |
| 第14回23 | 2D-41 | 010 | 礫 | 砂岩 | 101.1 | 73.9 | 60.1 | 385.16 | 69.024 | |
| 第14回23 | 2D-41 | 011 | 礫 | 砂岩 | 83.9 | 65.9 | 54.5 | 345.61 | 69.027 | 加撃痕あり |
| | 2D-41 | 012 | 剥片 | テイスサイト | 35.0 | 27.5 | 6.8 | 4.42 | 69.000 | |
| | 2D-42 | 001 | 剥片 | テイスサイト | 44.5 | 25.1 | 9.5 | 8.25 | 69.045 | 礫面あり |
| 第16回27 | 2D-42 | 002 | 礫 | 砂岩 | 144.1 | 84.6 | 82.8 | 1271.95 | 69.002 | |
| 第12回21a | 2D-42 | 005 | 剥片 | 頁岩a | 32.2 | 33.5 | 13.8 | 15.30 | 69.100 | 礫面あり |
| | 2D-42 | 009 | 剥片 | 頁岩a | 27.4 | 29.7 | 9.8 | 4.33 | 69.170 | 礫面あり |
| 第8回3 | 2D-42 | 011 | 剥片 | 玉髓 | 35.8 | 35.3 | 7.7 | 6.24 | 69.197 | 刃こぼれあり |
| 第10回20b | 2D-42 | 012 | 石核 | テイスサイト | 56.9 | 53.0 | 30.8 | 94.24 | 69.130 | 礫面あり |
| 第8回4 | 2D-42 | 015 | 剥片 | 玉髓 | 46.9 | 41.3 | 11.4 | 13.60 | 69.047 | 刃こぼれあり |
| | 2D-42 | 016 | 剥片 | テイスサイト | 33.4 | 28.6 | 6.2 | 4.50 | 68.905 | |
| 第8回2b | 2D-43 | 004-1 | 彫器 | 溶結凝灰岩 | 58.2 | 30.3 | 10.5 | 11.23 | 69.113 | 2D-53-1と接合 |
| 第8回6 | 2D-43 | 005 | 剥片 | 玉髓 | 24.0 | 18.5 | 5.6 | 1.29 | 69.108 | 刃こぼれあり |
| | 2D-43 | 007 | 剥片 | 玉髓 | 38.9 | 37.2 | 13.1 | 7.97 | 69.068 | |
| 第15回26 | 2D-43 | 010 | 礫 | 溶結凝灰岩 | 121.9 | 74.8 | 62.7 | 792.68 | 69.079 | |
| | 2D-43 | 011 | 剥片 | 玉髓 | 17.6 | 14.1 | 3.2 | 0.70 | 69.127 | |
| | 2D-43 | 014 | 剥片 | 玉髓 | 13.2 | 24.2 | 4.6 | 1.24 | 69.080 | |
| 第8回1 | 2D-43 | 015 | ナイフ形石器 | 玉髓 | 11.9 | 11.8 | 3.6 | 0.30 | 69.105 | 刃こぼれあり |
| 第9回10 | 2D-43 | 016 | 剥片 | 玉髓 | 19.6 | 12.9 | 3.7 | 0.57 | 69.015 | 刃こぼれあり |

| 採回番号 | グリッド | 遺物番号 | 器種 | 石材 | 最大長 (mm) | 最大幅 (mm) | 最大厚 (mm) | 重量 (g) | 標高 (m) | 備考 |
|--------------|-------|-------|----------|-------|----------|----------|----------|--------|--------|--------------|
| 第9回9 | 2D-43 | 019 | 剥片 | 玉髓 | 11.8 | 7.0 | 3.5 | 0.22 | 69.030 | 刃こぼれあり |
| 第9回8 | 2D-43 | 020 | 剥片 | 玉髓 | 25.4 | 20.3 | 4.5 | 1.80 | 69.000 | 刃こぼれあり |
| | 2D-43 | 021 | 剥片 | 玉髓 | 7.5 | 13.4 | 2.3 | 0.10 | 69.005 | |
| 第9回15 | 2D-44 | 003 | 剥片 | 黒色安山岩 | 20.9 | 21.8 | 2.9 | 0.94 | 69.207 | |
| | 2D-44 | 004 | 剥片 | 玉髓 | 30.2 | 25.3 | 4.8 | 3.23 | 69.220 | |
| 第11回21b | 2D-44 | 007 | 剥片 | 頁岩a | 111.8 | 75.4 | 46.9 | 356.95 | 69.077 | 礫面あり |
| | 2D-51 | 001 | 剥片 | 黒色安山岩 | 21.7 | 32.4 | 7.6 | 4.67 | 68.787 | 礫面あり |
| 第10回20a | 2D-52 | 001 | 剥片 | アイサイト | 60.8 | 36.7 | 19.1 | 38.34 | 68.998 | 礫面あり |
| | 2D-52 | 002 | 剥片 | アイサイト | 21.0 | 36.6 | 13.8 | 8.95 | 69.014 | |
| 第8回2a | 2D-53 | 001 | 剥片 | 溶結凝灰岩 | 34.8 | 18.6 | 7.7 | 3.02 | 68.998 | 2D-43-4-1と統合 |
| | 3D-28 | 001 | 剥片 | 黒色安山岩 | 26.5 | 11.1 | 6.9 | 1.22 | | |
| | 3D-88 | 001 | 剥片 | 頁岩a | 45.7 | 37.0 | 32.3 | 63.08 | | |
| | 4D-18 | 001-1 | 剥片 | 頁岩a | 43.4 | 27.9 | 15.7 | 18.57 | | |
| | 4D-18 | 001-2 | 剥片 | 頁岩a | 28.5 | 18.5 | 4.2 | 1.53 | | |
| 集中2 E | | | | | | | | | | |
| 第18回3b | 2E-92 | 001 | 石核 | 頁岩b | 61.6 | 61.4 | 41.7 | 170.24 | | 礫面あり |
| 第18回3a | 2E-92 | 002 | 剥片 | 頁岩b | 47.8 | 40.1 | 14.1 | 22.29 | 69.163 | 礫面あり |
| | 2E-92 | 003 | 剥片 | 頁岩a | 8.9 | 16.7 | 4.3 | 0.55 | 69.035 | 礫面あり |
| 第18回2 | 2E-93 | 001-1 | 剥片 | アイサイト | 52.9 | 49.2 | 14.3 | 27.41 | | 礫面あり |
| 第18回1 | 2E-93 | 001-2 | 剥片 | アイサイト | 81.5 | 49.0 | 16.9 | 57.48 | | 礫面あり |
| | 2E-93 | 001-3 | 剥片 | 頁岩a | 55.7 | 32.2 | 22.7 | 42.83 | | |
| 集中3 E | | | | | | | | | | |
| | 3E-48 | 101 | 剥片 | 頁岩a | 21.6 | 10.3 | 4.3 | 0.65 | | |
| 集中2 I | | | | | | | | | | |
| | 2I-31 | 101-1 | 礫 | 砂岩 | 55.2 | 34.0 | 15.3 | 27.78 | | |
| | 2I-31 | 101-2 | 礫 | チャート | 42.2 | 34.9 | 26.3 | 42.09 | | |
| 集中3 I | | | | | | | | | | |
| | 3I-27 | 101 | 礫 | 砂岩 | 23.9 | 17.5 | 11.7 | 5.17 | | |
| 集中2 J | | | | | | | | | | |
| | 2J-26 | 101 | 剥片 | 頁岩a | 20.7 | 25.3 | 6.3 | 2.95 | 67.988 | 礫面あり |
| | 2J-27 | 101 | 剥片 | 頁岩b | 24.1 | 11.0 | 4.2 | 0.66 | | |
| 第21回1 | 2J-27 | 102 | 剥片 | 頁岩a | 37.4 | 18.3 | 11.2 | 4.64 | 67.960 | |
| 第22回9d | 2J-36 | 101 | 剥片 | 溶結凝灰岩 | 36.4 | 14.8 | 10.3 | 4.95 | 68.088 | 礫面あり |
| 第21回2 | 2J-37 | 101 | 二次加工ある剥片 | 頁岩a | 29.7 | 18.9 | 7.8 | 4.59 | 68.141 | 礫面あり |
| 第22回9e | 2J-46 | 101 | 石核 | 溶結凝灰岩 | 52.9 | 52.1 | 47.8 | 124.62 | 68.411 | 礫面あり |
| | 2J-46 | 102 | 剥片 | 頁岩a | 48.6 | 56.0 | 13.9 | 28.99 | 68.265 | 礫面・刃こぼれあり |
| 第21回5 | 2J-46 | 103 | 剥片 | 頁岩a | 12.9 | 19.9 | 5.0 | 0.95 | 68.120 | 刃こぼれあり |
| 第21回3 | 2J-54 | 101 | 彫器 | 頁岩a | 29.9 | 23.2 | 11.5 | 4.24 | 68.548 | 礫面あり |
| 第21回8a | 2J-55 | 101 | 剥片 | 溶結凝灰岩 | 30.2 | 25.0 | 12.5 | 4.69 | 68.398 | 礫面あり |
| 第22回9b | 2J-56 | 101 | 剥片 | 溶結凝灰岩 | 23.4 | 14.7 | 8.1 | 2.36 | 68.536 | 礫面あり |
| 第22回9c | 2J-56 | 102 | 剥片 | 溶結凝灰岩 | 36.9 | 23.5 | 12.3 | 6.12 | 68.424 | 礫面あり |
| | 2J-56 | 103 | 剥片 | 頁岩b | 40.4 | 29.7 | 14.2 | 13.63 | 68.409 | 礫面あり |
| 第22回9a | 2J-56 | 104 | 剥片 | 溶結凝灰岩 | 27.8 | 35.0 | 8.9 | 6.33 | 68.360 | 礫面あり |
| | 2J-56 | 105 | 剥片 | 黒曜石 | 11.3 | 21.6 | 45.6 | 0.63 | 68.422 | |
| 第21回8b | 2J-57 | 101 | 剥片 | 溶結凝灰岩 | 39.4 | 35.4 | 12.3 | 12.93 | 68.146 | 礫面あり |
| 第21回6 | 2J-65 | 101 | 石核 | 頁岩a | 24.9 | 48.3 | 31.7 | 28.06 | 68.454 | 礫面あり |
| 第21回7 | 2J-65 | 102 | 石核 | 頁岩a | 38.6 | 38.8 | 25.4 | 39.77 | 68.391 | ジョイント面あり |
| 第21回4 | 2J-66 | 101 | 剥片 | 頁岩a | 27.1 | 17.4 | 5.6 | 1.63 | 68.610 | 刃こぼれあり |
| | 2J-66 | 102 | 剥片 | チャート | 36.2 | 45.5 | 13.3 | 17.77 | 68.345 | 礫面あり |
| | SD002 | 002 | 石核 | 黒色安山岩 | 21.9 | 42.1 | 21.1 | 21.56 | | |
| | SH027 | 001 | 剥片 | 頁岩a | 38.1 | 22.7 | 15.1 | 8.58 | | |

第2表 旧石器時代石器組成表

集中2D

| ナイフ形石器 | | 二次加工ある調片 | 彫器 | 調片 | 石核 | 点数計 | 重量計 (g) | 標点数 | 標重量 (g) |
|--------|---|----------|----|-------|--------|----------|---------|--------|----------|
| 頁岩a | | | | 13 | 856.53 | | 13 | 856.53 | |
| チャート | | | | | | | | 52 | 884.72 |
| 砂岩 | | | | | | | | 7 | 3,523.37 |
| 黒色安山岩 | | | 9 | 12.45 | 1 | 210.62 | 10 | 223.07 | |
| アイサイト | | | 7 | 86.11 | 1 | 94.24 | 8 | 180.35 | |
| 安山岩 | | | 1 | 0.30 | | | 1 | 0.30 | |
| 油結層頁岩 | | | 1 | 11.23 | 1 | 3.02 | 2 | 14.25 | 4,693.42 |
| 玉髄 | 1 | 0.30 | | 16 | 85.81 | | 17 | 86.11 | 1 |
| 合計 | 1 | 0.30 | 1 | 11.23 | 47 | 1,044.02 | 2 | 304.86 | 51 |

頁岩a 保田層群産地質頁岩

集中2E

| ナイフ形石器 | | 二次加工ある調片 | 彫器 | 調片 | 石核 | 点数計 | 重量計 (g) | 標点数 | 標重量 (g) |
|--------|--|----------|----|--------|----|--------|---------|--------|---------|
| 頁岩a | | | 2 | 43.38 | | 2 | 43.38 | | |
| 頁岩b | | | 1 | 22.29 | 1 | 170.24 | 2 | 192.53 | |
| 砂岩 | | | | | | | | 1 | 100.89 |
| アイサイト | | | 2 | 84.89 | | 2 | 84.89 | | |
| 合計 | | | 5 | 150.56 | 1 | 170.24 | 6 | 320.80 | 1 |

頁岩a 保田層群産地質頁岩

頁岩b 万田野層産各種地質頁岩

集中3E

| ナイフ形石器 | | 二次加工ある調片 | 彫器 | 調片 | 石核 | 点数計 | 重量計 (g) | 標点数 | 標重量 (g) |
|--------|--|----------|----|------|----|-----|---------|-----|---------|
| 頁岩a | | | 1 | 0.65 | | 1 | 0.65 | | |
| 合計 | | | 1 | 0.65 | | 1 | 0.65 | | |

頁岩a 保田層群産地質頁岩

集中2I

| ナイフ形石器 | | 二次加工ある調片 | 彫器 | 調片 | 石核 | 点数計 | 重量計 (g) | 標点数 | 標重量 (g) |
|--------|--|----------|----|----|----|-----|---------|-----|---------|
| チャート | | | | | | | | 1 | 42.99 |
| 砂岩 | | | | | | | | 1 | 27.78 |
| 合計 | | | | | | | | 2 | 69.87 |

集中3I

| ナイフ形石器 | | 二次加工ある調片 | 彫器 | 調片 | 石核 | 点数計 | 重量計 (g) | 標点数 | 標重量 (g) |
|--------|--|----------|----|----|----|-----|---------|-----|---------|
| 砂岩 | | | | | | | | 1 | 5.17 |
| 合計 | | | | | | | | 1 | 5.17 |

集中2J

| ナイフ形石器 | | 二次加工ある調片 | 彫器 | 調片 | 石核 | 点数計 | 重量計 (g) | 標点数 | 標重量 (g) |
|---------|---|----------|----|------|-------|--------|---------|--------|---------|
| 頁岩a | 1 | 4.59 | 1 | 4.24 | 5 | 29.16 | 2 | 67.83 | |
| 頁岩b | | | | 2 | 14.29 | | 2 | 14.29 | |
| チャート | | | | 1 | 17.77 | | 1 | 17.77 | 1 |
| ホルンフェルス | | | | | | | | 1 | 303.60 |
| 黒曜石 | | | | 1 | 0.63 | | 1 | 0.63 | |
| 油結層頁岩 | | | | 6 | 37.38 | 1 | 124.62 | 7 | 162.00 |
| 合計 | 1 | 4.59 | 1 | 4.24 | 15 | 109.23 | 3 | 192.45 | 20 |

頁岩a 保田層群産地質頁岩

頁岩b 万田野層産各種地質頁岩

| ナイフ形石器 | | 二次加工ある調片 | 彫器 | 調片 | 石核 | 点数計 | 重量計 (g) | 標点数 | 標重量 (g) |
|--------|--|----------|----|--------|----|-------|---------|--------|---------|
| 頁岩a | | | 6 | 128.58 | 1 | 17.16 | 7 | 145.74 | |
| 黒色安山岩 | | | 1 | 1.22 | 1 | 21.56 | 2 | 22.78 | |
| 合計 | | | 7 | 129.80 | 2 | 38.72 | 9 | 168.52 | |

頁岩a 保田層群産地質頁岩

第3表 縄文時代石器属性表

| | | | | | | | | 林道跡・林道跡(3) | |
|--------|-------|-------|---------|---------|----------|----------|----------|------------|----|
| 採回番号 | グリッド | 遺物番号 | 器種 | 石材 | 最大長 (mm) | 最大幅 (mm) | 最大厚 (mm) | 重量 (g) | 備考 |
| 第36回20 | 2B-92 | 002-1 | 円礫製加工具Ⅱ | 溶結凝灰岩 | 93.90 | 86.20 | 64.60 | 628.29 | |
| 第32回5 | 2B-92 | 002-2 | 石核 | チャート | 64.80 | 55.40 | 52.30 | 203.36 | |
| 第38回24 | 3B-38 | 001 | 円礫製加工具Ⅰ | 砂岩 | 124.90 | 50.80 | 18.10 | 171.37 | |
| 第39回28 | 1C-92 | 001 | 円礫製加工具Ⅰ | 砂岩 | 80.10 | 76.40 | 47.90 | 339.62 | |
| 第40回30 | 2C-36 | 001 | 円礫製加工具Ⅰ | ホルンフェルス | 167.60 | 119.30 | 47.10 | 1369.54 | |
| 第34回14 | 4C-03 | 001 | 打製石斧 | 細粒凝灰岩 | 108.80 | 53.30 | 32.10 | 200.04 | |
| | 5C-67 | 002 | 剥片 | 黒曜石 | 11.70 | 15.90 | 2.80 | 0.37 | |
| 第39回29 | 5C-大ダ | 002-1 | 円礫製加工具Ⅰ | チャート | 89.90 | 69.20 | 51.30 | 438.44 | |
| | 6C-大ダ | 002-2 | 剥片 | 砂岩 | 25.40 | 28.50 | 5.80 | 3.68 | |
| 第32回1 | 3D-77 | 001 | 石鏃 | チャート | 19.20 | 14.80 | 4.30 | 0.88 | |
| 第34回15 | 3D-78 | 001 | 打製石斧 | ホルンフェルス | 109.60 | 68.60 | 31.10 | 233.13 | |
| 第33回9 | 4D-38 | 001-1 | 剥片 | 砂岩 | 46.10 | 61.30 | 12.50 | 27.56 | |
| 第33回12 | 4D-38 | 001-2 | 剥片 | 砂岩 | 43.10 | 34.90 | 12.60 | 17.28 | |
| 第32回3 | 4D-58 | 001 | 石核 | 玉髄 | 88.80 | 66.90 | 31.30 | 193.90 | |
| 第37回22 | 4D-68 | 001 | 円礫製加工具Ⅰ | 溶結凝灰岩 | 112.70 | 86.10 | 67.60 | 759.95 | |
| 第37回23 | 4D-79 | 001 | 円礫製加工具Ⅰ | 溶結凝灰岩 | 48.10 | 45.90 | 20.90 | 62.56 | |
| 第32回6 | 4D-89 | 001 | 両極石核 | チャート | 64.70 | 41.40 | 21.60 | 82.37 | |
| 第33回7 | 2E-93 | 001 | 加工痕ある石核 | 無珪晶流紋岩 | 56.80 | 70.30 | 20.60 | 75.81 | |
| 第32回2 | 3F-33 | 002 | 石鏃 | 黒曜石 | 17.10 | 16.20 | 4.61 | 0.84 | |
| 第38回27 | 3F-36 | 001 | 円礫製加工具Ⅰ | 砂岩 | 48.40 | 53.30 | 19.30 | 77.57 | |
| 第33回11 | 3G-28 | 001 | 剥片 | 砂岩 | 37.80 | 54.80 | 11.90 | 25.44 | |
| 第35回18 | 3G-72 | 001 | 円礫製加工具Ⅱ | 砂岩 | 64.80 | 58.20 | 24.50 | 121.27 | |
| 第35回17 | 3G-95 | 002 | 円礫製加工具Ⅱ | 砂岩 | 59.90 | 34.90 | 11.30 | 33.24 | |
| 第35回19 | 3G-96 | 002 | 円礫製加工具Ⅱ | 砂岩 | 71.60 | 39.60 | 18.50 | 64.72 | |
| 第41回31 | 4G-90 | 001 | 円礫製加工具Ⅰ | 砂岩 | 82.90 | 61.60 | 19.10 | 139.07 | |
| 第35回16 | 2H-99 | 001 | 局部磨製石斧 | 砂岩 | 40.40 | 36.70 | 14.10 | 19.46 | |
| 第41回32 | 3H-88 | 001 | 円礫製加工具Ⅰ | 溶結凝灰岩 | 81.80 | 74.90 | 44.80 | 319.07 | |
| | 4H-57 | 001 | 剥片 | チャート | 13.90 | 13.10 | 4.80 | 0.56 | |
| 第34回13 | 4H-60 | 002 | 剥片 | 砂質頁岩 | 40.30 | 43.20 | 9.60 | 14.72 | |
| 第33回8 | 2I-28 | 001 | 原石 | 頁岩b | 90.70 | 64.10 | 54.60 | 377.98 | |
| 第36回21 | 2I-30 | 001 | 円礫製加工具Ⅱ | 溶結凝灰岩 | 83.60 | 52.50 | 27.50 | 158.66 | |
| 第38回26 | 2I-82 | 001 | 円礫製加工具Ⅰ | 溶結凝灰岩 | 84.80 | 60.70 | 37.00 | 244.05 | |
| 第33回10 | 3I-16 | 001 | 剥片 | ホルンフェルス | 16.80 | 25.60 | 6.40 | 2.43 | |
| 第32回4 | 3J-10 | 001-1 | 石核 | 砂岩 | 77.30 | 54.60 | 19.30 | 77.68 | |
| 第38回25 | 3J-10 | 001-2 | 円礫製加工具Ⅰ | 砂岩 | 82.20 | 42.80 | 22.30 | 101.89 | |

| | | | | | | | | 林道跡(2) | |
|--------|--------|-------|---------|---------|----------|----------|----------|--------|----|
| 採回番号 | グリッド | 遺物番号 | 器種 | 石材 | 最大長 (mm) | 最大幅 (mm) | 最大厚 (mm) | 重量 (g) | 備考 |
| | A区 | 001 | 剥片 | ホルンフェルス | 12.00 | 17.80 | 2.40 | 0.48 | |
| 第55回3 | A区 | 002-1 | 円礫製加工具Ⅱ | ホルンフェルス | 80.60 | 52.30 | 22.60 | 105.28 | |
| 第57回8 | A区 | 002-2 | 円礫製加工具Ⅰ | 砂岩 | 74.90 | 68.70 | 34.90 | 233.44 | |
| 第55回4 | B区 | 001-1 | 円礫製加工具Ⅰ | 砂岩 | 134.60 | 41.90 | 33.60 | 273.94 | |
| | B区 | 001-2 | 剥片 | 頁岩b | 61.50 | 34.70 | 20.60 | 38.09 | |
| | SI 001 | 003 | 剥片 | 黒曜石 | 9.60 | 4.30 | 2.50 | 0.08 | |
| 第56回7 | SI 002 | 002 | 円礫製加工具Ⅰ | 安山岩 | 115.50 | 72.10 | 39.20 | 437.81 | |
| 第55回1 | SI 002 | 018 | 石鏃 | 黒曜石 | 19.10 | 12.90 | 3.20 | 0.50 | |
| 第56回6 | SI 003 | 002-1 | 円礫製加工具Ⅰ | 溶結凝灰岩 | 113.70 | 94.30 | 52.30 | 790.12 | |
| 第57回10 | SI 003 | 002-2 | 円礫製加工具Ⅰ | チャート | 118.20 | 75.70 | 51.90 | 662.87 | |
| 第57回9 | SI 003 | 002-3 | 円礫製加工具Ⅰ | 砂岩 | 63.90 | 34.40 | 16.50 | 45.71 | |
| 第55回2 | SI 004 | 001 | 剥片 | チャート | 11.20 | 20.90 | 7.80 | 1.47 | |
| 第55回5 | SI 004 | 106 | 円礫製加工具Ⅰ | 溶結凝灰岩 | 83.30 | 70.40 | 39.80 | 342.49 | |

| | | | | | | | | 林道跡(1) | |
|-------|--------|-------|---------|-----|----------|----------|----------|--------|----|
| 採回番号 | グリッド | 遺物番号 | 器種 | 石材 | 最大長 (mm) | 最大幅 (mm) | 最大厚 (mm) | 重量 (g) | 備考 |
| 第73回1 | SK 003 | 001-1 | 円礫製加工具Ⅰ | 安山岩 | 140.50 | 62.90 | 43.20 | 576.71 | |
| 第73回2 | SK 003 | 001-2 | 円礫製加工具Ⅰ | 砂岩 | 167.10 | 68.90 | 57.90 | 789.69 | |

| 石種 | 区 画 | | | | | | | | | | | | 棟 目 | | | | | | | | | | | |
|-------|-----|---|---|---|---|---|-----|---|---|---|---|---|-----|---|---|---|---|---|-----|---|---|---|---|---|
| | 北 北 | | | | | | 南 南 | | | | | | 東 東 | | | | | | 西 西 | | | | | |
| | a | b | c | d | e | f | a | b | c | d | e | f | a | b | c | d | e | f | a | b | c | d | e | f |
| 大木立 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| アランドウ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1C | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2C | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 3C | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 4C | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 5C | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2B | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 3B | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 4B | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 3D | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 4D | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 5D | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 3E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 4E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 5E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2F | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 3F | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 4F | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 5C | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 4C | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 3E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 4E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 3E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 3E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 4E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 5E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 6E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 7E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 8E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 9E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 10E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 11E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 13E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 14E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 15E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 16E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 19E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 20E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 21E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 22E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 23E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 24E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 25E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 26E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 27E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 28E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 29E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 30E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 31E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 32E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 33E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 34E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 35E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 36E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 37E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 38E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 39E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 40E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 41E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 42E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 43E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 44E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 45E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 46E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 47E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 48E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 49E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 50E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 51E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 52E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 53E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 54E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 55E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 56E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 57E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 58E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 59E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 60E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 61E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 62E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 63E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 64E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 65E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 66E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 67E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 68E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 69E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 70E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 71E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 72E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 73E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 74E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 75E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 76E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 77E | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

第6表 林道跡(2) 堅穴住居出土土器観察表

| 遺物番号 | 埋蔵番号 | 器種 | 遺存度(%) | 口径(cm) | 器高(cm) | 底径(cm) | 胎土 | 焼成 | 外面色調 | 内面色調 | 特徴 | 出土状況 |
|------|-------|------|--------------------------|--------|--------|--------|-------------------------------------|----|------------------|----------------|---------------------|------|
| S001 | 第5801 | 杯 | 全体の20% | (12.4) | 2.4 | (7.4) | 砂粒(少量) 針状物質 (少量) | 良好 | 黄い赤褐色～ 灰褐色 | にぶい褐色～ 灰褐色 | | |
| S001 | 第5802 | 杯 | 全体の20% | (12.4) | 3.2 | (7.0) | 砂粒(少量) 針状物質 (微量) | 良好 | にぶい褐色 | 灰褐色 | | |
| S001 | 第5803 | 杯 | 全体の20% | (12.4) | 3.4 | (7.8) | 砂粒(少量) 針状物質 (微量) | 良好 | 灰褐色 | 灰褐色 | | |
| S001 | 第5804 | 台付甕 | 内部30% | - | (5.0) | (10.9) | 砂粒(多量) 白色(多量) 3～5mmの小石を含む | 普通 | にぶい褐色 | にぶい赤褐色 | 内外面磨減していて調整不明(ボロボロ) | 床面 |
| S001 | 第5805 | 甕 | 口縁部の破片 | - | (3.5) | - | 砂粒(少量) | 良好 | にぶい赤褐色 | にぶい褐色 | | |
| S001 | 第5806 | 甕 | 口縁部の破片 | - | (3.5) | - | 砂粒(中量) 針状物質 (微量) | 良好 | 灰褐色 | 灰褐色 | | 覆土 |
| S001 | 第5807 | 甕 | 口縁部の破片 | - | (5.3) | - | 砂粒(多量) | 良好 | 灰褐色 | にぶい赤褐色 | | |
| S001 | 第5808 | 瓶密器蓋 | 破片 | - | - | - | 砂粒(少量) | 良好 | 灰白色 | にぶい黄褐色 | | 覆土 |
| S002 | 第5901 | 杯 | 全体の25% | (12.8) | 4.7 | (8.6) | 砂粒(中量) | 良好 | にぶい褐色 | にぶい褐色～ 赤褐色 | 内外面磨減していて調整不明 | 覆土 |
| S002 | 第5902 | 杯 | 全体の60% | 12.7 | 3.7 | 8.2 | 砂粒(中量) 針状物質 (少量) | 良好 | にぶい褐色 | にぶい褐色 | 内外面磨減していて調整不明 | 床面 |
| S002 | 第5903 | 杯 | 全体の30% | 17.2 | 3.6 | (12.8) | 砂粒(中量) 針状物質 (中量) | 良好 | 灰褐色 | にぶい褐色 | | 覆土 |
| S002 | 第5904 | 甕 | 全体の40% | (20.6) | (35.5) | - | 砂粒(多量) | 良好 | にぶい赤褐色～ 灰褐色 | 灰褐色 | 内外面磨減している | 床面 |
| S002 | 第5905 | 甕 | 口縁部95% 胴部40% | 23.4 | 21.2 | - | 砂粒(多量) 3～5mm の小石を含む | 良好 | 灰褐色～ 灰褐色 | にぶい褐色～ 赤褐色 | | 覆土 |
| S002 | 第5906 | 瓶密器蓋 | 破片 | - | - | - | 砂粒(少量) | 良好 | 灰色 | 灰色 | | 床面 |
| S003 | 第6101 | 杯 | 全体の30% | (14.7) | 3.5 | 8.6 | 砂粒(中量) 赤色粒(少量) | 良好 | にぶい褐色～ 赤褐色 | にぶい赤褐色～ 赤褐色 | 内外面磨減していて調整不明 | 床面 |
| S004 | 第6201 | 杯 | 定形 | 11.4 | 3.3 | - | 砂粒(中量) | 良好 | にぶい褐色～ にぶい赤褐色 | にぶい褐色 | 内外面黒色処理 | 覆土 |
| S004 | 第6202 | 杯 | 全体の60% | 11.8 | (3.4) | - | 砂粒(中量) 赤色粒 (少量) | 良好 | にぶい褐色 | 灰褐色 | 内外面黒色処理 | 覆土 |
| S004 | 第6203 | 杯 | 定形 | 13.0 | 3.3 | - | 砂粒(中量) 赤色粒 (微量) | 良好 | にぶい褐色～ 灰色 | にぶい褐色 | 内外面黒色処理 | 覆土 |
| S004 | 第6204 | 杯 | 全体の20% | (13.8) | (3.6) | - | 砂粒(中量) | 良好 | にぶい褐色 | にぶい褐色 | 内外面黒色処理 | 覆土 |
| S004 | 第6205 | 杯 | 全体の25% | (13.0) | (3.9) | - | 砂粒(中量) 赤色粒(微量) 針状物質 (少量) | 良好 | 灰色～ 灰褐色 | 灰色～ 灰褐色 | 内外面黒色処理 | 覆土 |
| S004 | 第6206 | 杯 | 全体の40% | (12.8) | (4.0) | - | 砂粒(中量) | 良好 | にぶい褐色 | にぶい褐色 | 内外面磨減していて調整不明 | 覆土 |
| S004 | 第6207 | 高杯 | 脚部の一部 | - | (5.8) | - | 砂粒(中量) 赤色粒 (微量) | 良好 | にぶい赤褐色 | 灰赤色 | | |
| S004 | 第6208 | 杯 | 口縁部10% 底部50% | (16.4) | (3.0) | - | 砂粒(多量) | 良好 | にぶい褐色 | にぶい褐色 | | 覆土 |
| S004 | 第6209 | 瓶密器蓋 | つまみ基 | - | 2.6 | - | 砂粒(少量) | 良好 | 灰褐色 | 暗灰色 | | |
| S004 | 第6210 | 瓶密器蓋 | 破片 | - | - | - | 砂粒(少量) | 良好 | 暗灰色 | 暗灰色 | | |
| S004 | 第6301 | 甕 | 口縁部50% | 11.8 | (5.1) | - | 砂粒(多量) 赤色粒(少量) 2～3mmの小石を含む | 良好 | 赤褐色 | 灰赤色 | 内外面ボロボロと面れ調整がわからない | |
| S004 | 第6302 | 甕 | 口縁部40% 胴部90% 底部70% | (13.6) | 14.6 | 6.6 | 砂粒(多量) 赤色粒(多量) | 良好 | にぶい黄褐色 | にぶい黄褐色 | 内外面磨減している | 覆土 |
| S004 | 第6303 | 甕 | 胴部40% | - | (17.6) | - | 砂粒(中量) 赤色粒(少量) 1mm～ 2mmの小石を含む | 良好 | 灰褐色～ 暗灰色 | にぶい褐色 | 内外面磨減していて調整不明 | |
| S004 | 第6304 | 瓶 | 全体の70% | 25.3 | 27.6 | 7.4 | 砂粒(中量) 赤色粒(中量) | 良好 | にぶい黄褐色 | にぶい褐色 | 内外面磨減していて調整不明 | 覆土 |
| S004 | 第6305 | 甕 | 全体の80% | 17.4 | (27.5) | - | 砂粒(多量) 赤色粒(少量) 2～3mmの小石を含む | 良好 | にぶい褐色～ にぶい赤褐色 | にぶい褐色 | 内外面磨減していて調整不明 | 覆土 |
| S004 | 第6306 | 甕 | 口縁部95% 胴部50% 底部50% | 19.0 | - | (5.9) | 砂粒(多量) 赤色粒(少量) 2～3mmの小石を含む | 良好 | にぶい黄褐色～ にぶい褐色 | にぶい赤褐色～ 灰褐色 | 内外面磨減していて調整不明 | |

写 真 图 版



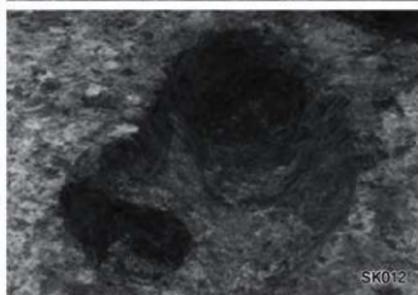
調査前近景



確認調査風景



集中2J





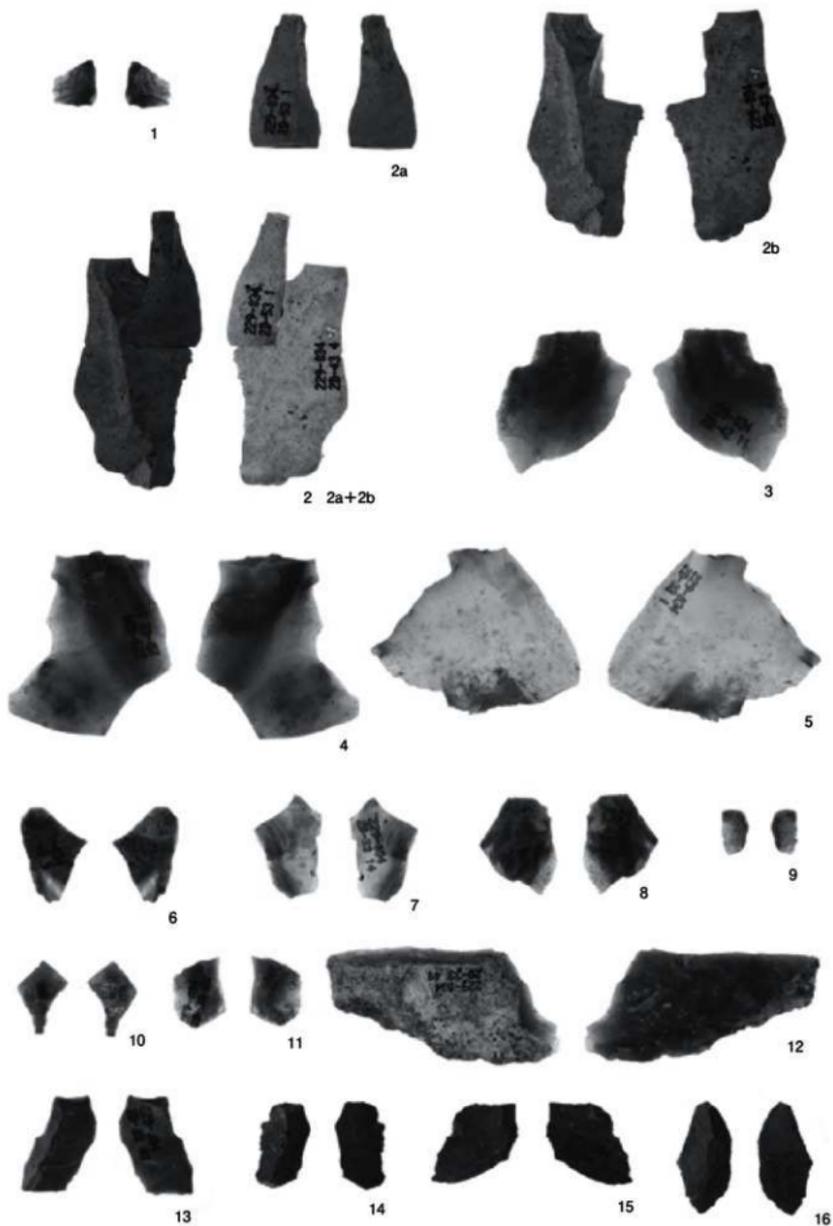
SS001



SS002・003



SS004



集中2D出土石器 (1)



17



18



19



20 20a+20b



20a



20b



21 21a 21c~21e

21b

集中2D出土石器 (3)



22



23



24



25



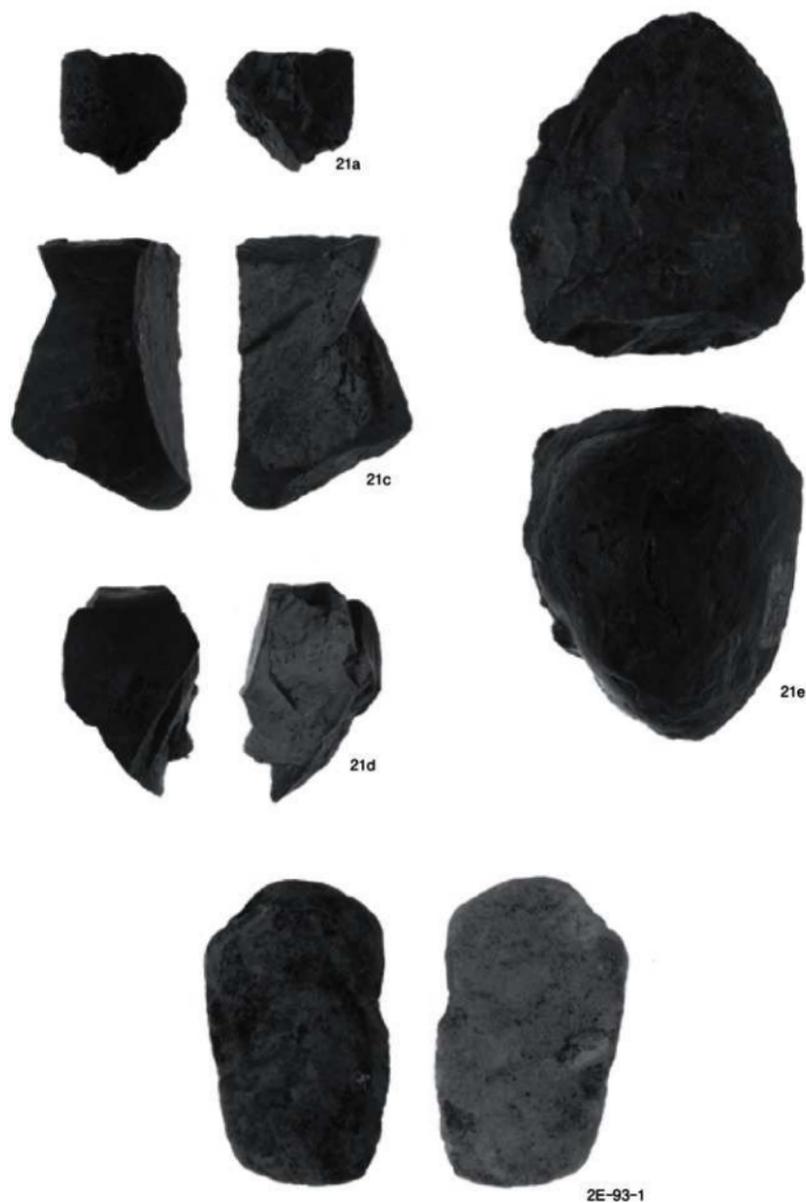
26



27



28



集中2D出土石器 (5)・集中2E出土石器 (1)



2E-93-1



2E-92-2 3a



3a+3b



2E-92-1 3b



1



2



3



4



5



7



6



8



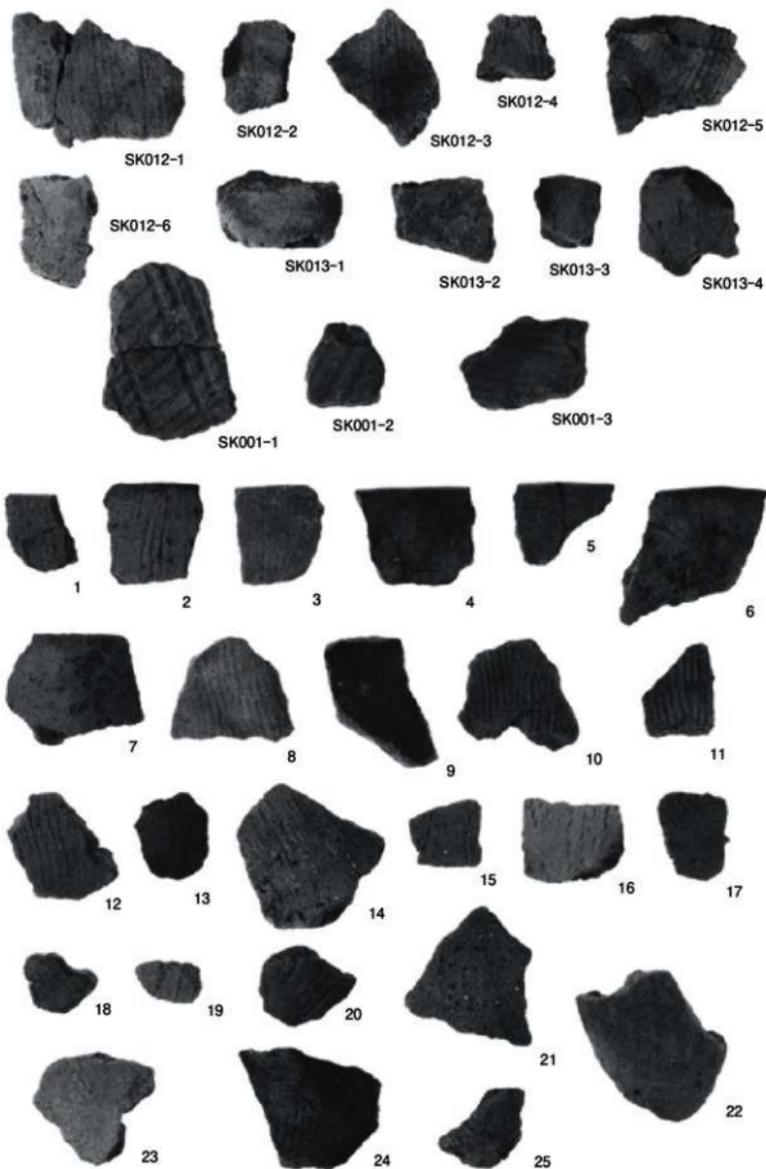
8a



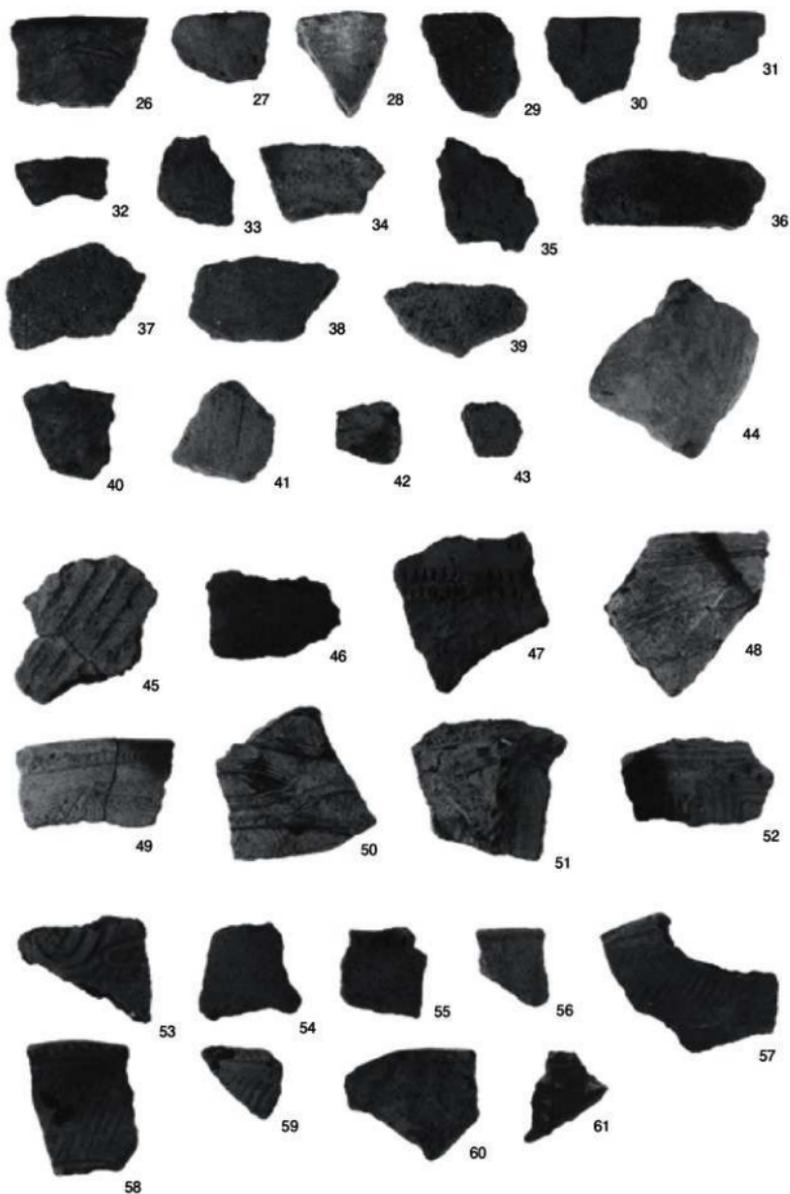
8b



集中27出土石器 (2)



遺構出土縄文土器・遺構外出土縄文土器(1)



遺構外出土縄文土器 (2)



遺構外出土石器



SK002



SK006



SK009



SI001



SI001



SI002



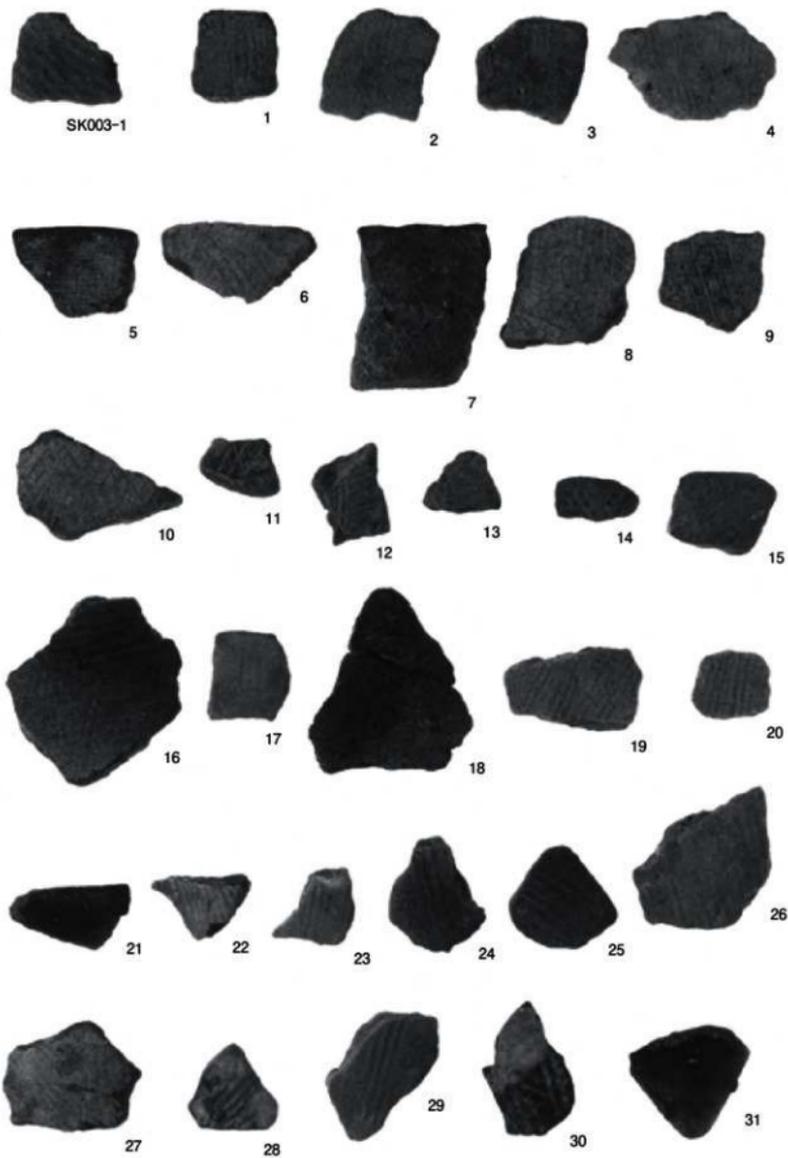
SI003



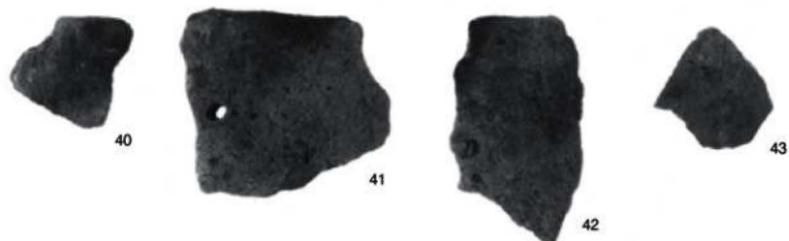
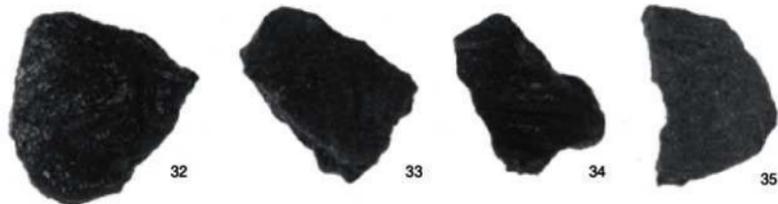
SI004

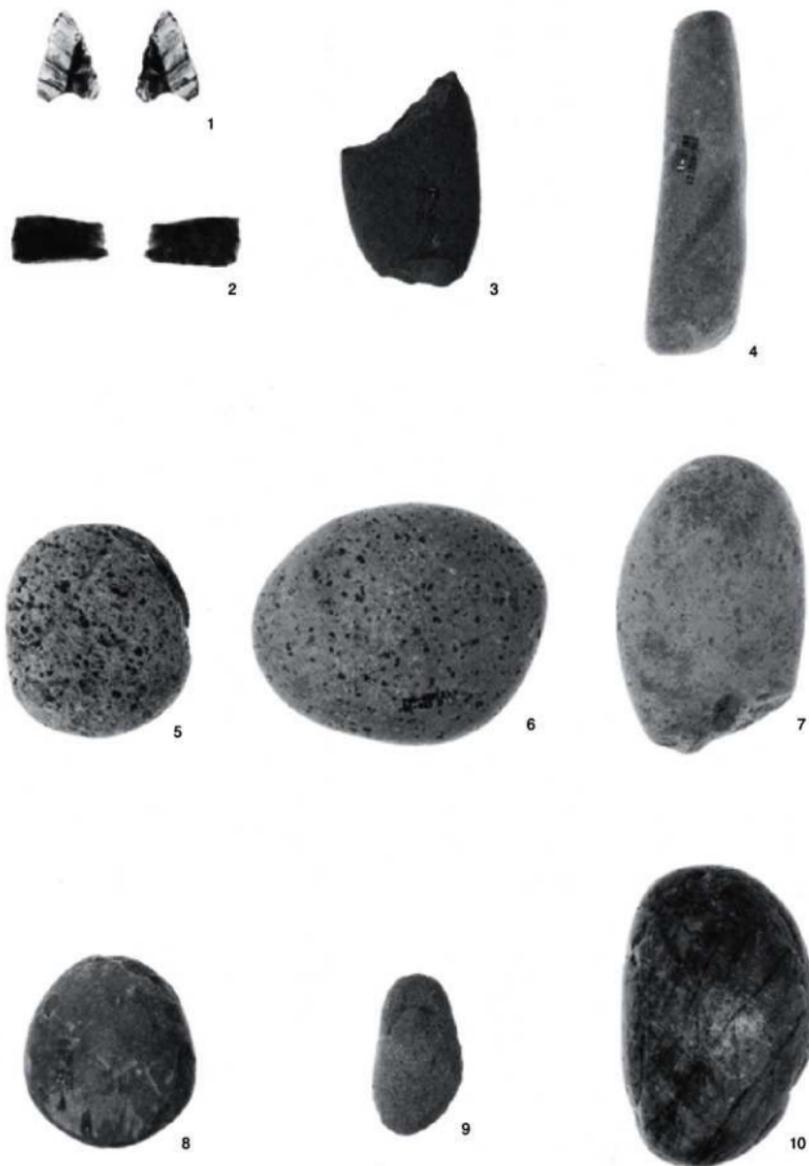


SI004

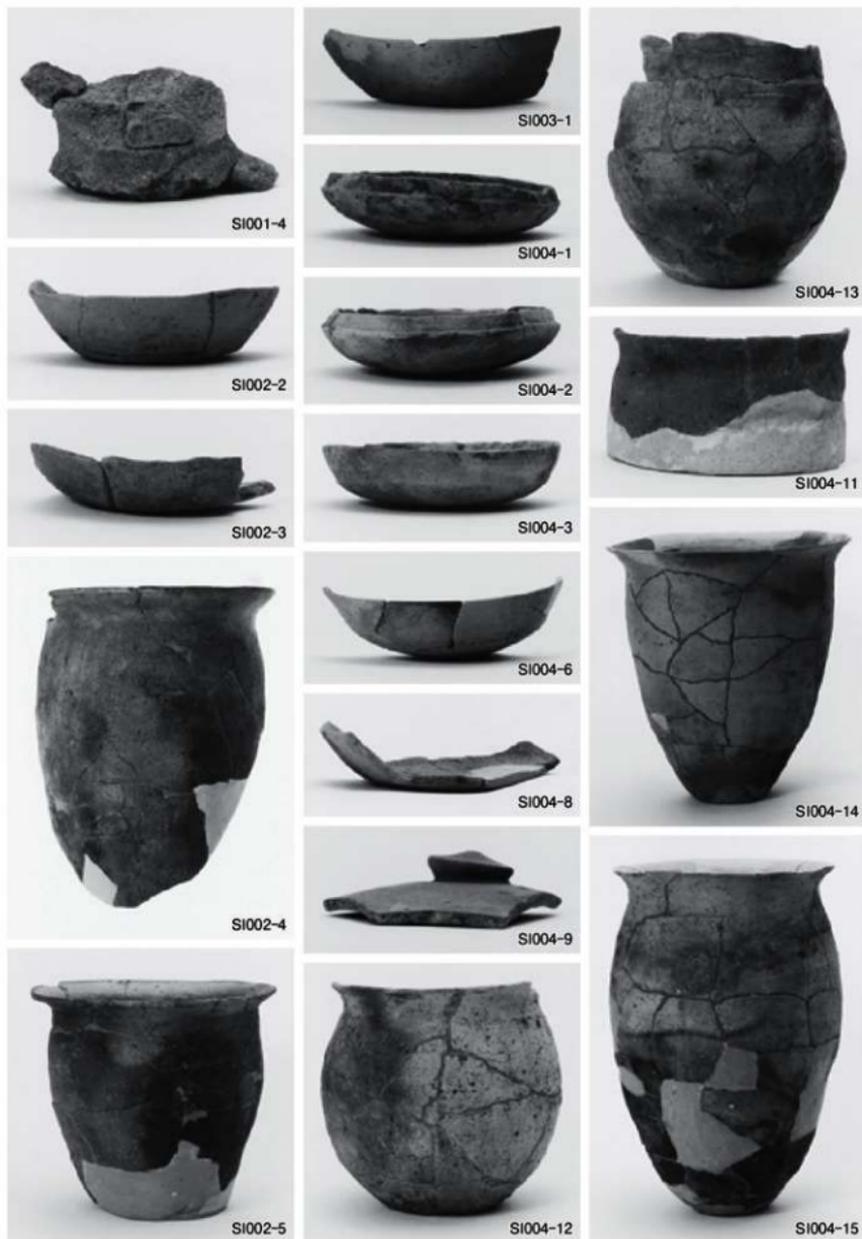


遺構出土縄文土器・遺構外出土縄文土器 (1)





遺構外出土石器



竪穴住居出土遺物 (1)



竪穴住居出土遺物 (2)・遺構外出土遺物

報告書抄録

| | | | |
|--------|--|--|--|
| ふりがな | しゅとけんちゅうおううれんらくじどうしゃどうまいぞうふんかざいちょうさほうこくしょ | | |
| 書名 | 首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書 | | |
| 副書名 | 木更津市林道跡・袖ヶ浦市林道跡 | | |
| 巻次 | 14 | | |
| シリーズ名 | 千葉県教育振興財団調査報告 | | |
| シリーズ番号 | 第676集 | | |
| 編著者名 | 小林清隆 | | |
| 編集機関 | 財団法人千葉県教育振興財団 文化財センター | | |
| 所在地 | 〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2 Tel. 043-424-4848 | | |
| 発行年月日 | 西暦2012年3月23日 | | |

| ふりがな 所収遺跡 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|----------------|-------------------------|-----|--------|-------------------|-------------------|--|---------|------|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| 林道跡 | 袖ヶ浦市上宮田 字南原281-11ほか | 229 | 034 | 35度 21分 26秒 | 140度 1分 19秒 | 20031201～ 20040130 20040301～ 20040319 | 4,300㎡ | 道路建設 |
| 林道跡(1) | 木更津市上根岸 字花ノ木403-11ほか | 206 | 032(1) | 35度 21分 29秒 | 140度 1分 51秒 | 20040801～ 20040917 | 1,400㎡ | 道路建設 |
| 林道跡(2)・ 林城跡 | 木更津市上根岸 字熊ノ面444-2ほか | 206 | 032(2) | 35度 21分 28秒 | 140度 1分 43秒 | 20040701～ 20040917 | 11,300㎡ | 道路建設 |
| 林道跡(3) | 木更津市上根岸 字内輪479-11ほか | 206 | 032(3) | 35度 21分 22秒 | 140度 1分 30秒 | 20040106～ 20040319 | 8,800㎡ | 道路建設 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|----------------|------------|---------------|---------------------|-------------------------|-------------------------------|
| 林道跡 | 包蔵地 | 旧石器時代 | 石器集中地点2か所 | ナイフ形石器、彫器、 剥片、石核、礫 | |
| | 集落跡 包蔵地 | 縄文時代 | 炉穴・土坑11基 | 縄文土器 石器 | |
| 林道跡(1) | 集落跡 | 縄文時代 | 土坑3基 | 石器 | |
| 林道跡(2) ・林城跡 | 集落跡 包蔵地 | 縄文時代 | 炉穴・土坑6基 | 縄文土器 石器 | |
| | 集落跡 | 古墳時代～ 奈良時代 | 竪穴住居4軒、土坑 1基、溝1条 | 土師器、須恵器、鉄製 品、石製品、土製品 | 斜面部に形成された狭い平 場に竪穴住居が構築された。 |
| | 城跡 | 中世 | 平場 | | |
| 林道跡(3) | 包蔵地 | 旧石器時代 | 石器集中地点3か所 | ナイフ形石器、剥片、 剥片、石核、礫 | |
| | 集落跡 | 縄文時代 | 炉穴・土坑4基 | 縄文土器、石器 | |
| | 墓域 | 奈良時代 | 方形周溝状遺構4基 | | |

| | |
|----|--|
| 要約 | 林道跡は調査の結果、旧石器時代の石器集中地点5か所をはじめ、縄文時代早期を主体とする遺物が検出され、遺跡全域にこの時期の活動痕跡が広がる状況が認められた。また、古墳時代後期から奈良時代にかけて斜面部に構築された竪穴住居の存在を明らかにした。さらに、奈良時代の墓域が集落から離れ設けられていた。 |
|----|--|

千葉県教育振興財団調査報告 第676集

首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書14

—木更津市林遺跡・袖ヶ浦市林遺跡—

平成24年3月23日発行

| | |
|-----|---|
| 編 集 | 財団法人 千葉県教育振興財団 文化財センター |
| 発 行 | 国土交通省関東地方整備局 千葉県国道事務所 千葉県稲毛区天台5丁目27番1号 財団法人 千葉県教育振興財団 四街道市鹿渡809番地の2 |
| 印 刷 | 能登印刷株式会社 東京営業所 千代田区神田和泉町1-6-2 |
